

30110 ✓

教科書文庫

3
210
41-1889
25000 03753

M22.
1889

Kodak Gray Scale

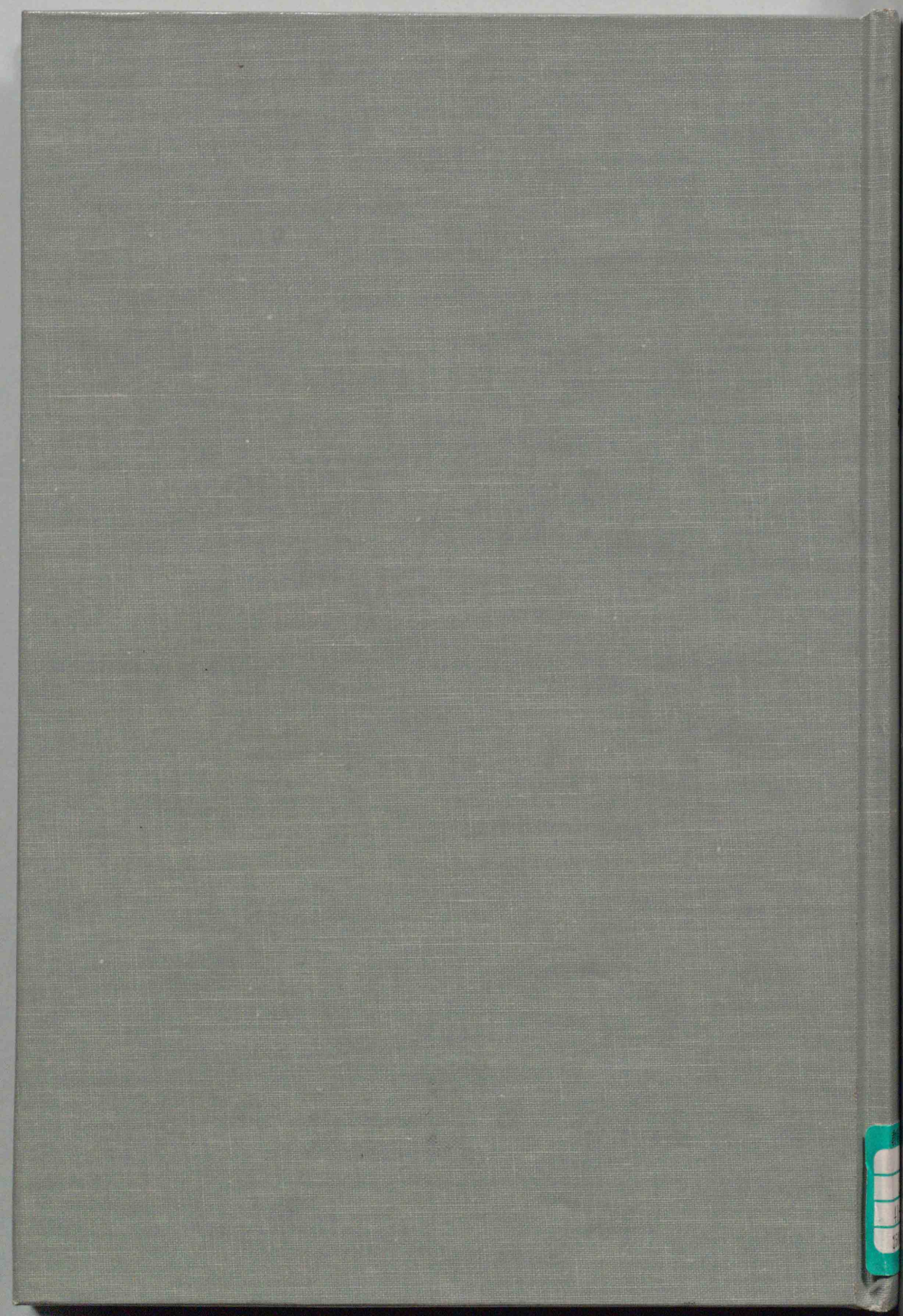
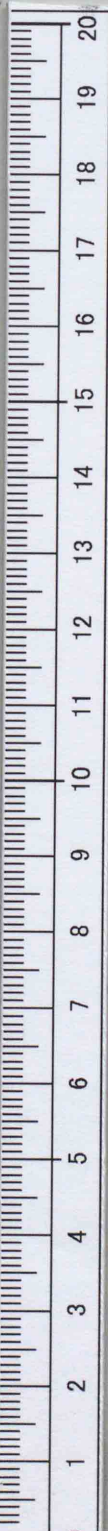
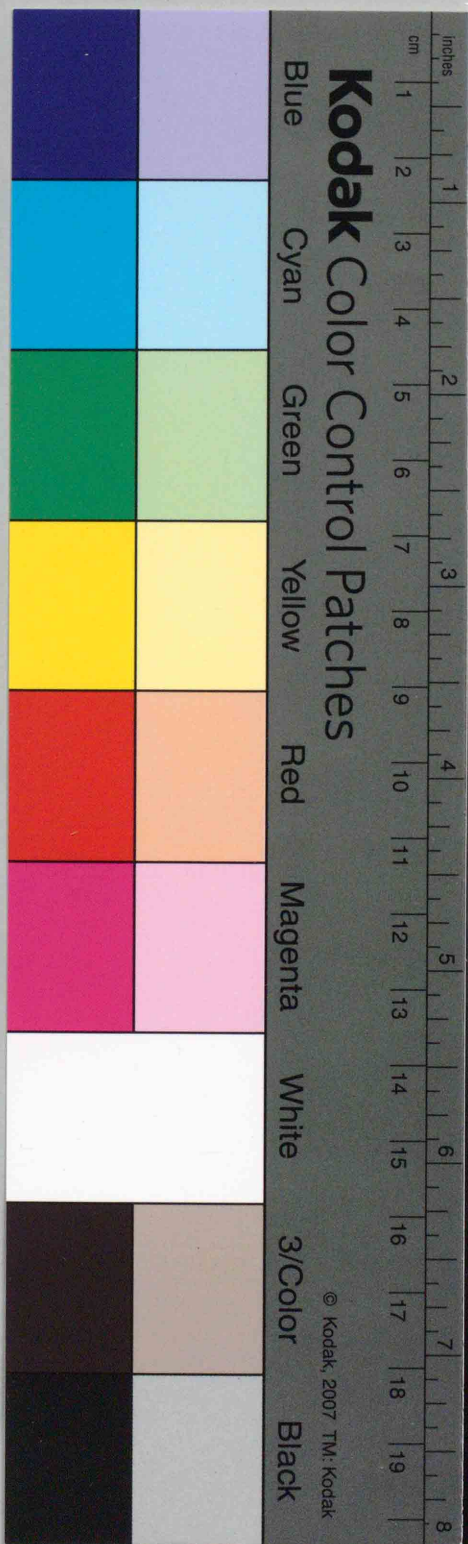


© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫

3

210

41-1889

2500003753

記号
番号
一部/册数

1437
1

210類
163號
2

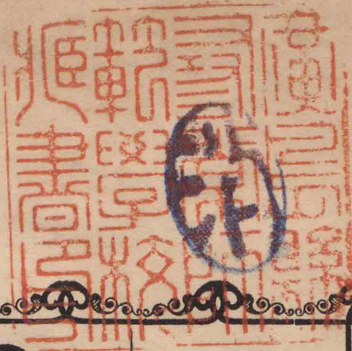
明治廿一年十月發行

日本史綱

嵯峨正作編

卷中

広島大学図書
2500003753

嵯峨正作編

日本史綱
卷中

嵯峨氏藏版
高山房

日本史綱中卷目錄

中卷

第四篇 中古ノ部

從紀元大約千三百五十年
至同 大約千八百四十年

頁

大化ノ新政

律令ノ撰定及其効力

藤原氏

源平二氏

一七
五

第五篇

文學

八

佛教

七

美術

(第一)繪畫
(第四)陶器

(第二)音樂
(第五)漆器

(第三)彫刻

第一 甲冑
第二 刀劍及其附屬品
第三 神社佛閣祭器形像ノ類

八

廣師男登録者號
第 4 51 号
3753

2/0類
163号
2

政治
風俗

(第一)官制 (第二)兵制 (第三)法制
(第四)農制 (第五)幣制

一一五
一九三

日本史綱中卷

第四篇

中古ノ部

從紀元大約千三百五十年
至同 大約千八百四十年

大化ノ新政

嵯峨 正作 編

蘇我氏既ニ亡ブルニ及ビテ皇極帝位ヲ孝德帝ニ譲リ玉ヒ中大兄皇子
其太子トナレリ是レ將來如何ナル政ヲ施サレシ乎當ニ注目スベキノ
時期ナリ

抑姦猾暴逆ノ入鹿既ニ誅セラレテ廟堂ノ上ニ一權臣消失シタリト雖
モ千有餘年封建制度繼續シテ事々物々世襲ノ姿ナリシガ故ニ地方族
長ノ狀ヲ顧ミレバ兵馬ノ權ヲ有シ勢力膨脹シテ或ハ王命ニ從ハザル
モノアリ生産工業ノ狀ヲ顧ミレバ工人ノ能否ニ關セズ世々先人ノ業

縣第一一五号
和 歷 史
一部無數

孝德帝即位
之世ノ世態
地方分權

大化ノ新政

中央集權ノ
制度ヲ立ツ
ルノ急務

ナ墨守シ遂ニ事業ノ進歩ヲ妨グルノ勢アリ法律ノ權ハ全國ニ普及セザルガ如ク租稅ノ制ハ四方畫一ナラザルガ如シ概シテ之ヲ言ハゞ地方族長ノ權重クシテ中央政府ノ權甚輕シ此ノ如キノ時ニ當リテ廟堂ノ有司猶從來ノ政路ヲ追フカ然ラザルカハ未タ智者ヲ俟タズシテ知ルベキナリ

既ニ從來ノ政路ヲ改革スベキノ急ナルヲ知ルニ於テハ徑ニ之ニ反スルノ政路ヲ取ルヲ當時政府ノ最要スル所トス何トナレバ政府ハ地方分權ノ害ヲ感スルヲ頗ル大ナルガ故ニ之ヲ矯正セントスルニハ必中央集權ノ手段ニ賴ラザル可ラザレバナリ況ンヤ中大兄皇子中臣鎌足ハ蘇我氏ヲ斃スノ計畫中南淵請安ニ師事スルヲアルニ於テチヤ請安ハ唐土ニ留學シテ太宗ノ制定スル中央集權ノ制度ヲ目撃セル人ナリ

改新ヲ行フ
ノ手續

然ラバ此二人必其制度ヲ傳聞スル所アラシ

是ニ於テ中大兄中臣鎌足ハ從來ノ地方分權ヲ廢シ新ニ中央集權ノ制ヲ行ハントシ之ヲ爲スニハ唐土ノ制度最整備セルヲ以テ移シテ之ヲ我國ニ行フノ大利アルヲ知り遂ニ帝ニ勸メテ唐制ニ倣ヒ初テ年號ヲ大化ト曰ヒ大臣大連ノ官ヲ罷メ更ニ左右大臣及ヒ内臣ヲ置キ阿部倉梯麻呂ヲ左大臣ニ蘇我倉山田石川麻呂二人皆蘇我入鹿ヲ誅スルニ功アルモノナリヲ右大臣ニ中臣鎌足ヲ内臣ニ任ス是ヲ改革ノ初トス

此等ノ功臣廟堂ニ集リテ前途ノ改革ヲ計畫セシカ尾大不掉ノ當時ニ在リテ地方族長ノ權力ヲ殺ガムトスルニハ其手段極メテ巧妙ナルニ非ンバ變亂得テ免ル可ラズ此等ノ有司善ク之ヲ知ル故ニ先ツ一方ニ於テハ民心ヲ得他ノ方ニ於テハ其思想ヲ變シ然後其力ニ藉リテ改

民心ヲ得民
心ヲ變スル

ヲ以テ改新
ヲ行フノ手
段トス

革ヲ施サムトセリ是ニ於テ帝臣、連、伴造ニ詔シテ民ノ患苦スル所ヲ
問ヒ玉ヒ或ハ鐘匱ヲ闕ニ設ケテ民ノ冤枉アルモノヲシテ牒ヲ投シ鐘
ヲ撞カシメ玉ヒ或ハ地方富豪ノ徒ヲ戒メテ貧民ノ土地ヲ兼并スルヲ
禁シ玉ヒ其爲シ玉フ所一トシテ民心ヲ得ルノ計ヲラザルハナシ然レ
モ地方族長ハ久ク國土ニ據リ擅ニ其民ヲ有シ相視ル君臣ノ若シ故ニ
一朝族長ヲ廢セバ民或ハ舊ヲ慕フノ恐アリ是ニ於テ十師沙門福亮、惠
雲、常安、靈雲、
一朝族長ヲ廢セバ民或ハ舊ヲ慕フノ恐アリ是ニ於テ十師沙門福亮、惠
雲、常安、靈雲、
惠至、僧晏、道登、惠隣、惠妙、惠隱ヲ立テ十師トナ立テ法頭來日臣某、三輪色夫
君、額田部朝ヲ以テ
シ能ク衆生ヲ教導シ釋教ヲ脩行セシム
法頭ナ置キ又地方ノ寺刹ヲ修造シ寺司寺主ヲ命シ以テ佛德ノ理ヲ説
トス
キテ其主ヲ思フノ心ヲ他ニ轉セシムルヲ務メ而シテ其間ニ又使テ四
方ニ遣ハシテ郡國ノ刀甲弓矢等種々ノ兵器ヲ收メテ以テ地方ノ兵力
ヲ殺グ而シテ人民既ニ悅ビ其思想既ニ變シ又兵器既ニ收ムルニ及ビ

郡國ノ兵器
ヲ收ム

封建ヲ廢シ
テ土地人民
ヲ朝廷ニ收
ム
國司、郡司、
里長

テ乃チ新制ノ詔ヲ發シテ歷代置カレシ所ノ子代ノ民、處々ノ屯倉ヲ
廢シ臣、連、國造、稻置等ノ部曲ノ民及ビ處々ノ田莊ヲモ收メテ公民
公地トシ全國ニ郡里ヲ置キ五十戸ヲ以テ一里ト定メ四十里ヲ大郡
トシ三十里以下四里以上ヲ中郡トシ三里ヲ小郡トス里ニハ里長一
人郡ニハ郡司一人國ニハ國司一人ヲ置キ里ハ戶務ヲ統ベ郡ハ里務ヲ
統ベ國ハ郡務ヲ統ベテ各其部民ヲ治メシム而シテ國司ハ之ヲ京師ヨ
リ派遣ス然レモ猶斯ク俄ニ地方豪族ノ領邑ヲ收メバ或ハ激變ノ生ス
ルアラシキ慮リ食封此食封ハ唯段給ヲ與フルノミ
ニシテ土地ヲ給スルニ非ス若クハ布帛ヲ賜ヒ
テ自ラ給スルニ乏カラザラシメ且郡司ハ概テ其地ノ國造ヲ以テ之ニ
充テ以テ亂源ヲ杜ダリ是ニ於テ族長ノ權大ニ衰ヘテ法律ノ權又漸ク
廣マル又全國ノ土地人民既ニ公地公民トナルヲ以テ更ニ班田收授ノ

班田收授ノ
法

租庸調

法ヲ設ケ男子ニハ毎ニ二段ノ田地一段ノ廣サ十二歩ニシテ長サ三十歩ナリ 女子ニハ毎ニ其三分ノ二ヲ給ス是ニ於テ各人得ル所ノ田地均一トナル又年貢ハ租庸調ノ法ヲ行ヒ租トテ田一段毎ニ稻二束二把ヲ租額ト定メ一段ノ田地ヲ耕ス時ニハ概テ五十束ノ稻ヲ得ルヲ以テ此租額ハ收穫ノ二十五分ノ一強ニ當ル 其外ニ猶調トテ其土地ノ生スル所ニ從ヒ結キヌ、綿ワタ、絹キヌ、布ヌメ、鹽、油、鹿角、鳥羽、魚、介、菜、藻ノ類ヲ徵集シ又正丁ヲ役スルハ年二十日ト定メ若シ出ル能ハザルモノハ庸トテ布ヲ出サシム是ニ於テ全國ノ稅率一トナル又生産工業ノ世襲ヲ廢シテ工人ノ好ム所ヲ營ムヲ許ス是ニ於テ事業進步ノ基礎始テ立ツ又關塞、斥候、防人ヲ置キテ兵權ヲ收ム是ニ於テ朝廷ノ權加重シ然レモ千有餘年ノ因襲ヲ一朝ニ廢スルコト頗難シ故ニ其後再三更ニ敕ヲ下シテ朝旨ノ在ル所ヲ知ラシメ玉フト雖モ地方ノ族長猶部民ヲ擁有シテ容易ニ

産業ヲ人民ノ自由ニ任ス
關塞、斥候、防人

八省百官

解カザルモノアリ後(大化五年)八省百官ヲ置キ冠位ヲ制スルニ及ビテ多ク此等ノ族長ヲ登用シ玉ヒケレハ孝德紀大化二年ノ章ニ詔シテ曰ク(上)累今以テ汝等ヲ使シ仕(狀)者ハ改メ去テ舊職ヲ新設シ百官ヲ及著ニ位階ヲ以テ官位ヲ叙セン云々ト 是ニ於テ中央集權ノ制初テ成ル今日ニ至ルマデ有名ナル大化ノ新政即チ是ナリ

律令ノ撰定及其効力

大化ノ新政ニ繼ギテ生セル史上現象ノ著キ者ハ律令ノ撰定トス蓋シ大化ノ政ニ於テ地方分權ヲ廢シテ中央集權ノ制ト爲スト雖モ當時創業ニ屬スルヲ以テ法度未タ整備セザルモノアリ故ニ又此撰定アリ抑余上卷ニ於テ既ニ述ベシガ若ク上古ノ間律令ニ關シテ未タ筆冊ニ明記シタル一定ノ有字法ナルモノアラズ推古帝ノ世ニ及ビテ上宮太子ノ憲法十七條出ツト雖モ其旨トスル所ハ重ニ釋教ニ本ツキ且條項僅

大化ノ新政ニ繼ギテ生セル史上現象

少ニシテ未タ社會ノ法制ト稱ス可ラズ然レモ其末期ヨリ中古ノ初ニ至リ本邦唐土ノ交通大ニ開ケ邦人ノ彼ニ至ル甚多シ時ニ唐土ノ貞觀中ニ會シテ太宗房玄齡、杜如晦、魏徵等ト勵精治ヲ圖ル際ナレバ其典章文物ノ美復タ夫ノ三韓ノ比ニ非ルナリ故ニ天智帝以來律令ノ撰定ハ本朝ノ注目スル所トナリ數帝相繼ギテ最意ヲ此ニ致シ玉ヒ竟ニ元正帝ニ及ビテ筆冊ニ明記シタル一定ノ有字法ヲ大成スルニ至レリ之ヲ要スルニ律令ノ撰定ハ社會ノ秩序ヲ整理シ中央政府ノ權力ヲ鞏固ニスルモノナリ今左ニ其沿革ヲ畧叙セントス

所謂律令

命トハ今ノ條令ニシテ未然ノ事ヲ教ユルモノナリ律トハ今ノ法律ニシテ令ニ違フモノヲ責ムルモノナリユヘニ令ハ天下ノヲ定メ置キタルモノナリ律トハ天下ノ人罪アル時ニハ斯ノ如キ罪ハ流罪ニ處シ斯ノ如キ事ハ徒罪ニ處スト云フノ區別ヲ示スモノナリ後日ニ至リテ又格式ト云フモノアリ格トハ律令ノ古ニ行ハレテ今ニ用ヒ難キ

事共ヲ取捨シ時勢ヲ量リ世風ヲ斟ミテ建テタルモノニシテ臨時ノ御觸ナリ式トハ令ノ支流ニシテ百官ノ官府ニテ行フ作法ノ闕ヲ補フモノナリ譬ハ禮節ノ闕ヲ式部式ニ補ヒ賦ノ初テ起ルハ天智帝ノ時ニ在リ帝役ノ遺ヲ民部式ニ拾フノ類ナリ即位ノ元年内臣中臣鎌足ニ勅シテ律令ヲ撰セシメ玉フ鎌足乃チ高向玄理僧旻等ト唐禮ニ據リテ本邦ノ舊章古典ヲ損益シ冠位制度ヲ定メ十年ニ至リテ成ル詔シテ天下ニ頒行セシム凡ソ二十二卷是ヲ近江朝廷ノ令ト謂フ帝近江滋賀ニ都シ玉ヘルヲ以テナリ此令今日ニ傳ハラズ是ニ於テ中央集權ノ制益鞏固ナラムトシケルニ會弘文帝嗣キ立チ玉ヘルニ及ビテ繼統上ノ事ヨリ叔父大海人皇子後ニ天武帝ト曰フト相容レ玉ハズシテ遂ニ壬申ノ亂起レハ中央集權ノ制將ニ復タ紊レントス然レモ未タ幾ナラズシテ官軍利ヲ失ヒテ帝崩シ玉ヘバ僅ニ二月ニシテ事平キ大影響ヲ及ボサズシテ已ミヌ大海人皇子ハ天智ノ皇弟ニシテ其即位ノ元年立テ東宮トナリ玉フ時ニ年四十七ナリ然レモ

天武帝近江ノ令ヲ修正シ玉フ

天智ノ皇子ニ亦大友皇子アリテ博學明悟ノ御方ナレバ天智ハ之ヲ立ツルノ勅慮アルニヤ四年太政大臣トシテ機務ニ熟練セシメ玉ヘリ時ニ年二十五ナリ會々天智不豫ナリ玉ヘバ大友未ダ東宮ニ定マラザルヲ以テ大海人ニ屬スルニ後事ヲ以テシ玉ヒシニ大海人固ヨリ天智ノ意ハ大友ニ在ルヲ知リ玉ヘバ固辭シテ僧トナリ吉野ニ入り玉フ是ニ於テ大友立テテ帝トナリ玉フ即チ弘文帝トス然レハ大海人ノ帝位ヲ辭シ玉ヘルハ眞意ヨリ出ルニ非ズシテ已ムヲ得ザルニ出テシナレバ固ヨリ心ニ快トシ玉ハズ弘文帝ハ亦大海人ノ儲貳タル位地ヲ奪ヒ玉ヘル様ノ姿ナレバ暫クモ油斷シ玉ハズ是ニ於テ弘文帝ト大海人トハ双方睨合ノ姿トナリ明年卒ニ破裂シテ戰爭起ル然レハ大海人ハ帝ヨリ年モ長シ政務ニモ熟シ多ク人望モアレバ紀阿閉麻呂村國男依大伴吹負等ノ若キ諸名將之ニ屬ヒリ然ルニ帝ノ方ニハ差シタル名將モナク且諸將和セズシテ味方擊等モアレバ僅ニ二月ニシテ吉野方ノ全勝トナル此戰ニシテ若シ久シク息マズムバ恰モ南北朝ノ若キモノヲ現出シテ折角進歩セントスル所ノ世運ヲ挫折シ惡果ヲ世ニ及

天武帝繼キ立チ玉フヤ近江ノ令猶未タ備ラザル所アルヲ憂ヒ玉ヒ草壁皇子ヲシテ万機ヲ攝セシメテ躬親ラ律令修正ノ任ニ當リ玉ヒ

天智帝ノ後 十一年八月ニ至リ全ク備ハリシガ

若シ持續帝立チテ三年令二十二卷ヲ諸司ニ班チ賜フコアリ即チ此令

大寶令

養老令

職官誌ニ曰ク持續所レ班ッ令二十二卷即チ夫ナリ武ノ所レ改ムル法式ニシテ而因ニ天智之所レ制スル者ト

然レ凡ソ朝廷ノ盛衰人民ノ禍福ニ大關係アル夫ノ法度ノ若キハ一二次ノ修正ヲ以テ能ク完全ノ地位ニ至ルヲ誠ニ稀レナリ故ニ文武帝ノ四年更ニ刑部親王、藤原不比等、粟田真人、毛野古麻呂等ニ勅シテ天武帝ノ律令ヲ標準トシテ更ニ律令ヲ撰セシメ玉フ明年即チ大寶元年ニ至リテ成ル乃チ之ヲ諸國ニ頒チ新令ニ據リテ政ヲ爲サシム是ヲ大寶律令ト曰フ律六卷令十一卷アリ元正帝養老二年再ヒ不比等ニ命シテ更ニ之ヲ修飾セシメ玉ヒ律令各十卷トス因リテ大寶律令ヲ稱シテ古律令ト曰ヒ養老律令ヲ稱シテ新律令ト曰フ今傳フル所是也是ニ於テ中央集權ノ勢大成ス律ノ書タル篇ヲ分ツコ十有二、令ノ書タル篇ヲ分ツコ二十七、其名ヲ擧グレバ左ノ如シ

律令ノ撰定及其効力

律名

令名

律名

令名

- | | | | |
|----------------------------|---------|---------|---------|
| (一) 名例 | (二) 衛禁 | (三) 職制 | (四) 戶婚 |
| (五) 廩庫 | (六) 擅興 | (七) 賊盜 | (八) 鬪訟 |
| (九) 詐僞 | (十) 雜律 | (十一) 捕亡 | (十二) 斷獄 |
| <small>以上全ク唐ノ律名ト同シ</small> | | | |
| (一) 官位 | (二) 職員 | (三) 神祇 | (四) 僧尼 |
| (五) 戶 | (六) 田 | (七) 賦役 | (八) 學 |
| (九) 選叙 | (十) 繼嗣 | (十一) 考課 | (十二) 祿 |
| (十三) 官衛 | (十四) 軍防 | (十五) 儀制 | (十六) 衣服 |
| (十七) 營繕 | (十八) 公式 | (十九) 倉庫 | (二十) 廩牧 |

律令撰定ノ初メヨリ其大成ニ至ルマデノ施政ノ概況

文武並進

(廿一) 醫疾 (廿二) 假寧 (廿三) 喪葬 (廿四) 關市

(廿五) 捕亡 (廿六) 獄 (廿七) 雜

其中令ハ倉庫醫疾ノ二篇亡失シテ今全カラズ律ハ僅ニ名例衛禁盜賊擅興ノ四篇ヲ存スルノミ

コレヨリ余眼ヲ轉シ實地ニ就キテ天智帝ヨリ元正帝ニ至ルマデノ施政ノ概況即チ律令撰定ノ初ヨリ其大成ニ至ルマデ大約ソ五十年間ノ施政ノ概況ヲ通覽スレバ時ニ變更ナキニ非スト雖正概シテ朝廷一方ニ於テハ益武備ヲ修メ諸國ノ正丁三分ノ一ヲ點シテ軍團ニ編シ諸國ノ私家ニ鼓鉦旗幡弓弩ノ類ヲ藏ムルヲ禁シテ其變亂ヲ豫防シ衛士ヲ京ニ置キテ禁闕ヲ守ラシメ防人ヲ邊ニ置キテ外邊ニ備フ而シテ他ノ方ニ於テハ大ニ文學ヲ獎勵シ大學國學ヲ設ケ經傳、法律、天文、算術、醫學等ノ諸科ヲ教ヘ其卒業生ヲ取リテ官ニ任ズ又官制、祿制、稅制ヲ定メ

律令ノ撰定及其効力

意ヲ縣治ニ用フ
官員數アリ
俸給額アリ
租稅重カラ

而シテ最意ヲ縣治ニ用ヒ屢巡察使ヲ諸國ニ遣ハシテ國郡司ノ能否ヲ察セシム又官員數アリ俸給額アルヲ以テ租稅ノ輕ニ比シテ國庫乏キヲ告ゲズ之ニ加フルニ以上ノ歷帝務メテ節儉ヲ行ヒ玉ヘルヲ以テ水旱疾疫興作等アレハ往々賦稅ヲ免ジ玉ヒテ政府別ニ困シム所ナシ斯ノ如ク制度大ニ備リテ文弱ニ流レズ武強ニ偏セズ文武並行シテ進ムガ故ニ治綱大ニ張りテ復々反側不逞ノ徒ナシ人或ハ當時政府ノ處置ヲ謗リテ李唐ノ制ヲ襲用シテ徒ニ虛文ニ流ルトスルモノアリト雖モ要スルニ其治績アルヤ昭乎トシテ復々疑フ可ラズ古ヨリ大化ノ新政以來數十年文物典章ノ美ヲ稱スルハ全ク理ナキニ非ザルナリ文物典章ノ一時粲然タルヲ斯ノ如シト雖モ爾後佛法盛ニ行ハレテ典章ト相撞着セバ僅ニ一世ヲ出デズシテ奇異ナル現象ヲ社會ニ發スル

法令ト佛法ノ撞着

聖武帝

佛法ノ隆盛

ニ至レリ今左ニ之ヲ畧述セン

抑夫ノ佛法ナルモノハ蘇我氏ノ誅滅ト共ニ斃レズシテ益朝廷ノ保護ヲ受ケ次第ニ隆盛ニ赴キ天武帝僧尼ヲ宮中ニ安居セシメ玉ヒシコトアリ持統帝不豫ノトキ羣臣佛像ヲ造リ佛眼會ヲ開キテ帝ノ全快ヲ禱リシヲアリ然レモ猶未ダ熾ナラザルナリ聖武帝立チ玉ヘルニ及ビテ夫ノ諸帝ノ拮据經營シ玉ヒシニ由リテ四海昇平府庫充實スルノ後ヲ承ケ玉ヒ閑暇事ナケレハ遂ニ意ヲ佛法ニ用ヒ玉フコレヨリ佛法甚熾ナリ特ニ此時名僧玄昉行基ノ若キアリテ玄昉ハ内道場ニ在リテ頻ニ佛法ヲ講シ行基ハ神佛同躰ノ說ヲ首唱セバ帝益厚ク佛法ヲ信シ東大寺ヲ建チテ自ラ三寶ノ奴ト稱シ又護國滅罪ノ爲メニ國々ニ國分寺ヲ造リテ各夥多ノ寺領ヲ附シ玉フ是ニ至リテ佛教普ク海内ニ行ハレ且

寺刹ノ制作廣大巧妙殆ト神造ノ如キアリ大ニ國用ヲ費シ中原始テ凋弊ス

佛法ニ伴ハレテ養老ノ令漸ク衰フ

孝謙帝

帝佛法ヲ信シ玉ヘルヲ斯ノ如ク厚キガ故ニ其精神遂ニ行政上ニ派及シ造寺ヲ監督シテ早ク竣工フルノ有司ニハ其官ヲ世ニスルヲ許シ玉ヘルヲアリ 帝敕シテ夫ノ國分寺ヲ造ラシメ玉フ時郡司役ヲ董シテ定故ナクシテ死罪以下ヲ免シ玉ヘルヲアリ 帝嘗テ京中ヲ巡幸シテ獄前ヲ聞召シ懲ミテ悉ク死罪以下ヲ免シ衣服ヲ賜ヒ其ヲシテ自新セシメ玉フ 又大赦ヲ行ヒ玉ヘルヲアリ 災祥事故 赦ヲ行ヒ玉フ 是ニ於テ未タ三十年ヲ出ズシテ律令已ニ弛メル所アリ 孝謙帝立チ玉フニ及ビテ益佛法ヲ重ンジ弓削道鏡ヲ信用シテ細大ノ政ヲ統ベシメ連ニ力役ヲ興シ伽藍ヲ修メ寺封ヲ施シ玉ヘバ官員モ益増加シタルベク 光仁帝立チ玉ヘルニ及ビテ痛ク令外ノ官ヲ減シテ冗費ヲ省キ玉ヒシヲアルヲ以テ知ルベシ 費用モ

愈崇大ニナリタルベシ舊誌ニ稱ス「帝國用足ラズ聚斂稍厚ク天下之ニ苦ム」ト然ラバ其租稅ノ割合復タ養老令ノ若クナラザルヲ得テ知ルベシ夫レ帝ハ免稅ノ舉モ屢アラザルニ國庫空乏シテ斯ク重稅ヲ課シ玉ヘバ律令又復タ弛メリ其後種々ノ事情生出シテ律令ノ明文ト實際ノ施行トナシテ愈相背馳セシメ遂ニ嵯峨帝ノ弘仁中格式ト云フモノ出テ、條令ヲ斟酌スルニ至レリ而シテ仁明文德ノ世ヨリ藤原氏起リテ政權ヲ擅ニスルニ及ビ此背馳益甚シトス今次章ニ於テ之ヲ説クアラン

藤原氏

藤原氏ノ政權ヲ擅ニスルハ仁明文德ノ世良房ニ始マルト雖モ其由テ來ル所蓋シ久シ其祖鎌足ハ天智ヲ輔ケ蘇我氏ヲ滅シテ中興ノ業ヲ創

藤原氏權勢ヲ得ルノ地アル既ニ久シ唯外ニ發セザルノミ

藤原氏

中臣鎌足
藤原不比等

中臣鎌足像

攝州地福寺藏
(前寶故實縮寫)



十八
メ大織冠内大
臣ニ至ル其
子不比等ハ持
統ヨリ元正ニ
至ルノ四朝ニ
歷事シテ律令
ヲ撰定シ官太
政大臣ニ拜セ
ラル、ニ至ル
然レモ不比等
固辭シテ拜セ
ズ正二位右大
臣ヲ以テ終フ

藤原權勢ノ
暴發ヲ促ス
機會
良房ノ妹順
子仁明帝ノ
皇后トナリ
テ皇子道康
ヲ生ミ玉フ
淳和ノ皇子

其子孫祖宗ノ功ニ藉リテ世々左右ノ大臣或ハ内大臣ノ要地ヲ占メ皇
妃モ往々其家ヨリ出ヅ 下ノ各帝大臣并后妃
一覽表ヲ參觀スベシ 然ラバ當時藤原氏ハ豈ニ
勢力ナカラシヤ蓋シ鎌足不比等以來ノ勢力世々相積ミテ既ニ稍大ナ
ルヲ致セルベシ但々當時ノ諸帝位ニ即キ玉フヤ皆年長シ政務ヲ親ラ
シ玉フヲ以テ未タ外部ニ發セザルノミ故ニ良房ニ至リテ勢威ノ始テ
盛ナルハ其内ニ埋伏スル所ノ權力一時ニ外ニ暴發セシニ過ギザルノ
ミ然レモ斯ク暴發セシムル所ノ機ハ何ゾ、即チ良房ノ妹順子仁明帝
ノ皇后トナリ其皇子道康太子トナリシコト是ナリ
初メ平城、嵯峨、淳和兄弟相繼ギテ位ニ即キ玉ヒ淳和ニ至リテ位ヲ仁
明ニ禪リ玉ヘリ仁明ハ嵯峨ノ皇子ニシテ淳和ノ皇姪ナリ時ニ淳和ニ
皇子恒貞在シ玉ヒシモ之ニ讓位ナカリシヲ以テ仁明ハ亦皇子道康在

藤原氏

十九

恒貞仁明ノ
太子トナル

藤原良房ノ
心情

シ玉ヒシモ時ニ七歳之ヲ措キ特ニ恒貞ヲ立テ、太子トシ玉フ時ニ十歳母ハ王
氏ナリ是レ他日一狂言ノ發スル機因トス

抑現ニ道康ノ在シナガラ他ノ皇子ヲ立テ、儲貳トスルハ人情ノ上ヨ
リスルモ利害ノ上ヨリスルモ道康ノ外舅良房ノ見テ大ニ快トセザル
所ナリ但タ恒貞ハ穎敏ニシテ學ヲ好ミ嵯峨淳和ニ上皇ノ御愛モ深ケ
レバ容易ニ動ス能ハザルノミ然リト雖モ良房ハ尋常庸器ノ人ニ非ル
ナリ其我ニ利アルノ計ハ雲煙視スルノ人ニ非ルナリ必ヤ其一門ト計
畫スルヲモアルベシ又有司中我爪牙トシテ利アルモノハ勸メテ自黨
トモシタルベシ仁明帝ノ皇弟右大臣源常ハ良房方トナレリ舊誌ニ曰ク「恒貞既ニ長シテ世
事ニ通曉スルニ及ビ自ラ身家嫡ニ非ズシテ儲宮ニ居リ一旦兩上皇晏
駕シ玉ヘバ禍機測リ難キヲ以テ儲位ヲ辭シ玉ヒタレモ許サレザリシ

太子ノ地位

太子ノ禍機

カバ太夫秋津等ヲ見泣キテ曰ク孤屢儲位ヲ辭スルモ未ダ允サレズ諸
君孤ノ身ヲ奈何セントト是レ豈ニ故ナクシテ發シ玉ヘルノ語ナラ
ンヤ唯嵯峨淳和ノ二上皇在スヲ以テ太子安ズルヲ得タル也然ルニ其
後二上皇相繼ギテ崩ジ淳和上皇ハ承和七年五月ニ崩シ玉ヒ嵯峨上皇ハ同九年七月ニ崩シ玉フ玉ヘバ太
子勢孤ニシテ復タ往時ノ若クナラザル也唯若シ隙ノ乘スベキ無ンバ
猶若干歲月ノ間儲位ヲ保ツヲ得ムノミ然レモ斯ニ適々太子ノ禍機ヲ
促ス事出テ來レリ、東宮帶刀伴健岑、但馬權守橘逸勢等太子ヲ奉ジテ
東國ニ奔ルノ舉ヲ謀ルコト是ナリ抑此計ノ由リテ出ル所ヲ尋テ亦太
子ノ位地ノ危ヲ慮ルノ外ニ出テズ然レモ此企計或ハ言フ此企計ハ太子ヲ廢セムガ爲メニ
藤原氏ノ讒言ナリト發覺シテ彼等各々罪ニ處セラルレバ遂ニ太子自ラ安ゼズ
シテ位ヲ辭セムトシ玉フニ至レリ但タ帝慰藉シテ許シ玉ハズ熟ラ帝

藤原氏

ノ御性質ヲ惟ルニ嘗テ獄前ヲ過ギ玉ヒシ時其囚獄司ナルヲ聞シ召シテ憐然ノ情ヲ發シテ悉ク其囚徒ヲ御赦シ玉ヒシ事ナドアレバ御仁恕深キ御方ナルガ若シ故ニ斯ク太子ノ請ヲ允シ玉ハザルハ穴勝外面ヲ飾リ玉ヒシコニモアラザルベシ然レモ斯ル帝王ノ習ヒトシテ深宮ニ生レ婦人ノ手ニ長シ玉ヘバ自ラ經驗モ少ク判斷ノ力ニモ乏シキガ故ニ後チ太子ヲ讒謗セル飛書ヲ見玉フニ及ビテ之ヲ信ジ竟ニ恒貞ヲ廢シ玉フニ至レリ初メ太子恒貞位ヲ辭セムコトヲ請フ帝優答シテ曰ク健岑等凶逆何ゾ太子ニ關セン宜ク意ニ介スル勿ルベシト既ニシテ飛書アリテ曰ク健岑等ノ謀反太子ノ爲メニ發スト帝之ヲ信シ遂ニ恒貞ヲ廢シ玉フ是レ嵯峨上皇崩御ノ月ニ發シタルナリ是レ藤氏權ヲ得ル手段ノ第一着トス

恒貞既ニ廢セララル、ニ及ビテ道康ヲ立テ、太子トシ玉フ是ニ於テ良房其女明子ヲ納レテ其妃トス道康位ニ即キ玉フ(文德帝ト稱ス)ノ月

太子廢セラ
ル

道康太子ト
ナル

ニ明子惟仁親王ヲ生メリ此親王ノ皇兄ニ惟喬、惟條、惟彥ノ三皇子在シ玉ヒテ惟喬ハ當年七歳ニナリ玉ヒシカモ皆藤氏ノ出ニ非リケレバ之ヲ措キ十一月ニ惟仁ヲ立テ、太子トス生レ玉ヒテ僅ニ九ヶ月ナリ是ニ於テ藤氏ノ權殆ト成ル遂ニ良房右大臣ヨリ直ニ太政大臣ニ進ミ殿上ノ帶劍ヲ聽サル、コトナリヌコレヨリ先キ太政大臣トナルモノハ唯大友、高市、押勝、道鏡ノ四人アルノミナリシガ是後藤氏世々此官ヲ襲ヒ宛モ一ノ私有物ノ若クナレリ、未ダ幾クナラズシテ帝崩ジテ清和帝即チ惟仁立チ玉フ僅ニ九歳、幼主ノ踐祚此ニ始マル、良房外祖ヲ以テ攝政ス是ニ於テ藤氏ノ權全ク成レリ其子基經實ハ中納言藤原長良ノ子ナリ良房子ナシ因テ養ヒテ子トス基經ノ實妹高子宮ニ入りテ女御トナリ貞明ヲ生ム貞觀九年基經帝ニ對シテ眞ノ外舅ナラザルヲ以テ強

藤氏ノ權殆
ト成ル
良房太政大
臣トナル

幼主踐祚ノ
始メ
攝政ノ始メ

藤原氏

臣下帝ノ廢
立ヲ謀ルノ
始メ

關白ノ始メ

攝政關白ノ
職掌

ヒテ位ヲ貞明ニ遜ラシム是ヲ陽成帝ト曰フ基經外舅ヲ以テ攝政シテ
 太政大臣ニ任スル良房ノ故事ノ如シ然レニ帝ノ御性人主ノ器ニ堪ヘ
 ザル所アレバ基經羣臣ト相議シ竟ニ帝ヲ廢シテ光孝帝ヲ立ツ是レ臣
 下帝ノ廢立ヲ謀ルノ初トス

光孝帝既ニ立チ時ニ年五十五特ニ詔シテ万機舊ニ依リ應奏應下ノ事必先ツ
 基經ニ諮稟シテ後奏聞スベシト是レ關白ノ始メナリ幼主或ハ女帝ノ
 時ニハ大臣タル人御後見シテ天下ノ政ヲ行フヲ攝政ト云ヒ幼主御成
 人シ玉ヒテ親ラ政事ヲ聞召スヲ得バ攝政タル大臣政ヲ還ス時猶又御
 後見ノ事御免ナク天下ノ政ヲ預ケ玉フヲ關白天下ノ政事ヲ預リ白スノ義ト云フ故
 ニ天子御少幼ノ間ハ攝政ト云ヒ御成人ノ後ニハ關白ト云フ勤メ方ハ
 同シ事ナリコレヨリ先キ攝政ハ常職ニ非ズシテ臨時ニ設クルモノナ

リシカレコレヨリ後藤氏世々幼主ヲ擁立シテ攝政シ攝政終ラハ關白
 トナルヲ以テ此二ノモノ竟ニ官名トナリテ大權此ニ歸ス凡ソ此職ニ
 昇ルモノハ左右大臣ト雖モ亦太政大臣ノ上ニ居リ號シテ上座ト曰ヒ
 又一上ト曰フ位人臣ヲ極ムルヲ以テナリ帝崩シ宇多帝名ハ嗣ギ立チ
 玉フニ及ビテ基經關白故ノ如シ然レニ帝ハ聰明ノ御方ナレバ藤氏ノ
 權既ニ成リテ制馭シ難キ事ナドアルヲ見テ稍御懲リ玉ヒシトモアル

基經初メ政ヲ歸サシムテ乞ヒシカレ許シ玉ハズ詔シテ曰ク社稷ノ
 ベシ臣ニシテ朕ガ臣ニ非ズ宜ク阿衡ノ任ヲ以テ卿ガ任トスベシト左大
 辨橘廣相ノ草スル所也或者基經ニ告グテ曰ク公豈ニ政ヲ罷ムル乎阿衡
 位高クシテ事ニ預ラズト基經曰ク然ラハ吾ハ閑人ノミト命ジテ廐馬ヲ
 放ツ四年二月特ニ關白基經ニ詔シテ三宮ニ準シ玉フ基經奏シテ曰ク前
 詔ニ云ク宜ク阿衡ノ任ヲ以テ汝ノ任トスベシト心竊ニ疑フ所アリ近頃
 博士ノ議ヲ聞クニ阿衡ハ職掌ナシト苟モ職掌ナクンバ則チ崇高知ルベ
 シ臣ヲ以テ之ニ擬スルハ克ク堪フル所ニ非ズ然レニ職掌ナキノ地ニ居
 ルトハ固ヨリ臣ノ素志ナリト帝大ニ驚キ勅諭シテ曰ク太政大臣ハ先帝
 ヲ援立シ朕ガ躬ヲ保護ス功德高大周霍ニ愧ヂズ去年詔ヲ下シテ万機ヲ

宇多帝漸ク
藤氏ノ權ヲ
抑ヘムトス

關白セシム而ルニ堅ク間退ノ志ヲ執ル夫レ歷代ノ明王猶宰輔ニ藉ル矧
ンヤ小子ヲヤ而ルニ廣相詔ヲ草スル殊ニ本意ヲ失フ朕庶政必先ツ公ニ
諮稟シ而シテ垂拱シテ成ヲ仰カ
ムト欲スト基經乃チ詔ヲ奉ス 故ニ寛平三年基經薨ズルノ後ハ太政
大臣關白ヲ置キ玉ハズ八年左大臣藤原良世致仕シ九年右大臣源能有
薨セバ又左右大臣ヲモ置キ玉ハズ基經ノ長子時平ヲ以テ大納言兼左
大將トシテ政務ニ當ラシメ菅原道眞ヲ擢用シテ權大納言兼右大將ト
シテ時平ニ抗セシメ以テ漸ク藤氏ノ權ヲ收メムトシ玉フ是レ亦他日
一大狂言ノ發スル張本トナレリ

菅原道眞ノ
擢用

抑道眞ノ斯ク擢用サル、所以ナ言ハムニ道眞ハ參議是善ノ子ナリ家
世々儒ヲ業トス道眞博學鴻識ニシテ治躰ニ通ズ仁和二年讚岐守ニ任
セラル宇多帝其器オチ知り玉ヒ寛平三年二月擢ムデ、藏人ニ補シ玉
ヒシハ其立身ノ始メニシテ後僅ニ七年ヲ歴是ニ至リテ權大納言トナ

宇多帝ノ讓
位

菅原道眞像

紀伊國高野山
寶積院藏
(集古十種)



繪堂藏寫真

レリ藤氏ノ人ニ非スシテ斯
ク昇進ノ速ナルハ實ニ異數
トス

然レモ帝斯ク道眞ヲ擢用シ
以テ藤氏ノ權ヲ抑エムトシ
玉ヒシツ、此歲俄ニ位ヲ太
子敦仁ニ遜リテ御隱居ノ身
トナリ玉ヘリ

抑宇多帝ハ御年二十一ニシ
テ天子トナリ僅ニ三十ニシ
テ位ヲ遜リ玉ヒ世ヲ知シ召

藤原氏

スフ十年ノミ帝ハ聰明ノ主ナリ然ルニ斯ノ如ク壯年ニシテ傳位アリ
 シハ不思議ノ事也舊誌之ヲ以テ帝佛ヲ信スルニ歸ス然レモ單ニ之ヲ
 以テ帝世ヲ遜ルトスルハ蓋シ帝ノ意ヲ得タルモノニ非ル也余熟ラ初
 ヲ帝ノ皇子敦仁ヲ立テ、太子トシ玉ヒシ寬平五年ヲ見ルニ唯道眞ト之ヲ
 定メ玉ヒシノミ是ニ至テ九年帝位ヲ太子ニ遜リ玉ヒシモ亦唯道眞ト之
 ナ議シ玉ヒシノミ且帝讓位ノ時新帝ヲ誠メ玉ヘル御語ヲ見ルニ曰玉
 ハク左大將時平功臣之後雖年少諳練政事初頗聞內行不謹朕置不
 問去春以來屢加激勵使習公事可以備顧問資輔導也右大將道眞鴻
 儒深通政理直言不忌朕嚮立東宮獨與道眞議定且將讓位未果道眞
 日事留變生遂使朕意如金石則不唯朕之忠臣實新君之功臣也其敬
 重之

其理由

已上ノ事實ニ據リテ以テ考案ナ下サバ帝ノ眞意得テ知ル能ハザルニ
 非ス抑敦仁ノ御母更衣胤子ハ藤原高藤ノ女ニシテ時平ト再從兄弟ナ
 レバ其緣遠シト謂フベシ而シテ帝ハ藤氏ノ出ニ非レバ其權威ノ赫奕
 トシテ制馭シ難キヲ見テ之ヲ抑エムト欲シ玉ヒシモ躬藤氏ノ力ニ藉
 リテ立ラレ且先帝ノ遺言モアリテ自ラ之ニ當リ難キ點モアレバ初メ光孝
 帝皇子多シ然レモ基經ヲ憚リテ未ダ立ル所ヲ言ヒ玉ハズ帝不豫ナルニ
 及ヒテ基經臥内ニ入り奏シテ曰ク陛下萬歲ノ後神器將ニ誰ニ付ヒント
 欲シ玉フ帝曰ク唯公ノ擇ム所ナリ基經曰ク臣ノ見ル所ヲ以テスルニ其
 レ唯王侍從カト王侍從ハ定省ナリ帝大ニ喜ヒ玉ヒ定省ヲ召シ右ニ其手
 ナ執リ左ニ基經ノ手ヲ執リ泣キテ曰ク 敦仁ガ時平ト血緣ノ疎遠ナル
 ナ幸トシ敦仁ヲシテ之ニ當ラシメムトノ意アルベシ故ニ敦仁ヲ太子
 ト定ムルニ唯道眞ト謀リ玉ヒシハ太子ガ道眞ヲ德トスルヲ欲シ玉ヒ
 テノコナルベシ敦仁既ニ太子トナル是ニ於テ帝早ク位ヲ遜ラント欲

シ亦唯道真ト之ヲ謀リ玉ヒシハ新帝ヲシテ益道真ヲ德トシ厚ク之ヲ用ヒシメ躬亦院ニ在リテ間接ニ新帝ヲ輔ケムトノ意ナルベシ道真曰ク事留マラバ變生ゼムト是時基經ノ女宇多帝ノ女御トナリテ未タ生ム所アラズ生レバ則チ太子夫ノ恒貞ノ如キ變ナシト保ス可ラズ道真蓋シ此ニ慮ル所アル乎帝讓位ノ議既ニ定リ醍醐帝^{時ニ}立チ玉フニ及ビテ時平ハ左大臣トナリ道真ハ右大臣トナリ攝關若クハ太政大臣ヲ置カズ二人ナシテ万機ヲ内覽セシメ玉フ然ルニ時平ハ年壯ニシテ血氣盛ナレハ事ヲ爲ス粗莽ナルガ上資性執拗ニシテ人ニ屈スルヲ好マズ之ニ反シテ道真ハ年モ長ケ思慮綿密ニシテ庶務ヲ綜理スルニ裁決流ル、ガ若シ、一方ハ威張好キノ人ナリ一方ハ沈着ナル人ナリ斯ノ如ク性質相反スル人一緒ニ廟堂ノ上ニ立タバ毎事意見齟齬スル所

時平道真性質ノ比較

醍醐帝道真ヲ以テ關白トセムトス

アラム然レモ道實事毎ニ異ヲ立テ、ハ反テ施政上ノ妨害トモナレバ常ニ窃ニ慨歎スト云フ帝ハ素ト道真ヲ德トシ玉ヒテ厚ク之ヲ任用スルノ思召アルガ上ニ又斯ノ如キ事情ヲ御覽アリ玉ヘバ遂ニ^{昌泰三年正月}法皇ヲ朱雀院ニ觀シ相議シ玉ヘラク左右大臣並ニ朝政ヲ秉リテ統一スル所ナクンバ不便ナリト乃チ道真ヲ召シ密ニ諭シテ關白トナサムトシ玉ヒタリ

然レモコレヨリ先キ時平ハ道真ヲ憎ムノミナラズ源光、藤原定國等ノ若キ門閥家ハ皆道真ノ下風ニ立ツヲ以テ不平怨望ニ堪ヘザルナリ故ニ初メ道真右大臣ニ任セラル、時猶上表シテ之ヲ辭ス^三次ニ及ベリ^{其初表ニ曰ク臣ガ地ハ貴種ニ非ズ家ハ是レ儒林偏ニ往年拔擢ノ恩ヲム依リテ以テ今日ニ至ル昇進ノ次人心已ニ縱容セズ免職必睡毗アラム伏シテ願クハ陛下高ク聖鑑ヲ廻ラシ早ク臣ガ官ヲ罷メバ唯志ヲ匹夫ニ奪ハザルノミニアラズ亦復々望ニ衆庶ニ從フヲ得ルナリト表三々}

藤原氏

道真ノ位地

ヒ上レレ^ヒ然ルヲ況ンヤ今豈ニ之ヨリ高キニ當ルヲ欲セムヤ
聽カレズ 蓋シ當時道真ノ狀ヲ考フルニ特立無援ノ孤城ニ在リテ妬嫉怨憎ノ重
圍ヲ受ケ僅ニ清廉方正ノ武器ヲ以テ自ラ衛ルヲ得タルナリ而ルニ今
ヤ夫ノ關白任命ノ風説ハ一層藤氏ヲ激シ道真ヲシテ復々清廉方正ノ
武器ヲ恃ムニ足ラザラシムルニ至レリ

時平ノ奸計

抑時平ハ如何ナル人ゾヤ、極メテ權詐ニ巧ミナルモノナリ嘗テ朝臣
奢華ヲ競ヒテ衣服度ニ過ギ帝之ヲ禁シ玉ヒシモ止マザルヲ見時平密
ニ奏シ故ラニ自ラ美服ヲ着ケテ入朝スルニ帝伴リ怒リテ曰ク左大臣
當ニ躬儉約ヲ行ヒ以テ百僚ヲ率ユベシ而ルニ首ニ朕ノ禁ヲ犯ス何ゾ
ト時平惶懼ノ狀ヲ爲シ隨身ヲ屏ケ歩シテ第ニ歸リ門ヲ閉ヂ客ヲ謝ス
ト月餘ニ及ビシカバ人相戒メテ儉ニ從フト斯ノ如ク權變ニ長スル人

夫ノ風説ヲ聞キ一層怨恨ヲ激發セバ焉ンゾ能ク默々爲ス所ナクシテ
止マンヤ是ニ於テ帝ニ讒シテ道真ヲ退ケント欲ス然レ^ヒ之ヲ速カニ
モバ反リテ事成リ難キノ憂アルヲ以テ一工夫ヲ案シ先ヅ光定國及藤
原菅根^{藤原菅根ハ道真ノ薦ヲ以テ登用セラレ後殿上ニ在リテ}等ナシテ常
道真ノ爲ニ辱メラル菅根深ク之ヲ衝ム途ニ時平ニ黨ス
ニ道真ヲ帝ニ讒セシム凡ソ讒ト云フモノハ妙語巧言人ノ感動シ易キ
點ニ中ツルヲ以テ聞クモノ初メハ其讒ナルヲ知ルト雖^ヒ浸潤ノ久シ
キ大概子不知不識ノ間ニ化セラレテ之ヲ信スルニ至ルハ古今ノ史乘
ニ徴シテ明ナリ況ンヤ帝春秋尚壯^{年十}ナルニ於テナヤ帝全ク之ヲ信
シ玉ハザルモ必半信半疑ノ地位ニ至リ玉ヒタルベシ時平其機ノ熟ス
ルヲ視乃チ中ツルニ其最忌ムベキ廢立ノ事ヲ以テス^{時平密ニ奏スラ}
陛下ヲ廢シテ齊世親王ヲ立テ而シテ身朝權ヲ專ニセム^{ク道真異圖アリ}
ト欲スト道真ノ女親王ニ適ヒリ親王ハ帝ノ皇弟ナリ 帝焉ンゾ信ゼザ

藤原氏

ルヲ得ンヤ帝既ニ信ス乃チ直ニ太宰帥ニ貶黜スルノ命ヲ道眞ニ下ス
 世人文章博士三善清行書ヲ右大臣道眞ニ贈リテ其退カムヲ勸ムレ道
 眞從ハズ遂ニ貶黜ニ遇フヲ見テ道眞出處ノ機ニ疎ナルヲ評シテ清行ノ
 卓見ヲ稱スル者アリ然レ道眞豈ニ出處ノ機ヲ知ラザランヤ其隱退セ
 ムト欲スルハ既ニ是ヨリ先キ右大臣トナルノ時ニアルト前文ニ於テ明
 ナリ唯上皇及新帝聽シ玉ハザルヲ以テ如何トスル能ハザルノミ又清行
 ノ斯ク隱退ヲ道眞ニ勸ムルヲ以テ清行ハ或ハ時平ニ黨セハ斯ク隱退ヲ勸
 ノアリ然レ道眞ニ贈ラザルベシ何トナレハ上皇及帝ノ道眞ヲ關白トセ
 ムトスルハ昌泰三年ノ正月ニ在リテ其貶黜ハ翌延喜元年正月ノ初ニア
 リ而シテ清行ノ書ヲ贈ルハ昌泰三年ノ十月ニ在レバナリ蓋シ時平ハ夫
 ノ關白ノ一事ヲ聽クヤ憤激ノ餘必道眞ヲ至苦ニ陷レ甘心シテ後已マム
 トスルナリ豈ニ其隱退スルノミヲ以テ自ラ足レリトセシヤ而シテ夫ノ
 十月ノ頃ハ時平ノ計畧稍熟シタルノ時ナルベシ何トナレバ道眞ノ貶黜
 ニ遇フマデ僅ニ三月月程前ナレバナリ故ニ若シ時平ノ黨ナレハ道眞ニ
 隱退ヲ勸ムルハ當ニ其已前ニ在ルベシ何ゾ此時ニ及ビテ之ヲ爲シヤ且
 終始清行ノ言行ヲ見ルニ常ニ公平ナルガ故ニ余ヲ以テ之ヲ見レバ
 清行ハ局外中立ノ位地ニ居リ其道眞ニ隱退ヲ勸ムルハ時平等ノ姦計ヲ
 知り親切ノ餘忠告シタルニ過ヤザルノミ又世人清行ノ革命ノ議ヲ引キ
 テ噴々其數理ニ明ナルヲ稱スト雖レ余惟フニ當時ニ在リテ稍事情ニ通
 スルモノハ假令ヘ清行ニ非ズト雖レ此程ノ事ハ言フニ難カラザルナリ

其事ノ迅速ナル殆ド疾雷耳ヲ掩フニ暇アラズ其手段頗巧ナルト謂
 フベシ道眞ハ素ト宇多法皇ニ依リテ進ミシ人ナリ道眞ハ中途ニ上表
 シテ退カムヲ欲スルヲ數次ナリト雖レ法皇聽ササルナリ道眞權ヲ慕
 フノ意ナシト雖レ法皇強ヒテ之ヲ得サシムルナリ道眞今日ノ禍アル
 ハ法皇其責ヲ辭スル能ハズ故ニ法皇之ヲ聞召シヤ御愁傷イカ許ヤア
 ラム遂ニ帝ヲ見テ申救セント欲シ玉ヒ直ニ内裡ニ馳參シ玉ヒシカレ
 豫テ時平ノ命アリト見エ左右ノ諸陣警固シテ通ゼズ法皇草座ヲ西門
 ニ敷キテ終日御座シ玉ヒシモ卒ニ帝ヲ見ル能ハズ晚景空ク還御アリ
 タリ道眞遂ニ謫セラレテ筑紫ニ至ルヤ男女二十三人流徙各處ナ異ニ
 ス時平猶諸司諸生ノ業ヲ菅門ニ受クルモノヲ禁錮放逐セムト欲セシ
 モ三善清行諫メシカバ止ムヲ得タリ是ヲ延喜ノ變トス

藤氏ノ譜勢
増シテ門閥
政治トナル

コレヨリ藤氏ノ權ハ一層其根蒂ヲ固クシ攝關ノ職モ再ヒ興リ而シテ
其職ヨリ以テ卿相ノ官ニ至ルマデ皆其門族ニアラズト云フコトナシ悉
ク其譜第ヲ以テ其官其職ニ當テシカバ夫ノ將帥ノ職モ又其譜第ヲ以
テ任ゼシ故ニ遂ニ所謂世官世族トナル而シテ其一族ニ非ルモノハ假
令材藝アリト雖モ下官ニ沈淪シテ要職ニ昇ル能ハズ道眞貶黜ノ後三
十餘年ヲ歷テ平將門ト云フモノアリ陸奥鎮守府將軍從五位下平良將
ノ第二子ニシテ其先ハ桓武帝ヨリ出ツ將門勇悍騎射ヲ善クス少キ時
攝政藤原忠平ニ仕ヘテ檢非違使タルコトヲ求メドモ忠平省ミザレバ將
門怒リテ關東ニ赴キ朱雀帝ノ天慶二年十一月遂ニ反シテ關東ヲ畧シ
下總ノ相馬郡ニ居所ヲ占メ都ト名ケ自ラ平新皇ト稱ス然レモ當時門
閥ノ風習ニ制セラレテ自ラ志ヲ得ル能ハズ快々天下ニ事アルヲ望ム

天慶ノ亂

平將門

藤原純友

モノ何ゾ獨リ將門ニ限ラン是ニ於テ諸國不平ノ徒ハ相競ヒテ將門ニ
應セバ忽チニシテ天下ノ騷動トナル既ニ斯ノ如キ大敵關東ニアルガ
上ニ又他ニ畏ルベキ一巨敵ヲ出セリ是ヲ誰トカス藤原純友ト云フモ
ノ即チ是ナリ純友ハ權中納言長良ノ曾孫ニシテ筑前守良範ノ子ナリ
初メ將門ノ京師ニ在ル純友與ニ交ヲ定メテ謀反ヲ約セリ然ラバ純友
藤氏ナリト雖モ其緣遠クシテ用ヒラレズ 其父良範官僅ニ筑前守ニ止
マリ純友又官伊豫掾ニ止マ
レバ當時ニ用ヒラ 不平ノ餘此ニ出ツルモノ乎 史ニ稱ス純友人ト爲リ
狼戾無行ト以テ非ヲ其
レザルコト知ルベシ 人物ニ歸ス然レモ是蓋シ史家唯其反跡ヨリ推測シタルノ辭ナルベシ豈
ニ其源因ナクシテ妄ニ狼戾無行ナルヲ得ンヤ又假令狼戾無行ナルモ其
機ナクシテ馬ノ能ク之 ヲ實地ニ發スルヲ得ンヤ 故ニ伊豫掾トナリテ任滿ルモ還ラズシテ船
千艘ヲ具ヘ是ニ於テ起リテ遙ニ之ニ應セバ山陽亦大ニ擾ル斯ク東西
ニ大敵並ヒ起リテ虎、嶋ニ憑ルノ勢アリシカバ之ヲ平グルニハ勇將

藤原氏

猛兵ニ非ンバ得テ望ム可ラズ
然ルニ光仁桓武ノ頃ヨリ遊惰ノ風稍行ハレテ朝廷ノ武備漸ク弛ミ兵
卒尪弱ニシテ用ニ中ラズ朝議夷俘ヲ黜シテ兵トナシ以テ不虞ニ備フ
ルニ至レリ當時養老ノ令大ニ衰ヘ賦斂苛重、人民困窮ノ餘相聚リテ
盜ヲナスモ國司索捕スル能ハズ朝廷近衛兵ヲ遣ハシテ逮捕セシムル
モ亦復タ功ナシ特ニ昌泰延喜ノ間ヨリ兵備一層衰ヘテ京畿ノ中盜起
ルニ至レリ

朝廷ノ兵士斯ノ如ク羸弱ナレバ到底常備兵ヲ以テ討平ヲ期スル能ハ
ズ是ニ於テ朝廷或ハ神ニ祈リ天下ノ名神ニ位一階ヲ進メテ東西ノ賊ヲ
禳ハシメ使ヲ大神宮ニ遣ハシテ亂ヲ平ク
ルヲ祈或ハ東海東山ノ勇士ヲ募リテ賊ヲ討セシメ許スニ不次ノ賞ヲ
以テス幸ニ勇武ヲ以テ坂東ニ聞フル下野押領使藤原秀郷及常陸掾平

貞盛ハ將門ノ不意ニ起リテ之ヲ討滅天慶三
年二月スルガ爲メニ關東ノ亂ハ
八十餘日神皇正統紀ニ曰ク承平五年二月將門兵ヲ起
シ天慶三年二月滅フ其間六年ヲ經タリトニシテ平キシト
雖モ山陽ノ亂ハ猶熾ニシテ其鎮定ニ歸スルハ四年五月ニ在リ然ラバ
天慶ノ亂ハ初ヨリ終ニ至ルマデ始下一年七ヶ月ノ久シキニ及ベリ亦
大亂ト謂フベシ其國家ノ氣運ヲ害スル淺シトセザルナリ然リ而シテ
其原因ハ前既ニ述ベシ如ク門閥政治ニ在ルノミ然レモ此後百二十餘
年藤氏猶世々外戚ノ親ニ依リテ執柄ノ職ヲ壟斷スルヲ左表ノ如シ

藤氏攝關表

良房基經ハ此時ノ前ニ屬スレモ讀者ノ
参考ニ便ニセムガ爲メニ此ニ併記ス

封名	人名	父名	攝政	關白	薨年
美濃公	良房	冬嗣	自清和貞觀元年一五二九 至同 同 五年一五三三	五年	○貞觀十四年九月三日 六十九
忠仁公	冬嗣		至同 同 五年一五三三		
中間十三年攝政ナシ 自貞觀五年 至同十八年					

越前公 基經 良房	陽成元慶元年 一五三七	四	自陽成元慶四年 一五四〇	一年	寬平三年正月十三日
昭宣公	同 四年 一五四〇		至宇多寬平二年 一五五〇	五	十 七
中間四十年攝關ナシ 宇多寬平三年ノ後 延喜一代攝關ナシ					
信濃公 忠平 基經	朱雀承平元年 一五九二	二	朱雀天慶四年 一六〇一	九	天曆三年八月十四日
貞信公	同 天慶四年 一六〇一		村上天曆三年 一六〇九	七	十
中間十九年攝關ナシ 天曆三年ノ後置カレズ					
尾濃公 實賴 忠平	圓融安和二年 一六二九	二	冷泉康保四年 一六二七	二	天祿元年五月八日
清慎公	同 天祿元年 一六三〇		同 安和元年 一六二八	七	十 七
參河公 伊尹 師輔	圓融天祿元年 一六三〇	三		〇	天祿三年十一月一日
謙德公	同 三年 一六三三			四	十 九
遠江公 兼通 師輔		〇	圓融天祿三年 一六三二	六	貞元二年十一月四日
忠義公		〇	同 貞元二年 一六三七	五	十 三
駿河公 賴忠 實賴		〇	同 天元元年 一六三八	一	永祚元年六月十六日
廉義公		〇	花山寛和二年 一六四六	〇	五 十三 一説二六十六
兼家 師輔	一條寛和二年 一六四六	六		〇	正曆元年七月二日
	同 正曆元年 一六五一			六	十 二
道隆 兼家	同 二年 一六五三	三	一條正曆四年 一六五四	三	長德元年四月十日
	同 同 二年 一六五三		同 長德元年 一六五六	四	十 三
道兼 兼家		〇	同長德元年 一六五五	七	長德元年五月五日
		〇	同 同 五月 一六五五	三	十 五

公卿摺紳益
遊惰ニ流ル

道長 兼家	同 長德二年 一六五六	〇	內覽萬壽四年十二月四日	二	
	三條長和五年 一六七二	六		十	
賴通 道長	後一條寛仁元年 一六七七	三	延久六年二月二日	八	十 三
	同 三年 一六八〇		後冷泉治曆四年 一七二八	五〇	

(注意) 兼家以下道兼ヲ除クノ外悉ク出家スルヲ以テ封名諡號ナシ
シ道兼關白僅ニ七日ナルヲ以テノ故ニカ亦封名諡號ナシ

天慶ノ亂後大約ソ九十年間差シタル大亂モナカリシカバ藤氏ハ多ク
莊園ヲ占ムルマニミ大平無事ニ慣レテ益遊惰奢侈ニ流レテ詩歌ノ贈答
管絃ノ唱和イト盛ニシテ花朝月夕金殿玉樓ニ坐シ膏粱美味ヲ食ヒ秀
才佳人ヲ集メテ清歌妙舞ヲ事トス斯ク遊惰ノ風盛ナルニ於テハ閨闈
ノ政モ治マラザルハ自然ノ結果ニシテ男女ノ間言フニ忍ビザルヲア
リ是ニ至リテ犯奸ノ律ハ唯空文ナルノミヨリ朝廷行フ所ノ武事
ハ雁々競馬駒牽騎射相撲ノ類ニ過ギズシテ實際ノ武事ニ關スル將
士ハ益公卿摺紳ノ賤シム所トナレリ

武士ノ状態

然レモ斯ク賤視セラル、所ノ武士ハ王政衰ヘシヨリ亦争ヒテ莊園ヲ
占メ其土地ヲ有スル大ナルモノヲ大名ト曰ヒ高家ト曰フ、小ナルモ
ノヲ小名ト曰ヒ黨ト曰フ、皆其子弟僕隸ヲ養ヒテ私兵トス之ヲ家子
郎黨ト曰フ或ハ家人ト謂フ互ニ弓馬ニ依リテ雄長ヲ争ヒ權勢次第ニ
盛ナリ而シテ源平二氏ヲ最トス源滿仲ノ如キハ郎黨四五百人アリ源
宛平良文ニハ五六百人アリ平維茂藤原諸任ト闘フヤ兵士ヲ徵發スル
ヲ二千人ニ至ル源賴光卑官ニ在ルニ猶馬三十匹ヲ攝政兼家ニ遺ル
如キノ例猶 當時自ラ家兵ヲ養ヒ居常心ヲ武備ニ用フルノ厚キ此ノ如
シ故ニ一朝事アルニ當リテハ公卿力ヲ辨スル能ハズシテ一切之ヲ武士
ニ委任ス而シテ源氏賴光、賴信、賴義、義家ノ如キハ皆驍勇絶倫、騎射無
雙、事ニ遇ヒテ風生、危險ヲ顧ミズ長元中平忠常ノ反ヲ平グルモノハ

源賴信

平忠常ノ反

源賴義

賴時強梁

賴時反ス

貞任其兵ヲ
領ス

賴信ニ非ズヤ 天慶ノ亂後凡ソ九十年ヲ歴後一條帝ノ長元元年前上總介
延檢非違使平直方ヲ遣ハシテ之ヲ討セシム三年ニシテ功
ナシ是ニ於テ賴信ニ命シテ之ヲ討セシム翌四年忠常降ル 後冷泉帝ノ世
陸奥ノ俘囚安倍賴時貞任ノ亂ヲ平グルモノハ賴義ニ非ズヤ 長元ノ亂
永承中ニ至リテ此大亂アリ賴時ハ世々陸奥ノ豪族ニシテ其地西ハ白河
關ニ界シ、東ハ率土濱ニ抵ル、衣川ノ形勝其中央ニ當ル、險ニ據リ關ヲ設ケ
名ケテ衣關ト曰フ、海陸ニ跨有シ、資産豐饒、貢賦ヲ輸サズ、徭役ヲ供セズ、國
守制スル能ハズ是ニ於テ朝議源賴義ヲ以テ陸奥守兼鎮守府將軍トシテ
之ヲ討セシム賴義ハ賴信ノ子ナリ賴義任ニ至リ會大赦アリ乃チ賴時ノ
自新ヲ許ス賴時大ニ喜ヒ心ヲ傾ケテ服事ス永承七年賴義任滿チテ鎮守
府ニ還ル路阿久利川ニ宿ス夜中人アリ屬將藤原光貞ノ營ヲ斫ル賴時ノ
子貞任嘗テ婚ヲ光貞ニ求ム光貞之ヲ鄙ミテ許サズ故ニ其怨ヲ報スル也
賴義貞任ヲ收メムト欲ス賴時乃チ兵ヲ擧ケテ反シ衣川ノ關ニ據ル時ニ
天喜四年八月ナリ賴義奏シテ再任ヲ請ヒ兵ヲ發シテ之ヲ伐ツ之ヲ頃ク
シテ賴時其族安倍富忠ノ爲メニ殺サル其子貞任肥白雄偉、膂力人ニ踰ニ
腰圍七尺七寸、父死スルニ及ヒ代リテ其衆ヲ領ス兵勢日ニ振フ官軍兵少
ク力乏シ屢戰ヒテ利アラズ康平五年賴義使ヲ遣ハシテ出羽ノ豪族清原
光賴及ヒ弟武則ニ論シテ來リ援ケシム是ニ至リテ武則子弟部下万余人
ヲ率井テ來リ屬ス兵勢大ニ振フ賴義貞任ト戰ヒ連ニ勝チテ終ニ之ヲ厨
川ノ柵ニ攻殺ス是ニ於テ亂始メテ平ク初ヨリ此ニ至ルマデ九年ニシテ

藤原氏

源義家

清原武衡ノ亂

平ケルガ故ニ之ヲ 堀河帝ノ寛治中出羽ノ酋長清原武衡ノ亂ヲ平ケル
 前九年ノ戰ト曰フ
 モノハ義家ニ非ズヤ 清原武則ノ孫眞衡祖父ノ餘功ヲ以テ陸奥ノ豪族ト
 ナリテ安倍頼時ノ故地ヲ領ス眞衡異母弟家衡等ト
 家ヲ争ヒテ戰鬪止マズ白河帝ノ永保三年義家朝廷ノ命ヲ奉シテ陸奥守
 兼鎮守府將軍トナル眞衡等降附ス獨家衡服セズ其叔父武衡亦兵ヲ起シ
 テ家衡ニ應シ兵ヲ合シテ金澤柵ニ據ル寛治元年義家之ヲ攻メテ克マズ
 乃チ長圍ノ計ヲ爲ス既ニシテ柵中食乏シ武衡家衡柵ヲ燒キテ夜遁ル義
 家追撃テ之ヲ斬ル與羽悉ク平ク之ヲ後ニ
 年ノ戰ト曰フ討平ニ三年ヲ要セシヲ以テ也 然リ而シテ朝廷功ヲ論シ賞
 ナ行フニ至リテハ頼義僅ニ伊豫守ニ過キズ義家ハ私鬪ト目サレテ賞
 セラレズ然レモ隱然天下ヲ左右スルノ實力ヲ有スルモノハ此等ノ武
 士トス

藤氏源平ノ比較

事情此ノ如シ故ニ藤氏ハ外面ヨリ見レバ權威猶盛大ナルガ若キモ内
 部ハ既ニ腐朽スルナリ之ヲ人ニ譬フ臍腑已ニ腐チタリト雖モ外貌猶
 盛ナルガ若シ故ニ稍有力ノ擊撞ニ遇ハバ則チ直ニ破碎セムノミ源平

後三條帝 藤氏ノ衰微

二氏ハ外部ヨリ見レバ猶微弱ナルガ若シト雖モ内部ニハ他日盛大ニ
 達スベキノ元素悉ク備ハリ唯未タ其時機ヲ得ザルノミ然ルニ後三條
 帝立ツニ及ビテ藤氏衰微スルノ時期正ニ至レリ帝ハ英明ノ主ナリ母
 ハ三條帝ノ皇女陽明院ニシテ藤氏ノ出ニ非ルナリ帝東宮ニ在セシ時
 ヲリ常ニ藤氏ノ專横ヲ憤リテ其權ヲ抑エント欲シ玉ヘルナリ故ニ位
 ニ即キ玉フヤ 時ニ年 直ニ藤氏ノ政柄ヲ奪ヒ前關白頼通 頼通ハ非役ナ
 政事顧問トナリ 三十五 宇治ニ退居セシム其弟教通關白タリト雖モ唯空位
 テ特ニ勢力アリ 有スルノミ藤氏ノ權コレヨリ衰フ次ノ白河帝亦剛決果斷ノ御方ナ
 レバ藤氏益手ヲ斂メリ尙讀者ヲシテ藤氏ノ盛衰ヲ簡明ニ認ムルヲ得
 セシムムガ爲メニ左ニ二表ヲ附載セン

自文武帝 各帝大臣並后妃一覽表
 至白河帝

桓武	光仁	稱德	淳仁	孝謙	聖武	元正	元明	文武	帝王
									攝政若クハ關白
									太政大臣
									左大臣
									右大臣
									內大臣
									皇后若クハ中宮等
									皇子
									聖武
									太子ノ帝王タルモノ

宇多	光孝	陽成	清和	文德	仁明	淳和	嵯峨	平城
兼藤原基經	兼藤原基經	兼藤原基經	兼藤原良房					
藤原基經	藤原基經	藤原基經	藤原良房	藤原良房				
源藤原良房	源藤原基經	源藤原基經	源藤原良房	源藤原良房	源藤原緒嗣	源藤原冬嗣		
源藤原世能	源藤原融	源藤原融	源藤原信	源藤原信	源藤原常	源藤原冬嗣		
源藤原能	源藤原多	源藤原多	源藤原氏宗	源藤原氏宗	源藤原良房	源藤原冬嗣		
胤子			高子	明子	順子			
藤原高藤			藤原長良	藤原良房	藤原冬嗣			
藤原基經			藤原長良	藤原良房	藤原冬嗣			
藤原基經			藤原長良	藤原良房	藤原冬嗣			

醍醐	兼攝 藤原忠平	藤原忠平	藤原仲平	源 菅原道真	源 光 藤原高藤	藤原時平 妹ナリ	子 藤原基經 朱雀村上 第四女
朱雀	兼攝 藤原忠平	藤原忠平	藤原仲平	藤原定方 藤原恒佐	藤原實賴	慶	子 藤原實賴
村上	兼關 藤原忠平	藤原忠平	藤原實賴	藤原師輔	源 高明	藤	子 藤原師輔 冷泉圓融
冷泉	兼關 藤原實賴	藤原實賴	源 高明	藤原在衡	懷 超	子 藤原伊尹 華山 三條	
圓融	兼關 藤原伊尹 兼攝 藤原兼通 藤原賴忠	藤原伊尹 藤原兼通 藤原忠賴	藤原在衡 兼明 雅信	藤原兼家 藤原兼通	嬪 詮 遵 三條院	子 藤原兼通 藤原兼家 一條	
華山	兼關 藤原賴忠	藤原賴忠	源 雅信	藤原兼家	悋	子 藤原為光	
一條	兼攝 藤原兼家 兼關 藤原道隆 藤原道隆	藤原兼家 源 重信	藤原道兼 藤原顯光	藤原道隆 藤原伊周	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	
三條		藤原為光	藤原道長	藤原顯光	藤原公季 定	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	

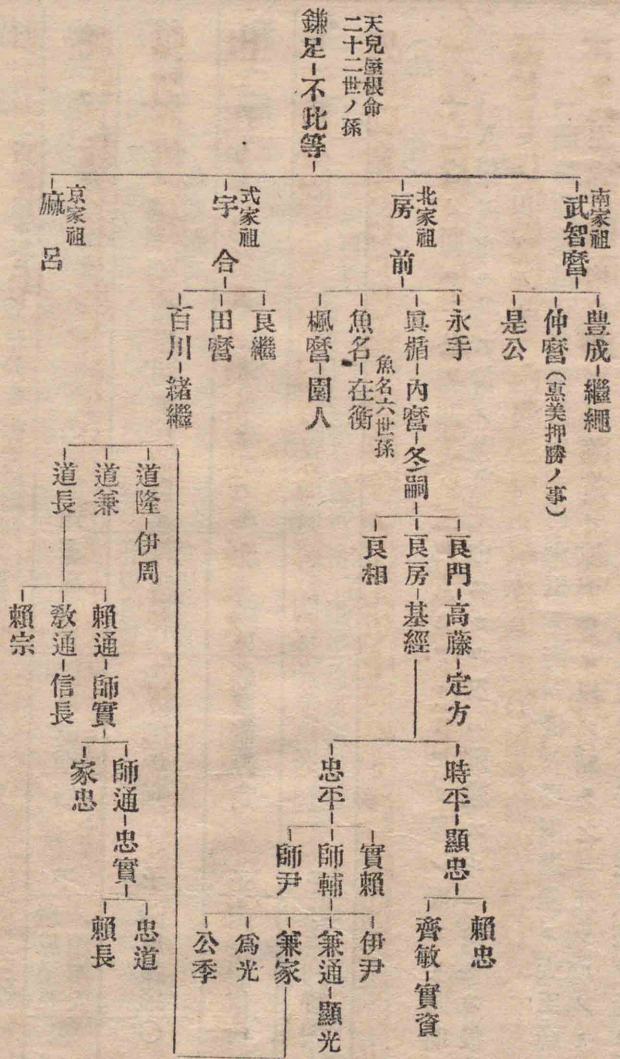
後一條	兼攝 藤原道長 同 藤原賴通	藤原道長 藤原顯光	藤原實資 藤原教通	藤原道隆 藤原伊周	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	
後朱雀	兼關 藤原賴通	藤原賴通	藤原實資 藤原教通	藤原道隆 藤原伊周	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	
後冷泉	兼關 藤原賴通 同 藤原教通	藤原賴通 藤原教通	藤原實資 藤原賴宗 源 師房寬	藤原道隆 藤原伊周	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	
後二條	兼關 藤原教通	藤原教通	藤原實資 藤原賴宗 源 師房寬	藤原道隆 藤原伊周	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	
白河		藤原信長	藤原師實 源 顯房 藤原師通	藤原道隆 藤原伊周	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	子 藤原道隆 長女 後 朱雀	

(注)

一 帝ノ間ニ三公攝關等ノ三四人モアルコトアリ是レ固ヨリ同時ニ此
 八員アルニ非ス前ノ職事死亡スルカ又ハ辭職スルニ由リテ後任ノ
 モノ出ツルナリ
 一 藤原仲麻呂ノ紫微内相ヲ内大臣ノ格ニ置キ弓削道鏡ノ大臣禪師ヲ
 左大臣ノ格ニ置クハ適當ノ地ナキヲ以テ姑ク之ニ充ツルノミ
 一 圓融帝ノ時藤原兼通内大臣及太政大臣ノ兩格ニ在リ是レ始メ内太
 臣ヲリシカニ後太政大臣ニ昇進シタルヲ以テナリ
 一 此表ハ素ト藤氏ノ盛衰ヲ見ルガ爲メニ作ルモノナレバ皇后中宮等
 ハ唯藤氏ノ出ヲ擧グルノミ

藤原氏畧譜

此表ニ掲グルモノハ重ニ攝關三公及内大臣トナリシモノナリ故ニ官此ニ至ラザルモノハ多ク畧シテ載セズ



源平二氏

風俗ノ頹敗

藤氏ノ權力大ニ衰ヘシテ前ニ記スルガ如シト雖百有餘年因襲スル弊風ハ依然改マラズシテ人倫ノ道益紊ル斯ク風俗頹敗教化壞亂スル世ニ在リテハ各人ノ利害互ニ一致セズシテ相異ナルガ故ニ早晚社會ノ元素分離セズシテ已ムテ蓋シ鮮シ矣

故テ以テ第七十七代後白河帝ノ保元年中ニ至リ此弊風潰裂シテ遂ニ一種ノ奇異ナル争亂トナレリ今左ニ之ヲ畧述セン

保元ノ亂

第七十五代崇徳帝ハ白河法皇ノ皇孫ナル第七十四代鳥羽帝ノ太子ニシテ母待賢門院ハ法皇ノ御養女ナリ未タ鳥羽帝ノ妃トナラザル時法皇ノ寵ヲ受ケ玉フ時人之ヲ知リテ崇徳院ハ法皇ノ御胤子ト云フ鳥羽院モ其由ヲ知シ召シテ叔父子ト申サシメ玉ヒテ御寵愛薄カリキ然ル

ニ法皇崩シ玉ヒシ後鳥羽院ノ寵姫美福門院女御 躰仁親王ヲ生ミ保延五年
 五月玉ヘバ生レテ僅ニ四月ニシテ立テ、崇徳帝ノ儲貳トナシ玉フ其後
 二年永治元年 鳥羽院ハ強ヒテ崇徳帝ヲシテ位ヲ禪ラシメ玉フ是ヲ近
 衛帝ト曰フ僅ニ二歳ナリ然レ後十四年近衛帝崩シ久壽二年七月 玉ヘ
 バ美福門院關白藤原忠通ト謀リテ崇徳上皇ノ同母弟雅仁ヲ立ツ是ヲ
 後白河帝ト曰フ是時ニ當リテ崇徳上皇ハ御年モ猶弱ク讓位モ御本意
 ヨリ出ツルニ非レバ鳥羽法皇御在世ノ間ハ御忍ビ玉ヒシモ法皇崩御
 保元元 年七月 マシマスニ及ビテ上皇重祚ノ念愈熾ナリ時ニ左大臣藤原賴
 長ハ其兄忠通ト聞柄善カラズシテ之ヲ贊成セシカバ上皇遂ニ兵ヲ擧
 ゲ玉フ源爲義平忠正等之ニ赴キ源義朝平清盛等官軍ヲ助ク然レ上
 皇軍利アラズシテ讃岐ニ遷サレ玉フ是ヲ保元ノ亂ト曰フ此亂ホド人

源義朝平清盛

此亂ノ結果

倫ノ紊レシモノアラザルナリ崇徳上皇ハ後白河帝ト忠通ハ賴長ト兄
 弟相軋リ爲義ハ義朝ト父子相角ヒ忠正ハ清盛ト叔姪相攻ム遂ニ子ハ
 父ヲ殺スアリ亂平ヤテ後爲義出降ル帝義朝ニ勅シテ之ヲ誅セシム 姪ハ叔父ヲ殺スアリ亂平ヤテ後忠正出降ル清盛之ヲ誅ス 新井白石此役ヲ評シテ父、父タラズ子、子タラズ兄、兄タラズ弟、弟タラズト曰フ誠ニ當レルト謂フベシ
 然レ此亂コソ源平二氏ハ從來内部ニ鬱積スル所ノ盛大ニ達スベキ
 元素ヲ發揚シテ勢力ヲ占ムルノ好機タレ、曩ニ長元ノ亂アリテ賴信
 軍事ニ勞ス陸奥ノ亂アリテ賴義十二年程之ニ從ヒ出羽ノ亂アリテ義
 家三年ニシテ之ヲ平グ然ルニ此人々其賞ノ薄キ前既ニ述ベシガ如シ
 盖シ此等ノ亂ハ甚大ナリト雖此京師ヲ去ルト遠キヲ以テ朝廷モ其痛
 痒ヲ感スルト自ラ至切ナラズ故ニ賞賜亦厚カラザルナリ然レ此保元

源平二氏

五十三

ノ亂ニ至リテハ兩帝輦轂ノ下ノ争ニシテ其一勝一敗ハ直ニ御身ノ上ニ影響スルヲ尋常ナラザルガ故ニ功勳アルモノハ賞賜モ自ラ厚キナリ故ヲ以テ義朝ハ素ト下野守タルモ是ニ至リテ昇殿ヲ聽サレテ左馬頭タリ此官ハ四位五位ノ中ヨリ然ルベキ人清盛ハ安藝上國守ヨリ播磨大守トナル尋キテ太宰大貳ニ進ム未タ十分ナラズト雖氏之ヲ以テ前ノ頼義義家等ニ比スレバ昇進遙ニ速ナリトス斯ク勢力ヲ得ルノ萌アルニ當リテ源平竝ヒ立ツハ各其利トスル所ニ非ズ且從來平氏ニ逆亂ノ臣アレバ源氏ニ勅シテ之ヲ伐タシメ源氏ニ違勅ノ者アレバ平氏ニ命シテ之ヲ討セシムレバ源平ハ私ノ仇ニ非スト雖氏自然世讎ノ思ヲナセリ但タ平生能ク自ラ忍ブト雖氏斯ク權力競争ノ舞臺ニ出テハ復タ忍ブ能ハザルナリ且清盛ハ當時尤廟堂ニ勢力アル信西ニ結ベバ

源平併立シ難

平治ノ亂

信賴義朝反ス 清盛賊ヲ討ス 信賴義朝敗北ス 其結果

義朝動モスレハ其下風ニ立タムトスルノ傾向アリ其心ニ快カラザルヲ得テ知ルベシ是ニ於テ平治ノ亂又起ル抑此亂ハ中納言藤原信賴近衛大將ヲ望ミテ得ザルニ胚胎ス保元三年後白河帝位ヲ二條帝ニ遜テ太富才廷臣其右ニ出ルナシ前帝特ニ倚信シ玉ヒ朝廷ノ大事參與セザルナシ帝位ニ即キテ親重故ノ如シ時ニ中納言藤原信賴上皇ノ爲メニ寵セラレ稍政ニ預ル近衛大將ニ任セラレムトテ請フ上皇將ニ之ヲ許サムトシ玉フ信西之ヲ諫メ唐ノ安祿山ノ事ヲ圖シテ之上ル信賴之ヲ聞キ疾ト稱シテ出デズ時ニ清盛姻ヲ信西ニ結ビ勢位義朝ニ踰ユ義朝快々樂マズ信賴依リテ結ビテ黨トス平治元年十二月清盛熊野ニ詣ル信賴遂ニ義朝等ト反シ兵ヲ率非テ夜上皇ヲ三條殿ニ圍ミ火ヲ放チテ宮ヲ燒ク殺傷甚多シ上皇ヲ一品御所ニ幽シ帝ヲ重戸御所ニ遷ス自ラ大臣大將トナリ義朝ヲ以テ播磨守トナス清盛變ヲ聞キテ熊野ヨリ還リ竊ニ奉迎ノ謀ヲ爲ス帝婦人ノ粧ヲ爲シ車ニ駕シテ藻壁門ヲ出テ遂ニ六波羅ニ幸ス上皇亦服ヲ變シ馬ニ騎リテ仁和寺ニ幸ス帝清盛及子重盛ヲシテ信賴義朝ヲ討セシメ大ニ之ヲ敗ル後チ信賴義朝皆誅ニ伏スト雖氏其實ハ源平權ヲ争フノ戰ナリ此戰ニ義朝敗北シテ源氏ノ勢力挫ケバコレヨリ平氏獨盛ナリ

源平二氏

五十五

平氏ノ權勢

平氏ハ既ニ武力ヲ以テ權威ヲ得レバ其勢一時燄々タル烈火ノ如ク數年ヲ出デズシテ清盛從一位太政大臣ニ進ミ時ノ天子高倉ノ皇后モ其家ヨリ出テ皇后德子ハ清盛ノ女ナリ太子後天安德帝トナルモ其外孫ナリ其一族ノ子弟ハ悉ク要職ヲ占メ莊園采地ハ天下ニ半バズ富貴繁榮與ニ並ブモノナシ時人慕尙シテ六波羅様ト曰フ是ニ於テ清盛復々憚ル所ナク或ハ高倉帝ニ逼リテ位ヲ辭セシメ或ハ後白河法皇ヲ幽閉シ奉ツル等藤氏モ爲サザル暴虐ヲ爲スニ至レリ

源氏遺孽ノ激憤

是時ニ當リテ諸國ニ離散セル源氏ノ遺孽ハ數世平氏ト肩ヲ並ベテ朝廷ニ奉事セル我族ノ沈淪シテ獨平氏ノ盛ナルヲ視密ニ武ヲ練リ腕ヲ扼リテ恢復ノ時機ヲ俟テリ然ルニ平氏ハ既ニ政權ヲ得タル以來太平ニ慣レ遂ニ亦風流ニ耽リ詩歌管絃ヲ事トセシカバ暫時ノ間ニ其氣風

平氏ノ遊惰

藤氏一流ノ人物トナレリ

是ヲ以テ清盛ノ晚年以仁王ノ平氏討伐ノ令旨一タビ出ツルヤ諸道ノ源氏一時ニ蜂起シ數千ノ旗ヲ翻シテ皆京師ヲ指シテ上リケリ平安城裏ノ花月ニ心醉スル柔軟男兒ハ爭テカ此等ノ獅子猛虎ニ類スル勇士ニ敵スルヲ得ンヤ義仲信濃ヲ發シ上洛スルニ及ビテ平氏ノ一族相率井テ京師ヲ逃レ是時清盛既ニ死セリ尋キテ義經範賴鎌倉ヨリ來リ攻ムルニ會シ數年ナラズシテ平氏悉ク滅サレテ昔日ノ榮華今日ノ夢トナル

平氏ノ滅亡

第五篇

前篇ニ於テ孝德帝ノ時ヨリ安德帝ノ世ニ至ルマデノ間ニ發セル史上現象ノ最重ナルモノニ就キ其大綱ヲ畧叙シ來レバコレヨリ更ニ其細

目即チ文學、佛法、美術、政治、風俗ニ就キ將ニ述ブル所アラムトス

文學

孝德帝位ニ即キ玉フヤ唐土ノ文物ヲ慕ヒ百般ノ事皆唐風ヲ學ベリ蓋シ當時支那ノ我ニ於ケル猶今日歐米ノ我ニ於ケルガ若シ其開化固ヨリ我比ニ非ルナリ夫レ開化劣等ノ國ハ開化優等ノ國ヲ模擬シテ其位地ニ進マムトスルハ固ヨリ自然ノ勢ニ出ヅ之ニ加フルニ天智帝ニ至リ三韓ヲ放擲シテ唐土ト平和ノ交際ヲ結ヒ玉ヘバ使節ノ往復應酬ノ禮ナドモ起ル斯ク唐風ヲ學ブト使節ノ往復ナドアルニ於テハ支那ノ語ニ通セザル可ラズ支那ノ文ヲ善クセザル可ラズ又支那ノ書ヲ讀マザル可ラズ是ニ於テ支那學ノ我ニ於ケル益緊要ニシテ缺ク可ラザルノ姿トナレリ

始メテ學校ヲ建ツ

大學及國學

大學ノ科程

支那學ノ我ニ緊要ナルヲ斯ノ如ク大ナレバ益之ヲ振起セザル可ラズ是ニ於テ孝德帝玄理僧旻ヲ以テ博士ニ任シ天智帝又學校ヲ興シ百濟人鬼室集斯ヲ以テ學職頭トシ同國人僧詠ヲ以テ大學頭トシ博士學生等ヲ置キ學業ヲ教授セシム是レ學校ヲ建ツルノ始トス天武帝亦占星臺ヲ建テ天文博士天文生ヲ置キ又大學ニ音博士書博士ヲ置キ各生徒ヲ擇ヒテ其業ニ就カシム然レモ一般ノ黠ヨリ見テ學制ノ大ニ備ハルハ文武帝大寶令ヲ定メ元正帝ノ養老中之ヲ修正セシノ後ニ在リ是時ヨリ唯大學ヲ京師ニ置クノミナラズ亦國學ヲ諸國ニ置キ而シテ國學ハ經籍ヲ重トシテ兼テ他ノ普通科ヲ授クルノ所トシ大學ハ專門科ヲ授クルノ所トセリ而シテ當時大學ノ專門科四アリ一ナ紀傳ト云ヒテ歷史學ヲ主トシ兼

文學

五十九

子テ文章ニ通スルモノナリニテ明經ト云ヒテ六經一傳 周易尚書周禮儀禮禮記毛詩春秋左氏傳ヲ謂フ而シテ ナ講スルヲ先トシ兼テテ論語孝經ヲ習フモ各一經トシテ生徒ニ授ク

ノナリニテ明法ト云ヒテ律令格式ヲ説クヲ專トスルモノナリ四ヲ算道ト云フテ數理ヲ辨明スルヲ宗トスルモノナリ總ベテ之ヲ稱シテ四道ト云フ大博士ヲ置キ紀傳明經ノ二科ニ兼テ通シテ明法ヲモ兼テシメタリト云フ其後各科專門ノ學トナリ博士ノ員大ニ増加ス 當時文章博士アリ

テ紀傳博士ナシ文章博士ハ 蓋シ紀傳ノ道ヲ掌ルナリ 其他又音博士書博士アリ

當時學制ノ備ハルヲ斯ノ如シト雖モ其要トスル所ハ士ヲ取り官ニ任スルニ止リ上下ノ人民ヲシテ悉ク學校ニ入ラシメ普ク教育ヲ敷クノ意ニ非ス故ニ其生徒ヲ取ルニ大學生ハ五位以上ノ子孫及ヒ東西史部ノ子弟ニ止リ 若シ八位以上ノ子モ情願スレバ之ヲ許ス 國學生ハ郡司ノ子弟ニ止ル、共ニ

學校育才ノ
目的及ヒ制
限

十三歳以上十六歳以下ニシテ性質聰良ナル者ヲ選ム而シテ學生卒業スレバ撰擧ノ法アリテ式部省之ヲ試ム大學ヨリ擧グル者ヲ擧人ト云ヒ國學ヨリ擧グル者ヲ貢人ト云フ貢人ハ國司既ニ試ミテ後ニ貢進ス其甲第乙第ニ止ル者ハ奏上シテ之ヲ留ム即チ所謂及第ナリ敘位任官各等差アリ其丙第以下ハ登用スルヲ得ズ是ヲ落第ト云フ

以上ニ述ブル所ハ大寶養老ノ間ニ定ムル學制ノ要略ニシテ事物ノ變遷ニ從ヒ時ニ小異同ナキニ非ズト雖モ中古王朝ノ間學制ノ大綱ハ此ニ外ナラザルナリ

留學生
學者ノ輩出

此他遣唐使ト共ニ屢留學生ヲ唐土ニ遣シテ彼地ニ學バシム

朝廷心ヲ文學ニ用フルヲ斯ノ如ク厚キガ故ニ學士モ彬々輩出シテ天武ノ朝ニハ河内鯨三輪高市醫ノ若キアリ持統文武ノ朝ニハ山田三

淡海三船
吉備眞備

桓武帝ノ後
文學更ニ盛
ナリ

方、粟田真人、葛野王、刀利宣令、守部大隅ノ若キアリ奈良ノ朝元明帝ヨリ光仁帝
ニ至ルニハ紀清人、舍人親王、越智廣江、鹽屋古齋、淡海三船、吉備眞備ノ
 若キアリ皆博學洽識或ハ律令ニ明ニ或ハ經義ニ長シ或ハ文章ニ巧ミ
 二名一世ニ高シ就中三船ハ孝謙、淳仁、稱徳、光仁、桓武ニ歷仕シ延暦四年ニ
卒ス神武以來ノ諡號ハ三船ノ定ムル所ナリ〇眞備ハ元
 正帝ノ靈龜二年唐ニ留學シテ經史ヲ研究シ博ク衆藝ニ涉ル、天平中歸朝
 ス、聖武、孝謙、淳仁、稱徳ノ四朝ニ事ヘ累遷シテ右大臣トナル其朝政ヲ輔ケ
 テ裨補スル所多シ釋奠ノ禮又眞備ニ至リテ初メテ備ハ
 ル寶龜六年薨ス年八十三著ス所私教類聚三十八條アリ 然レハ文學ノ
 最盛ナルハ桓武帝以後トス帝學ヲ好ミ延暦十二年都ヲ平安ニ遷シ玉
 フヤ更ニ大學寮ヲ築キ講堂寮舍結構頗大ナリ是ヨリ先キ淳仁帝天平
 寶字元年始メテ詔シテ公麻田三十町ヲ置キテ諸生ノ供給ニ充タシメ
 シカハ是ニ至リテ大學ノ生徒漸ク多ク費用給セザルヲ以テ更ニ水田
 百二町ヲ加ヘ前ト通シテ百三十二町トス名ケテ勸學田ト云フ又公羊

私塾

學者ノ輩出

文學

六十二

穀梁ノ二傳ヲ立テ、各一經トシ學生ニ教授セシム帝學術ヲ獎勵スル
 一斯ノ如シ故ニ文教ノ盛ナル一此時ヨリ大ナルハナシ平城、嵯峨、淳
 和、仁明、文徳ノ數朝皆能ク意ヲ學問ニ注シ勸導誘勵シ玉ヘ、菅原清
 公ノ文章院、藤原冬嗣ノ勸學院、嵯峨皇后橘氏ノ學館院、恒貞親王ノ淳
 和院、在原行平ノ獎學院等ノ私塾起リ其學生ノ衆キ一廻ニ大學ニ超
 エタリ
 延暦以後文教ノ盛ナル一斯ノ如クナレバ隨ヒテ博學鴻識ノ士競ヒ起
 リテ才力ヲ逞クス其最著ル、者ヲ菅原大江兩氏トス兩氏ノ外ニハ都
 良香、小野篁、橘廣相、藤原菅根、清原夏野等其學當時ニ冠絶ス寬平延喜
 ノ際ニ當リテハ三統理平、紀長谷雄、藤原在衡等出テ、儒雅文章ヲ以
 テ一時ニ名アリ然レハ其流弊ニ至リテハ往々記誦詞章ノ習ニ陥リ實

用ノ學經濟ノ術ニ短ナルモ多シ獨菅原道眞三善清行アリテ其間ニ起リ才學遠ク時輩ニ超越ス道眞ノ事ハ既ニ前ニ述ベタリ延喜十四年醍醐帝詔シテ直言ヲ求ム清行封事ヲ上リ祭祀ヲ肅ミ奢侈ヲ禁シ田制ヲ修ムルヨリ以テ境内ノ奸濫ヲ糺シ僧徒ノ濫惡及宿衛ノ強暴ヲ禁スル等便宜十二事ヲ陳ス其言切ニ時弊ニ當ル中ニ學校ノ盛衰ヲ論シテ勸學田ヲ舊ノ如クセムコトヲ痛言スルアリ當時大學生ノ料ニ充ルモノハ唯大炊寮ノ飯料米ト山城國久世郡ノ遺田七町アルノミヲ以テナリ然ラハ當時學問ノ獎勵復タ往時ノ如クナラザルヲ知ルベシ然レモ後延喜ノ大學式ニ學田舉稻及考課ノ法アルヲ見レバ清行ノ言行ハレタルナリ清行後チ參議宮内卿ニ任ス十七年卒ス年七十二其文集ヲ善家集ト云フ然レモ當時藤原氏世々外戚ヲ以テ相權ヲ握リ大小ノ政悉ク其手ニ出ツレ

ハ爾後競ヒテ浮靡ヲ事トシ詞藻ヲ尚ヒ實學ヲ顧ルナシ是ニ於テ未タ久シカラズシテ詩賦ノ類專ラ流行シテ文教復タ漸ク衰フ時ニ菅原文時源順大江匡衡菅原輔正藤原公任大江匡房藤原通俊等ノ諸氏アリト雖モ復タ昔時ノ如クナル能ハズ後チ二百餘年ヲ歷保元平治ノ亂起ルニ及ビテ政權長ク武門ニ歸シ學寮頽敗其貢試釋奠ノ儀僅ニ舊式ノ目ヲ存スルノミ

斯ク文學ノ我國ニ行ハル、ニ及ビテ遂ニ律令ノ撰定モ起リ國史ノ編纂モ生セリ然レモ律令ノ撰定ハ前既ニ述ブレバ之ヲ畧シテ唯國史ノ編纂ニ關シ聊カ述ブル所アラムトス

抑國史ノ始メテ我國ニ成ルハ元明帝和銅五年太安麻呂ノ勅ヲ奉シテ撰錄セル古事記トス是レ國史ノ最モ古キモノナリ是ヨリ先キ推古帝ノ世聖德太子蘇我

日本書紀

續日本紀

日本後紀及
續日本後
紀

文德實錄及
三代實錄
新國史

馬子ト共ニ國史ヲ修ムト欲シ天皇記國記臣連伴造百八十部及公民等ノ本記ヲ撰錄シ玉フ未タ全ク成ラザルニ太子馬子共ニ薨セハ其書藏メテ蘇我氏ノ家ニ在リ其後入鹿誅セラル、ニ及ビテ父蝦夷悉ク天皇記國記等ヲ燒キテ自殺ス今世ニ存スル所ノ舊事記ハ聖德太子ノ作ト云ヘ共後世ノ偽書ナリト云フ然レモ是レ漢文ヲ以テ記スルニ非ス漢字ノ音ヲ假リ我國語ヲ以テ記スルモノナリ而シテ始メテ漢文ヲ用フルモノハ日本書紀トス舍人親王、紀清人、宅藤麻呂、太安麻呂勅ヲ奉シテ更ニ國史編纂ニ從事シ七年ヲ歷テ元正帝養老四年ニ成ル日本書紀ト名ク三十卷アリ記スルニ漢文ヲ以テスコレヨリ世々國史ノ撰アリ桓武帝ノ世ニ續日本紀アリ菅野眞道、秋篠安人、中科巨都雄等ノ修ムル所ナリ之ニ次キテ日本後紀仁明帝ノ承和七年ニ成ル續日本後紀清和帝ノ貞觀十一年ニ成ル文德實錄陽成帝三年ニ成ル三代實錄醍醐帝ノ延喜元年ニ成ルアリ皆當時學士ノ勅ヲ奉ジテ修ムル所ナリ以上ヲ六國史ト云フコレヨリ後大江朝綱ノ新國史、藤原道憲ノ

本朝政紀及
日本紀畧

懷風藻、文
華秀麗集、
秘府畧、經
國集、本朝
文粹、新撰
姓氏錄
當時ノ史ハ
意ヲ事實ノ
連絡ニ用ヒ
ザルハ深ク
尤ム可ラズ

以上ノ史ニ
取ルベキ所

本朝政紀及日本紀畧

撰者詳ナラズ

等アリ其他詩文集ニハ懷風藻、

天平勝實中淡海三船撰

文華秀麗集

撰者詳ナラズ淳和帝以後ニ成レリ

秘府畧、經國集

上ノ二書ハ淳和帝ノ天長中滋野貞主等撰

本朝文粹

藤原明衡ノ撰ニシテ嵯峨帝ヨリ一條帝ニ至ルマデノ文ヲ載ス

等アリ臣族ノ系統ヲ記ス

新撰姓氏錄

嵯峨帝ノ弘仁中万多親王等撰ス

アリ吾人古代ノ事情ヲ知ルヲ得ルハ此等ノ書アルニ由リテナリ但タ當時ノ史ハ專ラ編年躰ヲ用ヒ

事實ノ連絡ヲ重ゼズシテ乾燥無味ノ事實ヲ年月ノ下ニ繫キ讀者ヲシテ治亂興廢ノ沿革ヲ知ルニ難カラシムルヲ實ニ惜ムベキトス然レモ

此レ人智ノ頗進歩シタル人ニ向ヒテ言フベキコトニシテ夫ノ日月星辰ガ地球ノ周圍ヲ旋轉スルト思ヒ又地球ハ方形ナラムト考ヘ居ル時代

ノ人ニ向ヒテ深ク責ムベカラザルナリ

當時ノ著書ノ不完全ナルハ右ニ擧グル所ヲ以テ明ナリト雖モ亦大ニ

ハ宗教ノ氣
習ニ染マザ
ルニ在リ

取ルベキ所アリ他ナシ編者宗教ノ氣習ニ染マザルヲ是ナリ凡ソ教説ニ感染スル人ハ玄妙ノ理ヲ悟リテ思想進歩セルガ故ニ其記スル所妙趣アリト雖モ玄深ノ實跡ヲ稽查セムトスルヨリ遂ニ空妄ナル想像ニ走り奇怪ナル説ヲ掲出スルノ弊ヲ免レズ中古泰西ノ史書本邦ノ水鏡、大鏡、源氏物語、平家物語、源平盛衰記等皆然ラザルハナシ然ルニ六國史等ノ編者ハ支那ノ實驗主義ヲ以テ其本陣トスルガ故ニ單ニ覺知シ得ベキ事ノミヲ取り夫ノ鬼神幽靈ナドノ妄想ヲ懷カザレバ其記スル所或ハ政事上ノ利害ヨリ已ムヲ得ズ事實ヲ潤飾スルカ或ハ知識ノ不充分ナルヨリ記事蒙蔽ナルヲ除クノ外概シテ正覈信據スルニ足ルトス故ニ後世史學大ニ發達シタラムニハ此雜駁無味ノ記録中ヨリ滋味ノ事件ヲ蒐集スルヲ必スナシト言フ能ハズ

醫學及ヒ天
文學

名醫

又醫學天文學モ上古ノ末漢法我國ニ入來リシヨリ朝廷世々之ヲ獎勵シ天武帝ノ時ニ外藥寮アリ占星臺アリ持統帝ノ時ニ醫博士呪禁博士アリ文武帝ノ大寶年間ニ及ヒ更ニ典藥寮陰陽寮ヲ置キテ醫術天文ノ諸生ヲ教授ス天平寶字元年公麻田各十町ヲ置キテ諸生ノ供給ニ充タシム桓武帝位ニ即キ玉フニ及ビテ又之ヲ増シ玉ヘリ
是ニ於テ醫家ニハ和氣、丹波、惟宗、清原、中原、小槻、菅原、安倍、紀、諸氏ノ若キ名家相繼ギテ起ル而シテ諸氏中ノ人ニ就キ其重ナルモノヲ擧ケバ桓武帝ノ世ニ羽栗翼、和氣廣世、廣世ハ和氣氏ノ始祖ニシテ延暦四年典藥頭トナリ大學頭ヲ兼ヌ出雲廣貞、廣貞ハ菅原氏ノ祖ナリ方術ニ精シ延暦十四年帝不豫ナリ廣貞藥ヲ奏シテ功アリ安倍眞直アリ淳和帝ノ世ニ菅原峯嗣アリ仁明帝ノ世ニ大村直福吉、福吉ハ紀氏ノ祖ナリ承和二年右近衛ノ侍醫ニ任セラル最賜科ヲ善クシ當世及ブナシアリ文德帝ノ世ニ紀夏井アリ圓融帝ノ世ニ丹

文學

波康賴 丹波氏ノ祖ニシテ其術特ニ精シ 同重雅、清原滋秀アリ皆名醫ヲ以テ知ラル而

シテ最著ハル、モノハ雅忠トス 雅忠ハ白河帝ノ世ノ人、承曆中高麗王ノ妃疾ム王書ヲ太宰府ニ贈リ厚幣ヲ以テ良醫ヲ求ム時ニ雅忠ヲ以テ選ニ擬ス朝廷其書辭禮ヲ失フヲ以テ之ヲ却ケ太宰府ヲシテ報答セシム内ニ扁鵲何ソ雞林ノ雲ニ入ランノ語アリコレヨリ世雅忠ヲ稱シテ日本ノ扁鵲トス

名醫ノ出ル斯ノ如クナレバ方書ノ觀ルベキモノ亦隨ヒテ生ス桓武帝

ノ世ニ藥經大素等 和氣廣世ノ撰 アリ平城帝ノ世ニ大同類聚方一百卷 出雲廣真安倍

真直等 大村直福 アリ是ヲ本邦方書ノ始トス仁明帝ノ世ニ治療記 吉ノ撰

圓融帝ノ世ニ醫心方三十卷 丹波康賴ノ撰 出ツ此書醫事具載セザルナシ稱シ

テ本邦方書ノ府庫トス此類ノ書猶他ニ數多アリ

又天文學ニハ家原氏主 清和帝頃ノ人、勘解由次官 三善清行 前ニ見ユ 加茂忠

行 村上帝頃ノ人、陰陽師タリ 安倍晴明 花山帝頃ノ人、從四位天文博士トナリ後播磨守ニ進ム 等ノ諸

後從五位丹波介ニ進ム

醫書

天文家

氏アリ其後加茂安倍ノ二氏此道ヲ以テ世々朝廷ニ仕へ往々名師ヲ出ダセリ

當時漢流ノ學術盛ナルト斯ノ如シト雖凡國語ヲ以テ事ヲ記スルノ風

未タ全ク廢絶セザルナリ抑上古應神帝ノ世漢學我國ニ入りシ以降國

語ヲ以テ事ヲ記セムトスルモノハ漢字ノ音ト訓義トヲ假リテ此方ノ

言語ニ當ツ之ヲ万葉假字ト曰フ古事記、日本紀及ヒ萬葉ノ歌又ハ續

日本紀ノ宣命ノ如キモノ即チ是ナリ後片假字平假字ノ二種行ハレテ

ヨリ世ニ便ナルヲ以テ所謂万葉假字ノ類ハ遂ニ廢絶ニ歸セリ片假字

ハ吉備眞備平假字ハ弘法大師ニ始マルト云フ或ハ曰フ其已前ヨリ既

ニ之レアリト兎モ角モ此兩種ノ假字行ハレテヨリ從前假字ノ名稱ハ

此ニ屬シ漢字ヲバ眞字ト稱ヘリ

國語ヲ以テ事ヲ記スルノ風全ク滅セズ
万葉假字
片假字及ヒ
平假字

大印ハ

兩種ノ假字
行ハレテヨ
リ和語ヲ以
テ事ヲ記ス
ルノ風次第
ニ盛ナリ

和文和歌ノ
書

然レハ當時
假字ヲ以テ
文ヲ屬スル
ハ婦女ノ業
ニ屬セリ

既ニ兩種ノ假字行ハル、ニ及ビテ自由ニ思フ所ヲ記スルヲ得ルヲ以
テ片假字若クハ平假字ノ和語ヲ以テ事ヲ記スルノ風次第ニ行ハル是
ニ於テ和文和歌漸ク盛ナリ清和帝以來和文ニ於テハ伊勢物語作者在
原業平
ナリト竹取物語作者源順ナリト云フ土佐日記紀貫之
ノ作住吉物語作者詳カ
ナラズ
須麻記菅家ノ作ナリト云フ宇津保物語作者確カ
ナラズ大和物語作者滋春トモ花山
院トモ云ヘハ確カ
ナラズ
ナラノ類出テ和歌ニ於テハ古今和歌集、新撰和歌集等ノ書出デケリ
皆日用ノ言語ヲ以テ自在ニ我思想ヲ寫シ出スヲ以テ趣味アリ然レハ
當時假字ヲ以テ文ヲ屬スルハ婦女ノ業ニシテ男子ハ漢文ヲ專トスル
ノ有様ナレバ男子ハ公然和文ヲ作ルヲ耻ルノ風アリ紀貫之ノ土佐日
記ヲ作ルヤ假ニ其身ヲ女トナスモ此レガ故ナルベシ且前ノ和文ノ書
中此ヲ除クノ外作者ノ確然世ニ知レザルモ作者其名ヲ世ニ公ニスル

和文ノ名家

才媛輩出

ナ好マザルニ由ラム乎故ニ此等ノ書文章婉麗ナリト雖ハ活潑ノ精神
ニ乏シキヲ免レズ特ニ當時泰平ニ屬シ佛法盛ナリシカバ貴人摺紳既
ニ遊惰ニ流レ其後益甚シク四季ノ眺ニ饗宴ヲ事トシ清歌妙舞ニ耳目
ヲ娛マシメ春ノ温カナルヲ見テ情ノ濃カナルヲ念ヒ秋ノ寂キヲ見テ
物ノ憐レヲ觀ジ唯風流ニノミ耽レバ和文ハコレニツレテ益婉麗ニ赴
キ落久保作者源順ト云フモ
ノアリ確カナラズ濱松中納言物語、紫式部ノ源氏物語、同日
記、大貳二位ノ狭衣、和泉式部ノ日記、赤染衛門ノ榮花物語一説ニ曰ク
藤原爲業ノ
ノ著ナ
リト清少納言ノ枕草紙ノ若キハ花朝月夕ノ有様ヲ記シ少年佳人ノ
風情ヲ寫ス、愈妙ナリ之ニ伴レ和歌ノ技モ大ニ進ミテ白河帝ノ世ニ
後拾遺和歌集、續本朝秀句等ノ書出デケリ然レハ其後漸ク亂離ノ世
トナレバ名匠アリト雖ハ概シテ復タ前ノ如ク盛ナラズ

佛教

曩ニ中大兄中臣鎌足ノ蘇我氏ヲ誅スルヤ唯其專横ヲ惡ムニ出デタル
 モノニシテ佛法ヲ廢スルノ意アルニ非レハ佛法ハ與ニ衰滅ニ歸セズ
 シテ孝徳ヨリ元明元正ニ至ル諸帝ノ間學問僧ヲドテ唐土ニ遣ハサレ
 テ益蔓延スルノ勢アリ然レモ當時大化ノ維新ヲ去ル日尙淺ク百事創
 業ニ屬シテ爲スベキノ事務尙繁劇ナレバ已上ノ諸帝專ラ心ヲ此ニ留
 メ玉ヒ深ク佛法ヲ娛シムニ暇アラザルナリ故ニ之ヲ重ンジ玉ヘリト
 雖モ未ダ其甚シキニ至ラズ文武帝大寶中ニ僧尼令ヲ定メテ痛ク僧尼
 ノ行狀ヲ戒メ玉ヘルヲ見テモ其佛法ニ心醉シ玉ハザルヲ知ルベ
 シ然レモ聖武帝ノ時ニ至リテハ百事既ニ整頓シ唯之ヲ守リテ失ハザ
 レバ乃チ足レリノ有様ナレバ爲スベキノ事少ナクシテ閑暇多カリキ

孝徳元正ノ
 間佛法未ダ
 甚熾ナラズ

聖武帝ノ時
 ヨリ佛法盛
 ナリ

佛法ト支那
 道德學トノ
 比較

其上名僧玄助行基ノ如キアレバ遂ニ帝深ク佛法ヲ重ンジ玉ヒ寺刹伽
 藍ノ設夥シ是ニ於テ佛法初メテ盛ナリ其詳ナルヲ既ニ第四篇ニ述ベ
 タリ凡ソ世ニ勢力ヲ得ルモノハ其時勢ニ應シ巧ミニ人ノ感情ヲ引起
 スモノヨリ大ナルハナシ唯道理ノミヲ説キテ服從セシムトセハ其
 勞甚シクシテ其功少シ支那ノ道德學ハ厚ク朝廷ノ保護ヲ受ケ學校ニ
 明經ト云フ科ヲ設ケ其博士ヲ置キ諸生ニ教ヘ獎勵至ラザル所ナキモ
 此學ハ唯道理ヲ先トシ感情ヲ後トスルガ故ニ政府保護ノ厚カリシ間
 盛ナリシモ保護衰フルニ及ビテハ此學萎靡振ハザルニ至レリ之ニ反
 シテ佛法ハ道理ヨリ寧ロ感情ヲ主トシ或ハ玄妙不可思議ノ理ヲ講シ
 或ハ天堂地獄ノ説ヲ語り務メテ聽衆感情ノ發動シ易キ仕組ニ造ルヲ
 以テ今日ノ如キ學理的ノ世ニハ或ハ適當セザルコトアリモ當時ノ如キ

以下

佛法ハ感情
ヲ以テ目的
トシ智力ヲ
以テ手段ト
ス
孝謙帝

黄金ノ出ルモ佛徳ノ致ス所ト信スル人智狹隘ノ世 聖武帝ノ時陸奥始
メテ黄金ヲ出ス帝
以テ佛徳ニ 由ルトスニ在リテハ最適當スル者トス之ニ加フルニ僧徒ノ中ニ兼
子テ支那學ニ通スルモノモ多ク醫療モ概シテ其爲ス所ナレバ見ルモ
ノ益歸依ノ心ヲ發セリ故ニ當時佛法ノ仕組ヲ評セバ感情ヲ以テ目的
トシ智力ヲ以テ手段トスルノ姿ナリ佛法ノ仕組斯ル有様ナレバ婦人
ノ如キ柔婉ナル性質ノモノニハ特ニ入り易シトス故ニ孝謙帝嗣ギ立
チ玉フニ及ビテ崇佛ノ念先帝ニ減ゼズ連ニ力役ヲ興シ伽藍ヲ修メ寺
領ヲ施シテ國內ノ疲弊ヲモ顧ミ玉ハズ時ニ左大臣藤原永手、參議藤
原百川等ノ賢者アリト雖正力、如何トモスル能ハズ而シテ其甚キニ
及ビテハ從來寵愛シ玉ヘル惠美押勝ヲ廢シ代フルニ弓削道鏡ヲ以テ
シ累ニ昇シテ法皇トナシ終ニ万世一系ノ帝統モ動モスレハ道鏡ノ手

ニ歸セムトスルノ有様ニ至レリ 押勝初メ藤原仲麻呂ト稱ス姿容アル
ヲ以テ帝ノ寵ヲ受ケ紫微内相トナリ
資格大臣ニ類スコレヨリ仲麻呂威内外ニ震フ後姓名ヲ惠美押勝ト賜ヒ
尙舅ト稱ス功封功田ヲ給シテ世襲セシム終ニ正一位太師ニ進ム然レモ
未タ幾クナラズシテ道鏡内道場ニ入ルニ及ビテ寵ヲ奪ハル是ニ於テ押
勝道鏡ヲ除キ遂ニ帝ヲ幽セムトテ謀ル既ニシテ事覺ハレテ誅ニ伏スコ
レヨリ道鏡歴進シテ太政大臣禪師トナリ更ニ法皇ノ位ニ進ミ服食ニ
天子ニ擬ス政細大トナク悉ク其手ニ在リ是ニ於テ八幡神教ヲ矯メテ天
位ヲ覬覦ス帝乃チ和氣清麻呂ニ命シ字佐ニ詣リ神教ヲ受ケシム清麻呂
還リ復命シテ曰ク臣親ヲ神勅ヲ受ケシニ云ク我邦ハ開闢以來皇家一系
道鏡ハ何者ゾ敢テ神器ヲ覬覦ス 識者道鏡ヲ以テ非望ヲ覬覦スルモノ
大逆無道ナリト乃チ事漸ク止ム
トシテ專ラ罪ヲ歸スルト雖凡ソ源因アレバ必ズ結果アリ今帝崇佛
ノ意ノ厚カリシ點ヨリ推究セバ帝亦事宜ニ依リテ之ヲ許シ玉フノ意
ナシトモ期ス可ラズ幸ニ和氣清麻呂神教ニ託シテ痛ク道鏡ヲ面折シ
事漸ク止ムヲ得タリシハ當時神道未タ全ク滅ビザルノ致ス所ニシテ
抑國家ノ幸ト謂フベシ 此後久シク女帝アラザリシ
ハ此ニ懲リテノコナラムカ

傳教大師像

備前國千手山弘法寺藏
(集古十種)

絲毫威儀寫



斯ノ如ク佛法ノ盛ナルニ當
 リテハ名僧碩師ノ入唐シテ
 求法セルコト愈盛ナルガ故
 ニ諸派傳來シテ教義愈進歩
 スコレヨリ先キ推古帝ノ世
 ニ三論成實ノ二宗 高麗ノ貢僧
惠灌之ヲ傳
 フ齊明帝ノ時ニ法相宗 又唯
識宗
 ト曰フ帝ノ四年僧智通智
 達之ヲ唐僧玄奘ニ學ベリ 俱
 舍宗ノ傳來アリ聖武帝ノ時
 ニ又華嚴宗 又賢首宗ト曰フ
帝ノ天平八年唐
僧道璿歸化シ
ノ傳ハルアリ

僧徒社會ハ
門閥ノ弊ナ

是ニ至リテ又律宗

天平勝寶六年唐僧鑑真歸
化シテ始メテ之ヲ傳フ

ノ渡來アリコレヨリ後桓

武帝ノ時最澄天台宗ヲ傳ヘ

最澄姓ハ三津氏近江ノ人七才ニシテ學ヲ受
ク聰明絕倫十二ニシテ出家ス唯識ヲ習ヒ博

以テ常ニ浮海ノ志アリ遂ニ遣唐使藤原葛野麻呂ニ從ヒテ唐ニ赴キ國清
寺ノ道邃ニ就キテ台教ヲ受ク二十四年ニ歸リ其齋ス所ノ佛像經論ヲ獻
シテ台教ノ功德ヲ奏ス弘仁十三年寂ス貞觀中傳教大師ノ號ヲ贈ラル大
師ノ號ヲ賜フハ此ニ始マル弟子義真圓澄圓仁等最著ハレ皆 嵯峨帝ノ
相繼ヤテ天台座主ニ任セラル延曆寺ノ興ルコレヨリ始マル

世空海眞言宗ヲ傳フ 空海姓ハ佐伯氏讚岐ノ人幼ニシテ穎悟大學ニ遊ヒ
博學多通深ク佛法ヲ好ム遂ニ落髮シテ僧トナル延
曆中遣唐使葛野麻呂ニ從ヒテ唐ニ赴キ青竜寺ノ僧惠果ニ就キテ密教ヲ
學ブ居ル一三歳ニシテ歸ル弘仁七年始メテ道場ヲ紀伊高野山ニ開キ金
剛峯寺ト曰フ又勅シテ東寺ヲ賜ヒテ灌頂院ヲ建テシム密教コレヨリ大
ニ興ル承和二年寂ス延喜中弘法大師ノ號ヲ賜フ後世最澄ト并ヒ稱シ本
朝佛法ヲ唱フルモノ

抑漢學ニ於テハ堂々タル大學國學ノ設アリト雖
 凡其學生ヲ取ルコト概シテ唯有祿者ニ止リテ人民一般ニ普及セザル
 ガ故ニ其區域狹隘ナレ凡佛法ニ至リテハ官立ノ學院ナキモ何人ニテ

弘法大師像

伊豆國般若院藏
(集古十種)

緋堂正威繪寫



モ自由ニ僧徒トナルヲ得テ毫
モ其間ニ制限ナク其區域廣大
ナルヲ以テ桓武嵯峨ノ以後ハ
一時ノ名僧紛々輩出シ其說益
空高妙理ニ進メリ之ニ加フル
ニ朝廷漸ク遊惰ニ流レ思想柔
弱ナリシカバ物ノ憐ヲ觀ジ世
ノ無常ヲ悟ル等ノ事ハ往時ヨ
リ一層其感情ニ適セシガ故ニ
佛法ノ勢力ヲ世ニ占ムルヲ益
大ナリ

朝廷ノ有様

朝廷ノ有様

佛法ハ國家
ノ護法トナ
ル

朝廷斯ク佛說ニ耽リテ物ノ憐ヲ觀シ世ノ無常ヲ悟ルニ於テハ既ニ柔
弱ナル心思ハ益柔弱ニ流レテ勇進活潑ノ氣象ニ乏シキガ故ニ佛法ノ
功德ヲ頼ムノ念益厚シ特ニ僧徒ノ中ニ本地垂跡ノ說モ盛ニシテ諸神
ニ附會スルニ佛名ヲ以テセシカバ是亦佛法ノ勢力ヲ助成シ終ニ佛法
ヲ以テ國家ノ護法トスルニ至レリ是ニ至リテ神道殆ド滅ビテ僅ニ祈
年祭、鎮火祭、大忌祭、大祓等ノ儀式ヲ存スルノミコレヨリ天變地妖ア
レバ必佛事ヲ修メテ之ヲ退ケムヲ祈リ水旱兵寇アレバ必經ヲ轉シ
テ之ヲ鎮セムヲ禱ル其諸國ノ文殊會、國分寺、諸寺、造院等ノ料ノ如
キハ歳々官帑ヲ費スヲ殆ド三百万束而シテ臨時ノ供費勝ゲテ數フ可
ラズ朝廷既ニ斯ノ如シ故ニ臣民モ上、王公卿士ヨリ下、庶人ニ至ルマ
デ寺塔ヲ建テザルモノハ人ニ比スルヲ得ズ故ニ資産ヲ傾ケテ以テ浮

僧徒社會ノ
内部ハ軍隊
組織ナリ

圖ヲ造リ田園ヲ捨テ、以テ寺地トナシ讀經齋食始ト絶コルナシ斯ク
 盛ナルニツレ當時ノ詩歌文章モ亦多ク佛説ヲ雜ヘ無常空高ノ理佛法
 ヲ説クガ故ニ其調格概シテ行動的ノ者ヨリ寧ロ受動的ノ者多シ
 佛法旺盛ナリシガ爲メニ世人ノ氣力ハ上下共ニ柔弱ニ流レタルヲ斯
 ノ如シト雖モ夫ノ僧徒社會ノ内部ヲ見レバ反リテ軍隊組織ノ性質ヲ
 有シ其勇武武人ニ劣ラザルニ至レリ蓋シ諸派并立スルニ當リテハ各
 派ノ僧徒自己ノ教義ノ普及セムヲ欲シ勢ヒ相競争スルヲ免レズ是
 ニ於テ希望ヲ遂グルニ腕力ヲ以テスルハ道理ヲ以テスルヨリ効利ア
 ルヲ察シ僧兵始メテ起ル當時寺領廣大或ハ百餘町ニ至ルモノアリ且
 置クモ其費用ニ高利ヲ取リテ米穀貨財ヲ貸附クレハ僧兵ヲ
 困シムヲアラズ而シテ首ニ之ヲ置キシモノハ冷泉圓融ノ世延曆寺ノ
 座主良源トス大日本史ニ曰ク良源性剛慢威權ヲ恃ム嘗テ云ク季世澆薄
 乃チ惡僧ヲ鳩聚シ專ラ武技ヲ講シ號シテ衆徒トスト此説ニ據レハ僧兵
 ハ佛法ノ衰微ヨリ起リシモノナリ然レモ余ヲ以テ之ヲ觀ンハ此説當ラ

僧兵ノ強勇
ナル理由

ザルガ若シ何トナレバ當時佛法コレヨリ園城與福東大等ノ諸寺皆僧
 最盛ナレバナリ故ニ今取ラズ
 兵アリ是時ニ當リテ朝官ニハ門閥ノ風盛ニシテオアル者ト雖モ族籍
 卑クケレハ要地ニ昇ル能ハザリシガ之ニ反シテ僧族社會ハ前ニ述ベ
 シ如ク全ク自由平等ニシテ門閥ノ風ナクオノ高キ者ハ要地ヲ占ムル
 ナ得ハ門地賤キガ爲メニ力ヲ朝廷ニ展ブル能ハザル者相競ヒテ去リ
 テ諸國ノ武人ニ歸スルニ非ンバ則チ僧兵トナル又剛勇ノ武夫罪ヲ犯
 シタルモノ、姦惡ノ少年身ヲ容ル、ノ地ナキモノモ寺院ニ投シ佛門
 ニ歸セバ其刑罰ヲ免レタリ斯ル有様ナレハ寺院ハ宛モ惡徒罪人ノ躲
 身處トナリ衆徒多キモノ或ハ一寺ニテ三四千ニ至レリ斯ク諸寺對峙
 シテ封建割據ノ勢ヲナセシカバコレヨリ後意見合ハザレバ互ニ爭鬪
 シ論議起レバ相攻伐シ火ヲ行ヒ人ヲ殺スヲ率テ虛歲ナシ竟ニ其餘勢

僧徒ノ強暴

朝廷ニ派及シ其爲ス所一モ己レニ滿タザルコアレバ則チ神輿ヲ奉ジ兵仗ヲ執リ闕ニ詣リテ囂訴シ紛紜息ムコナシ其甚シキニ至リテハ京師ニ出テ財物ヲ剽掠シ賊ヲナスモノ衆シ然レモ朝廷固ヨリ之ヲ制スルノカナケレバ源平二氏ニ藉リテ僅ニ之ヲ抑フルヲ得シノミ鳥羽帝ノ時白河法皇稱シテ剛斷ノ主トナス其政ヲ爲ス相家ニ牽制セラレズ時人懼伏ス然レモ山門ノ事ニ於テハ如何トモスルナシ嘗テ歎シテ曰ク天下朕ノ命ヲ用ヒザルナシ、唯意ノ如クナラザルモノハ鴨河ノ水、雙陸ノ采、及ビ山法師アルノミト後チ惡僧益強梁慚ル所ナシ平清盛ノ暴ト雖モ如何トモスル能ハズ

斯ク佛法ニ關シテ其最旺盛ナル中古ノ社會ニ發生シタル現象ヲ叙述シテ其終ニ至リ更ニ回顧シテ其世ニ影響スルノ如何ヲ見ルニ佛法ハ

佛法ノ社會
ニ及ボセル
影響

各人一個ノ意志動作ノ上ニ於テハ大ナル影響ヲ生ジタレモ社會ノ有様ヲ改良スルノ點ニ於テハ効力ナキ者ト言ハザル可カラズ人事ニ於テハ大ナル活動ヲ爲シタルモ社會眞實ノ進歩ニ對シテハ何等ノ勢力ナキモノト爲サ、ル可ラズ何トナレハ當時ノ佛法ハ一方ニ於テハ人間風俗ノ頹敗ヲ矯正スル能ハズシテ反リテ其心ヲ柔弱ニシ他ノ一方ニ於テハ伽藍ノ建築寺地ノ寄附僧兵ノ強暴等ノ爲メニ上下困弊シタルヲ以テナリ故ニ佛法ハ美術ノ上ニ多少ノ進歩ヲ與ヘシコアリト雖モ概シテ之ヲ言ハ、佛法ハ當時ノ社會ニ利アリシト言ハンヨリ寧ロ害アリシト言ハンノミ

美術

(繪畫) 上古ノ半ヨリ三韓ノ畫法我國ニ來ルコト前篇既ニ之ヲ説キタリ

(第二)繪畫

隋唐畫法ノ
傳來

畫工

百濟河成

巨勢金岡

然レ其末葉隋唐ト交通シテ其文明ヲ移スニ及ビテ其畫法入來リテ
 三韓ノ畫法ト並ビ行ハル是ニ於テ丹青ノ技益盛ニシテ天智帝ノ世ニ
 倭畫師惠尊アリ天武帝ノ世ニ同音禱アリ元正帝ノ世ニ同押勝アリ孝
 謙帝ノ世ニ楯戸弁麻呂、祖足、越田安方等アリ皆畫ヲ善クス稱徳帝ノ
 時大岡忌寸アリ平城帝ノ時ニ百濟河成アリ河成大同三年左近衛タリ
 圖畫ヲ善クスルヲ以テ屢宮中ニ召サレ其寫ス所ノ古人ノ眞及ビ山川
 艸木皆自ラ生ルガ如シ後世畫ヲ言フモノ多クハ法ヲ河成ニ取ルト云
 フ是ニ至リテ畫法又一層ヲ進ムガ若シ是ヨリ清和、陽成、光孝、宇多、醍
 醐五帝ノ世ニ巨勢金岡アリ金岡ハ中納言巨勢野足ノ好ナリ官大納言
 障子ニ畫キテ歷代鴻儒ノ像ヲ作ル所謂ル紫宸殿聖賢ノ像是ナリ世傳フ
 仁和寺御室ニ在ル所ノ金剛ノ畫馬毎夜近境ノ田間ニ出テ、稻苗ヲ食フ
 里人怒リテ其兩眼ヲ穿ツ乃チ止ムト古今ノ書史繪ノ事ニ至リテハ毎ニ
 巨勢ヲ稱ス其子孫ニ相見、公忠、公望、弘高、是重、信茂等アリ世々圖畫ヲ善ク

飛鳥部常則

藤原基光

宅磨爲成

畫ヲ善クセ
ル僧

鳥羽僧正

ス 醍醐、朱雀、村上二帝ノ世ニ飛鳥部常則アリ常則ハ畫ヲ善クスルヲ
 以テ名一世ニ高シ曾テ
 獅子ヲ畫ク生狗之ヲ 皆名畫ヲ以テ稱セラル降リテ一條帝ノ世ニ至リ
 見レバ則チ吠ユト
 テ藤原基光アリ基光ハ中納言藤原清隆ノ子ナリ畫法ヲ巨勢金持ニ受
 ケテ佛畫ヲ善クシ遂ニ一家ヲ爲ス南都東大寺ニ住シ
 春日ト稱セリ初メ畫所預トナリ後越前守ニ任セラル土佐家ノ始 後朱雀
 祖トス其後良工輩出シ皆善ク基光ノ畫法ヲ守リ家聲ヲ墜サズ
 帝ノ世ニ宅磨爲成アリ爲成ノ父爲氏一條帝ノ頃ノ人畫ヲ善クス之ヲ宅
 磨派ノ祖トス然レ其善ク顯ハルハ爲成ニ始
 マル爲成巨勢弘高ト畫名ヲ齊クス繪所ノ長者トナ
 ル其子孫ニ爲遠爲久等アリテ皆能ク家聲ヲ保持ス 又僧侶ニハ祥蓮白
 鳳
 中ノ 勝道、守敏、最澄、空海、智泉桓武帝
 頃ノ人、實惠淳和帝
 頃ノ人、圓仁、常曉、眞濟、空光、
 覺曉仁明文徳
 帝頃ノ人、道昌清和帝
 頃ノ人、覺猷崇徳帝
 頃ノ人等ノ諸師アリ皆妙手ヲ以テ稱
 セラレ特ニ覺猷ノ如キハ最後人ニ膾炙セリ覺猷曾テ鳥羽ニ居ル故ニ
 鳥羽僧正ト號ス專ラ倭畫ヲ爲ス人物ヲ善クシテ自ラ一家ヲ成ス又戲
 畫ヲ好ム意ヲ寫シテ形似ヲ求メズ後世戲畫ヲ謂ヒテ鳥羽畫ト曰フ

僧正ノ畫風ヨリ出ツルナリ保延六年九月寂ス年八十八其他皇族大臣等ニ亦畫ヲ善クスルモノ多シ然レモ欽明帝ノ時佛法始メテ入りシヨリ崇佛ノ風日一日ヨリ盛ナリ故ニ最行ハル、ハ亦佛畫ヲ以テ第一トス是レ高僧ノ中ニモ往々丹青ノ名手アリシ所以ナリ又他ノ畫師ノ若キモ亦佛畫ヲ多シトス然ラハ我國ノ繪畫ハ佛法ニ伴ハレテ夙ニ其妙域ニ達スルヲ得タリト謂ハザルヲ得ズ是レ我古畫ノ妙作佛畫ニ多シトスル所以ナリ蓋シ韓畫唐畫ノ始メテ我國ニ入ルヤ初メハ專ラ其樣法ニ據リシナラムト雖モ我邦山川風土ノ固ヨリ彼ニ同シカラザルヲ以テ此二法ハ次第ニ變シテ遂ニ我國ノ畫法トナル、巨勢ノ一家及ビ飛鳥部常則土佐家等ノ畫ハ即チ是レナリ後世之ヲ名ケテ倭畫ト曰フ然レモ五山ノ僧徒ガ宋元ノ墨畫ヲ傳フルマデハ此派ノ佛畫皆眞細ノ

我國ノ繪畫
ハ佛法ニ伴
ハレテ進歩
ス

倭畫

躰ヲ用ヒ濃厚ノ着色ヲ專トシ又畫ニ用フル物ハ宮殿ノ障子戸、屏風、神像ノ緣起、繪卷ノ類ニ止マリ未タ今日ノ所謂畫幅即チ掛物アルヲ見ザルナリ而シテ其之レアルヲ近古貞和ノ頃可翁ニ始マル是レ大ニ我邦ノ畫風ナ一變シタルノ時ナリ當ニ次卷ニ於テ之ヲ説クベシ

(第二)音樂

(音樂) 上古ノ末佛法渡來シテヨリ韓樂又隨伴シテ盛ニ行ハレ中古ニ至リテ天武帝ノ世高麗百濟新羅三國ノ舞ヲ庭中ニ奏シ持統帝ノ朱鳥七年漢人等踏舞ヲ奏シタリ大寶令ニハ唐樂師、高麗樂師、百濟樂師、新羅樂師アリ蓋シ三韓隋唐ノ樂ハ當時朝廷ノ雅樂タルヤ知ルベキナリ又支那樂ノ我國ニ盛ナルハ推古帝ノ世初メテ小野妹子ヲ隋ニ遣スヨリ以來制度文物ミナ之ヲ支那ニ仰ケバ隋唐ノ樂モ亦之レト與ニ傳來シ遂ニ單ニ樂ト云ヘバ隋唐樂ヲ謂ヒ三韓樂ハ狛樂ノ名ヲ以テ之ヲ區

支那樂ノ傳
來

歐洲樂家ノ
說

支那ノ樂ハ
源チ印度ニ
發スルガ如
シ
其實例

別スルニ及ベリ抑此三韓ノ樂ノ沿革ヲ按スルニ素ト其支那ヨリ三韓
ニ移入スルヲ疑フ可カラザルガ若シ支那ニハ唐虞三代ノ上古ヨリ樂
アリテ粗備ルヲ明ナリ然レモ歐洲樂家ノ說ニ據レバ其源又之ヲ印度
ニ發シタルヲ猶歐洲ノ音樂ハ希臘ヨリ傳ハリ希臘ハ埃及ヨリ傳ハリ
埃及ハ印度ヨリ傳ハリタルニ同シカルベシト云フ既ニ說者ハ黃帝ガ
命伶倫取竹嶠谿之谷以爲黃鐘之宮トアルヲ引キ特ニ印度ニ接スル嶠
谿ノ竹ヲ取リタルヲ以テ音樂ノ源流ヲ印度ニ發スルノ一證トス降リ
テ漢朝ニ及ビ張騫ガ月氏ニ使シ西域ヲ歷遊スルヲ十三年ニシテ歸リ
タル時ニ橫笛ノ法ヲ西京ニ傳ヘ明帝ノ時ニ佛法中國ニ入りタルヨリ
相續キテ印度地方ヨリ伎樂ヲ獻シ凡ソ後漢三國西晉南北朝ノ間ニ印
度樂ハ佛教ト共ニ盛ニ支那ノ北部ニ入りタルニヤ隋ノ文帝ガ七部樂

ヲ置キタルニモ印度樂ヲ以テ其一部トセリ唐代ニ至リテ高祖詔シテ
梁陳ノ樂ニハ吳楚ノ聲多ク周齊ノ樂ニハ胡虜ノ音多シトテ南北ヲ料
酌シ參フルニ古聲ヲ以テセシメ太宗ニ命シテ雅樂凡ソ八十四調三十
一曲十二和ヲ作ラシメ大ニ音樂ヲ改良シケレバ支那歷世音樂ノ盛ハ
唐朝ヲ以テ第一トス而シテ其樂曲樂器音階ノ如キハ印度ニ取ル所ノ
多カリシヲ知ルナリ何トナレバ吳楚ノ南音ハ姑ク之ヲ支那固有ノ樂
ナリトスルモ胡虜ノ北音ハ即チ印度ニ源スルノ樂ナルヲ以テナリ斯
ノ如クナレバ我邦ニ傳來セル三韓樂ハ支那ヨリ重傳スルモノトセバ
張騫ガ西域ヨリ歸リテ印度樂ヲ傳フル頃ニ始マリテ南北朝隋唐ニ至
ルヲ以テ所謂ル周齊ノ樂ニハ胡虜ノ音多シト云ヘルモノ是レ今日ニ
傳ハルノ拍樂ナルガ若シ然ラバ則チ拍樂ハ之ヲ唐樂ニ比スレバ一層

印度ノ源流ニ近キ所アリト云フベキ歟而シテ唐樂ノ中ニモ亦印度傳
來ノ樂少シトセザルナリ然ラハ印度ハ世界音樂ノ源流ニシテ其西流
ハ埃及希臘ヲ歷テ歐洲ニ至リ東流ハ支那三韓ヲ經テ我邦ニ至ルト考
フル時ハ我邦ノ雅樂ノ音階樂律ノ自ラ歐洲古樂ニ符合スル所アルハ
亦宜ベナリト云フベシ

本邦ノ雅樂

我邦ノ雅樂ハ三韓樂支那樂印度樂三韓隋唐ヲ經テ傳來セルモノヲ集成シタル樂ニ
シテ欽明帝ノ世ヨリ漸ク世ニ行ナハレ推古舒明皇極孝德諸帝ノ時ヨ
リ盛ニシテ奈良朝ハ固ヨリ平安城ノ都トナリテモ大ニ行ハレ凡ソ
朝廷ノ大儀佛式ノ法會ヨリ縉紳ノ家儀ニ至ルマデ此樂ヲ行フコト知
ラル、ナリ其中ニモ嵯峨仁明ノ諸帝ハ最此道ニ精シケレバ公卿上達
部ニモ之ニ通セル人甚多シ然ラバ欽明帝ヨリ清和帝ノ頃ニ至ルマデ

ちまを
創
増

韓樂ノ名稱

二百餘年ノ間雅樂隆盛ノ期ニシテ宇多帝ノ時ニ遣唐使留學生ヲ罷メ
タルニ其衰運ヲ胚胎シタルモノ歟然レハ雅樂ハ其傳來ヲ失ヒタルニ
係ラズ延喜天曆ノ世頻ニ行ハレテ世々絶エズ以テ治亂盛衰ノ間ニ之
ヲ傳承シテ遂ニ今日ニ保存スルヲ得ルハ此雅樂ノ朝儀ニ隸屬シ併セ
テ佛儀ニ附屬セルガ故ナルベシ
今左ニ韓樂支那樂ノ名ヲ擧ゲムニ三韓樂高麗樂俗ニ
狗樂ト云フノ中ニテ重立タ
ルモノハ新鳥蘇、古鳥蘇、新宿德、狗銜、填破、皇仁、綾切、敷手、胡德樂、新
鞅鞅、貴德、納蘇利、崑崙八仙等ニシテ是等ハ三韓傳來ノ樂ナリ延喜樂
仁和樂、長保樂、石川、胡蝶、林歌等ハ我國ニテ新作ノ狗樂ナリトス此内
ニテモ今舞モ譜モ全ク絶ヘタルモノアリ又譜ノミ存シテ舞ナキモノ
モアリト云ヘリ

皇帝破陣樂



(歌舞音樂畧史ニ見ユ)

隋唐樂ノ名稱

隋唐樂

唐玄宗ノ勅作ナリ我邦ニハ粟田道麻呂

團亂旋

同春鶯囀

蘇合香

萬秋樂

來佛樂

玉樹後庭花

秦王破陣樂

武將太平樂

春庭樂

拔頭

還

球樂

五常樂

甘州

城樂

菩薩

泛龍舟

等ハ支那ヨリ傳來スル所ナリ

安摩

和樂

蘇莫者

河南浦

於テ作リシ樂ナリ
 而シテ此雅樂ニ用フル樂器ハ五絃、箏、奚婁、羯鼓、揩鼓、腰鼓、篳篥、簫、橫
 笛、尺八、琵琶、箜篌、篳篥、方磬ノ類トス後チ堀河帝ノ世田樂傀儡子等
 ノ俗技天下ニ流行スルニ及ビテ雅樂衰ヘテ復タ昔日ノ如クナラズ



樂器圖

(歌舞音樂畧史二見二)



横笛



尺八



琵琶



篳篥



(第三)彫刻
甲冑
増田宗次

管筚篥



方啓



(彫刻)第一甲冑 天智帝ノ頃ニ有名ノ
甲冑匠アリ増田宗次ト曰フ宗次ハ武内
宿禰十六世ノ孫ニシテ増田家ノ始祖ナ
リ此人二百板ヲ以テ一箇ノ名兜ヲ造リ
獅子ヲ戴カシメタリ天智帝之ヲ鎌足ニ
賜フト云フ 一説ニ曰ク宗次ハ二方白
靈甲ト稱ス天智帝 明甲ヲ造ル之ヲ獅子王尊
之ヲ鎌足ニ賜フト 又桓武清和ノ際増田
家第二十世ノ孫宗啓亦名匠ヲ以テ鳴ル
嘗テ四方白尊甲ヲ造ル延暦十四年桓武
帝之ヲ征夷將軍坂上田村麿ニ賜ヘリ然
レモ當時ハ甲ハ甲冑ハ冑ト別々ニ製

増田宗啓

増田宗國

甲冑ノ技益

進歩ス

源義經ノ兜

作スルモノ、若シ此二ツノモノヲ一揃ニ製作スルハ増田家ノ第二十
 二世ノ孫宗國ニ始マル宗國白星靈甲並ニ卯花威ノ鎧ヲ造ル朱雀帝ノ
 天慶三年藤原秀郷叛將平將門ヲ誅ス帝之ヲ秀郷ニ賜ヒテ其功ヲ賞セ
 リ爾來其技一層ノ進歩ヲ致シ其名工品ニ至リテハ今日社寺舊家ニ遺
 レルモノ少シトセズ就中源義經ノ兜ハ山城ノ鞍馬寺ニ藏セリ此兜ハ
 三角形ノ薄鐵板八片ヲ以テ之ヲ作り其四片ハ銀ヲ被セ頂上ヨリ之ヲ
 見下スルハ白色ノ十字形ト黑色ノ十字形ト組合セタルガ如シ而シテ
 其頂邊ニハ鍍金セル青銅獅子ノ將ニ飛躍セムトスルノ像ヲ戴カシメ
 タリ其兩側ニ同シク鍍金セル青銅ノ凸彫ニテ獅兒ノ牡丹ニ戯ムル、
 ノ狀ヲ裝飾ス其工技自在ニシテ澁滯ナク形狀頗婉曲ニシテ雄健ノ妙
 十分ニ顯レタリ

刀劍及其附

屬品

名工天國

第二刀劍及其附屬品 上古ノ末ニ至リ金工ノ業大ニ進ミ中古ニ至リ
 テ益然リ文武帝ノ世金工ニ天國ト云フ者アリ一ノ名刀ヲ作レリ平家
 累代ノ寶物小鳥丸是ナリ刀ニ大寶三年天國ト云フ銘アリト云フ其後
 名匠絶エズ出テタリ

紀元千四百
 年代ノ頃金
 具彫刻ノ術
 大ニ進ム
 僧空海ノ鐔

此時代ニハ未タ刀裝製作ヲ專業トスルモノアラザリシカモ金工ハ重
 ニ武器附屬品、宮殿閣社等ノ裝飾品其他ノ奢侈品等ヲ製作セリ紀元
 千四百年代ノ頃ハ金具彫刻ノ術著ク進歩シテ完全美妙ノ域ニ達セリ
 有名ナル僧空海ノ奉納セル鐔ノ拵ノ如キハ實ニ此時代ノ技術ノ進歩
 ナ示スニ足ルベキモノナリ此鐔ハ美術ノ金玉ト稱セラレタルモノニ
 シテ又之ニ添フル所ノ刀柄ハ全ク黄金ヲ以テ作り之ニ印度様ノ模様
 ナ彫刻シ僧侶ノ二小像ヲ附着セリ其美妙精巧共ニ驚クニ堪ヘタリト

亂世ニ刀劍ノ技進歩ス
源義經ノ刀

神社佛閣祭器形像ノ類

云フ
其後天慶ノ亂アリ又源平二氏ノ戰アリテ古技貴寶ヲ消滅シ朝廷又技
術工業ヲ督スルノ法弛廢シタルガ爲メニ工藝大ニ衰退スト雖_レ刀劍
ノ技ハ獨リ然ラザルガ若シ何トナレバ亂世ニハ刀劍ノ需要最甚シケ
レバナリ源義經ノ刀ノ如キハ其一例トス 其總軀長サ三尺二寸柄ノ長
サ七寸三分茶地金襴ニテ包
ミ、目貫、頭、丸金等總金、其他長覆輪鐔等ハ金鍍ニシテ 此外ニモ同時代ノ
緣鐙等ハ松葉毛彫、頭鐔等ハ鶴毛彫ヲ施セリト云フ
精巧ナル標本少ナカラズ多ク社寺ニ藏ス
第三神社佛閣祭器形像ノ類 孝德帝既ニ立チテ庶政ヲ一新シ玉ヒシ
モ猶未ダ佛法ヲ廢シ玉ハズ尋キテ天智天武持統文武元明元正ノ諸帝
相繼ギテ亦佛法ヲ崇ミ玉ヒシカハ時ニ造寺ノ舉ナキニ非ズト雖_レ未
ダ其甚シキニ至ラズ然_レ聖武帝ニ至リテ厚ク佛法ヲ崇ミ玉ヒ奈良

木工僧道慈
佛工國中公
營

東大寺ノ建
築

ニ東大寺ヲ創メ諸國ニ國分寺ヲ建テ又偉大ノ佛像ヲ造リ玉ヒシヨリ
興作營造初メテ盛ナリ爾後歷帝巨費ヲ投シテ伽藍ヲ興シ佛像ヲ造リ
シカバ其意匠大ニ進歩シテ其技ノ巧妙殆_ト神造ノ如キアリ今左ニ之
ヲ畧叙セム
聖武帝ノ世ニ木工ニ僧道慈アリ 大和添上
郡ノ人 佛工ニ國中公營アリ神龜元
年帝大和高市郡ノ大安寺ヲ奈良ニ移サムト欲シテ良工ヲ天下ニ求メ
玉フ、時ニ道慈木工ノ妙手ト稱ス初メ支那ニ遊ビテ佛法ヲ求メ且造
寺ノ法ヲ學ビ構作規模皆唐風ヲ模ス帝乃チ道慈ニ命シテ造營ヲ監督
セシム工匠等其方法ヲ受クルニ及ビテ皆歎服スト云フ是ニ於テ寺ヲ
造ルノ功大ニ進歩ス天平十三年帝又奈良ニ大佛寺ヲ建テ名ケテ東大
寺ト曰フ堂ノ高サ十五丈六尺、東西廿九丈、南北十七丈、基砌ノ高サ七

廬遮那佛
木工猪奈部
百世、益田
繩手
鑄工柿本男
玉、高市眞
國、高市眞
營

尺、東西砌三十二丈七尺、南北砌廿丈六尺、内陳ノ柱九十六本アリ其中
ニ大柱四本徑七尺、天坪ハ凡ソ三千百二十坪而シテ廬遮那佛ノ銅像
ナ此ニ安置ス佛像ノ高サ五丈二尺五寸ナリ木工ノ長ハ從五位下猪奈
部百世從五位下益田繩手、佛工ノ長ハ從四位下國中公營、鑄工ノ長ハ
從五位下柿本男玉從五位下高市眞國從五位下高市眞國營ナリ而シテ公
營鑄工ヲ總督ス公營ハ本ト百濟ノ人ナリ其祖父ヲ德卒國骨富トイフ
天智帝ノ世本邦ニ歸化ス聖武帝廬遮那佛ノ大佛ヲ造ラムトスルニ方
リテ當時ノ鑄工一モ手ヲ下スモノナシ公營頗巧思アリ鑄工ヲ督シ孝
謙帝ノ世ニ至リテ竟ニ其功ヲ成ス勞ヲ以テ從四位下ニ叙セラレ官ハ
造東大寺次官但馬權介ニ至ル大和ノ葛下郡ノ國中村ニ居ルヲ以テ姓
ヲ國中連ト賜フ延曆十三年桓武帝都ヲ平安ニ奠ムルニ及ビテ皇城ノ

佛寺ノ制多
ク支那ニ擬
ス

佛工定朝

佛工院覺

制支那ニ倣フモノ多シ故ニ僧徒等ノ佛寺ヲ營作スルモ亦多ク支那ニ
擬シ堂扉及門扉ニ青瑣ヲ彫ル、青瑣ハ網代形ノ如キモノ又ハ堅筋ノ
文ヲ彫リテ青ク之ヲ塗ルナリ此他桁ノ端、蟻股等ニ諸物象ヲ彫ル
益多シ而シテ皆木工ノ手ニ出ツ後世唐門ノ制起ルニ及ビテ唐門ハ屋
上ニ唐破
風ヲ設ク門扉モ亦物象ヲ彫ルノ巧益精シ是レ唐門ニハ多ク物象ヲ透
彫スルヲ以テナリ後一條帝ノ世ニ佛工定朝チヤウテイトイフモノアリ京師ノ人
其巧遠ク衆ニ超ユ時ニ太政大臣藤原道長京師ノ中川ニ法成寺ヲ建ツ
帝ノ治安二年ニ至リテ成ル佛工ハ即定朝ナリ其佛像ノ製作極メテ精
巧ナルヲ以テ法橋ノ位ヲ賜ハル本邦ニ於テ佛工ノ僧官ニ叙セラル、
一此ニ始マル定朝ノ子覺助覺助ノ子頼助頼助ノ子康助康助ノ子康
慶、康慶ノ子運慶、運慶ノ子湛慶皆佛工ヲ以テ名アリ又覺助ノ子院覺

頼助ノ能ク佛像ヲ造リ遂ニ一派ヲ成ス是ヲ奈良一流ノ祖トイフ定朝ノ子孫及其門弟子等各業ヲ傳フルヲ大率子斯ノ如シ本邦佛工ノ業是ニ於テ大ニ進歩ス

(第四)陶器

陶業ヲ自由ニシテ其技始メテ盛ナリ然レハ釉ヲ施スノ術ヲ知ラズ初メテ其術ヲ施ス陶製稍進歩ス

(陶器) 孝徳帝位ニ即クニ及ビ歷世ノ政躰ヲ改メ土師職ヲ廢シ更ニハコトス管陶司ヲ置キテ陶工ヲ管セシメモシ、ツカ上古ヨリ孝徳帝ニ至ルマデ工人業ヲ世シモ業ヲ世ニセズ其才技ニニス帝制度ヲ改定シテヨリ以來工人必長スルモノ皆此業ヲナス 又諸國陶器ヲ製スルノ地ハ陶器ヲ輸シテ以テ調ニ充タシメテヨリ陶業始メテ盛ナリ然レハ其製出スル所ノ器猶未タ釉ヲ施スニ至ラズ唯能ク舊法ヲ守ルノミ元明元正聖武ノ間ニ至リテ工人始メテ釉ヲ施スノ器ヲ製出ス然レハ其釉ヲ施スモノハ甚尠シ以テ業ノ進歩ト稱スルニ足ラズ桓武帝ノ時ニ至リテ陶製稍進歩シ釉ヲ施ス者モ亦昔日ヨリ多シ此際支那ノ高賈陶器ヲ齎シ來ル朝廷

天慶ノ亂後陶業衰フ

及摺紳購得シテ甚之ヲ賞愛ス其器茶ヲ盛ルモノ多シ時人因リテ支那舶來ノ陶器ヲ名ケテ知也チヤ和ワ无ムトイヒ又知也チヤ宇ウ和ワ无ムトイフ既ニシテ又本邦ニ於テ製スル所ノ陶器モ亦知也チヤ和ワ无ムトイヒ知也チヤ宇ウ和ワ无ムト稱スルニ至レリ平城帝ノ時ニ及ビテ宮陶司ヲ大膳職ニ合併ス醍醐帝ノ時ニ至リテ諸國陶器ヲ製スルヲ益多シ而シテ其品類モ亦新規ヲ出ス朱雀帝ノ時平將門藤原純友亂ヲ東西ニ作ス之ニ加フルニ海賊強盜諸國ニ蜂起シテ官物ヲ掠奪シ或ハ抑留セシカバ後鎮定ニ歸スト雖レ尙亂世ノ餘風ヲ承ケ諸國ノ陶工多ク業ニ就カズ每歲献スル所ノ陶器モ他物ヲ以テ代ヘテ献スルニ至ル是ニ於テ陶工ノ業始メテ衰ヘ竟ニ近古ノ半ニ至ルマデ盛ナラズ

(第五)漆器

(漆器) アル子スト、パール氏曰クゴンス氏云ヘルヲアリ凡ソ漆器ハ

アルチスト、
パール氏ノ
漆器ニ關ス
ル評

人工品中最完全ノモノナリ縦ヒ之ヲ最完全ノモノト爲サシルモ其最
精微ヲ極ムルモノナリト是レ誣言ニ非ス顧フニ漆細工ハ他國人民ノ
得テ爲シ得ベカラザル日本固有ノ製品ニシテ現今ニ於テモ其技日本
人ノ榮譽トスル所ナリ而シテ其製法ノ妙ハ作爲ノ簡單、製造ノ仕上
及ビ漆器ノ美且ツ貴ニ在リ要スルニ日本ノ漆細工ハ世界ノ共ニ稱譽
スル所ニシテ室内ノ装具ニ供シ大ニ眼目ヲ慰スルニ足ルモノナリト
我邦漆器製造ノ術ニ於テ譽ヲ外國人ニ得ルヲ斯ノ如シ而シテ今其歴
史ヲ討ヌルニ當リ神代ヨリ之ヲ記セムトス
抑漆工ハ神代ニアリヤナキヤ詳ナラズト雖ヒ人皇ノ世ニ至リテ日本
武尊ハ牀石足尼ナシテ漆ヲ取りテ干ニ塗ラシムルヨリ命シテ漆部官
ニ任スルヲ始メトシ其後漆部ノ職モアリタリ漆部ハ漆工ヲ以テ朝

漆業既ニ上
古ノ時ニ行
ハル

廷ニ奉仕スル部族ニシテ連之ヲ監督ス然ラハ上古ヨリ既ニ漆細工ノ
業アルナリ
然レ其製出スル所ノ者ハ何物ナルヲ知ラズ孝德帝ノ時ニ至リテ歴
世ノ政躰ヲ改メ漆部連ノ漆工ヲ督スルノ職ヲ罷メ更ニ漆部司ヲ置キ
テ工人ヲ督セシメ又諸國漆器ヲ製スルノ地ハ漆器ヲ輸シテ以テ調ニ
充タシムコレヨリ後器物ニ漆ヲ施スヲ漸ク多シ天武帝ノ時ニ至リテ
工人赤漆ヲ用フルノ發明アリ 赤漆ハ漆ニ朱又ハ辰砂 文武帝ノ時朝廷
始メテ令ヲ制シ漆部司ノ職制ヲ定メ正、カミ、シヤウ、サツ 令史ヲ置キ諸塗漆ノ事ヲ
掌ラシムコレヨリ漆工ノ技大ニ發達シテ聖武孝謙ノ世ニ至リテ頗精
巧ナリ此間ニ彩漆ヲ用フルヲモ起リ平文 平面ノ飾ト云フ義ニシテ亦
平脱文ト云フ其製法ハ薄キ
金版ヲ以テ種々ノ花章ヲ透雕シテ漆器ニ嵌 抹金ヲ以テ器物 出テ詩畫 ニ花章及花卉鳥
メ漆ノ平滑面ト同平面ニナシタルモノナリ

文武帝ノ時
ヨリ其技進
歩ス

平文、詩畫、
螺鈿

聖武帝ノ太刀

獸山水樓閣等ヲ作ルモノニシテ、モ顯ハレ螺鈿貝類ヲ以テ花章等ヲ作り抹金鏤平塵、梨子地ノ類皆是ナリ、漆ノ平滑面ト同平面ニナシタルモノナリ、モ出ツ天平勝寶八年ニ孝謙帝奈良ノ東大寺ニ寄附シ玉ヘル品中ニ彈碁盤碁ヲ彈ク器ナリ和琴六絃ノ樂器ナリ篳篥簧ヲ以テ吹ク樂器ナリ琵琶四絃ノ樂器等アリ並ニ皆螺鈿、玉、玳瑁、水精ヲ以テ嵌裝セリ背面ニ螺鈿ヲ嵌スル所ノ圓鏡アリ其製高妙ニシテ頗雅致アリ又右寄附品中聖武帝ノ太刀アリ奉納書ニ太刀一口鞘ノ上抹金鏤ト記セルモノ即是ナリ而シテ當時未タ詩畫ノ名アラズ其製タル先黒漆ヲ以テ鞘ヲ塗り其上ニ稜角アル金末ヲ以テ鳥獸花卉ヲ撒キ再ヒ黒漆ヲ以テ之ヲ塗り而シテ之ヲ磨出セルモノナリ後世ノ所謂磨出シ詩繪ノ製ノ如シ其形狀甚奇古ニシテ髹術モ亦大ニ後世ノモノト異ナリ然レモ當時精巧ノ漆器ハ多クハ金銀ノ平文ニシテ末金鏤甚妙シ其技ノ未タ精良ナラザリシニ由リシナラム然

桓武帝ノ世漆技益進歩ス

平塵

梨子地
天慶ノ亂後
漆技漸ク衰フ

レモ桓武帝ノ時ニ至リテ風俗華美ニ流レ或ハ彩漆ヲ以テ描キ或ハ末金ヲ撒キ或ハ螺鈿ヲ嵌スル等ノ漆器ノ需要増加スルヲ以テ技工益進歩ス此時平塵平塵トハ平直ナル粉抹ト云フ義ニシテ細末ナル金ヲ厚ク撒キタルモノナリノ法モ興リテ其劍ヲ帶スルニ至レリ平城帝ノ時ニ至リテ漆部司ヲ内匠寮ニ合併ス爾來内匠寮ニ於テ漆工ヲ督シ以テ漆器ヲ作ラシム醍醐帝ノ時ニ至リテ諸國漆器ヲ製スルヲ益多シ以テ調ニ充ツ而シテ其品類モ亦新規ヲ出ス當時製スル所ノ詩畫ノ今日ニ存スルモノヲ以テ天平年間ノモノニ較フレバ撒ク所ノ金粉甚密ニシテ製造モ亦一層巧ナリト云フ又當時梨子地其製造ハ細末ナル金ヲ撒キテ梨實ノ膚紋ノ如クナラシムルヲイフ又梨子地ヲ塵地ト薄梨子地ヲ薄塵地トイフノ製モ起レリ斯ク漆工ノ技最美ノ地位ニ達セルニ朱雀帝ノ時ニ至リ平將門藤原純友亂ヲ東西ニ作シ之ニ加フルニ海賊強盜諸國ニ蜂起シテ官物ヲ

掠奪シ或ハ抑留セシカバ後鎮定ニ屬スト雖臣尙亂世ノ餘風ヲ承ケ諸國ノ漆工多ク業ニ就カズ毎歲輸ス所ノ漆器モ他物ヲ以テ代ヘテ献スルニ至ル是ニ於テ諸國漆工ノ業始メテ衰ヘテ工人ハ唯其土ノ日用ノ器物ヲ製スルニ止ルノミ但タ貴人摺紳甚奢侈ニ耽リ或ハ第宅ニ詩畫ヲ施セルアリ或ハ螺鈿ヲ以テ衣服ヲ裝フアリ平文ヲ以テ車輿ヲ飾ルアリ故ニ安德帝ノ時ニ至ルマデ京師ノ漆工其技益精巧ヲ極メテ絶美ノ器物ヲ製出ス故ヲ以テ諸國ニ在ル所ノ豪富者ノ家屋及器財ヲ裝飾スルニ其美麗ニシテ且精密ナルヲ好ムモノハ京師ノ漆工ヲ招キ命シテコレヲ髹飾セシム後世聖武帝ヨリ安德帝ニ至ル四百六十餘年ノ間ニ製出スル所ノ詩畫及彩漆ヲ以テ畫ケル者ヲ稱シテ上代物トイフ

政治

(第一)官制

左右大臣及内臣
國司郡司
太政大臣、
御史大夫、
大納言

(官制)孝德帝從來ノ封建ヲ廢シテ更ニ郡縣ノ制ヲ創メ玉ヒシカバ官制上ニモ一大變革ヲ發シ大臣大連ノ號ヲ罷メ左右大臣内臣ヲ置キテ中央ノ政務ヲ執ラシメ國造稻置等ヲ廢シ國司郡司ヲ置キテ地方政務ニ當ラシム尋キテ唐風ニ倣ヒテ八省百官ヲ置ク天智帝ノ時更ニ太政大臣御史大夫ノ官ヲ設ク弘文帝御史大夫ヲ改メテ大納言トス天武帝ノ三年又兵政官長大輔等ノ職ヲ置ケリ帝ノ時八等ノ姓氏モ出テタリ初メ地方ノ族長既ニ其實力ヲ失ヒシト雖臣連君首造縣主等ノ姓氏依然トシテ存シ以テ其門地ノ高下ヲ分チ來リシガ帝ノ十二年之ヲ廢シテ更ニ真人朝臣宿禰忌寸道師臣連稻置ノ新姓ヲ設ク壬申ノ功ニ準シテ賜與スルヲ差アリ是ニ於テ舊來ノ門地一變セリ然レモ此姓氏ハ單ニ尊卑ヲ表スルニ止マリ毫モ實力アルモノニ非ズ猶今後子大寶養老ノ令出ツルニ及ビテ大ニ備ハレリ其組織ノ要點ハ從來ノ官名位號ヲ改メテ二官ヲ創立ス一ヲ神祇ト曰ヒ專ラ祀典ヲ修ム一ヲ太政ト曰フ三公太政大臣左右大臣ヲ以テ天下ノ機務ヲ總

ベ八省及ビ諸寮司皆之ニ隸屬ス其詳ナルヲハ左ノ官等表ニ就キテ見ルベシ

左ノ官等表ニ載ラザル官員中武官ニ大毅、小毅、旅帥、隊正、舍人、帳内、資人等アリ、文官ニ郡司、大少領、主政、主帳、史、生使部等アリ

官員ヲ大別シテ内官外官トス
文官武官
勅任
奏任
判位

左表ニ掲グル官員ヲ大別シテ内官外官ノ二種トス内官トハ京師ニ在ル者ヲ謂ヒ外官トハ地方ニ在ルモノヲ謂フナリ而シテ此内外官ノ中神祇官、太政官、八省、彈正臺、左右京職、攝津職、國司、春宮坊ヲ文官トシ五衛府、左右馬寮ヲ武官トス太宰府吏ヲ文武兼官トス而シテ任官ノ法勅任、奏任、判任ノ別アリテ其下ヲ判補ト云フ勅任トハ天皇ノ直ニ命シ玉ヒテ官ニ任スルモノニシテ大納言以上、左右大辨、八省卿、五衛府督、彈正尹、太宰帥是ナリ奏任トハ大臣ノ奏聞ニヨリテ任スルモノニシテ内外諸司ノ主典、史、錄、屬、疏、志、目、令、史、郡、領、軍、毅ノ類ヲ云フ以上等是ナリ判任トハ上

官等表

從四位上	從四位下	正五位上	正五位下	從五位上	從五位下	從六位上	從六位下	正六位上	正六位下	從七位上	從七位下	正八位上	正八位下	從八位上	從八位下	大初位上	大初位下	少初位上	少初位下
大勳八等	大勳九等	大勳十等	大勳十一等	大勳十二等	大勳十三等	大勳十四等	大勳十五等	大勳十六等	大勳十七等	大勳十八等	大勳十九等	大勳二十等	大勳二十一等	大勳二十二等	大勳二十三等	大勳二十四等	大勳二十五等	大勳二十六等	大勳二十七等
扶	令	大從	少從	大從	少從	大從	少從	大從	少從	大從	少從	大從	少從	大從	少從	大從	少從	大從	少從
督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督	督
頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭	頭
亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮	亮
正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進	大進
少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進	少進
大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉	大尉
少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉	少尉
大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允	大允
少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允	少允
大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬	大屬
少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬	少屬
大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志	大志
少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志	少志
大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史	大史
少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史	少史

官制ノ變遷

ノ類皆是ナリ
 官制ノ備ハルヲ斯ノ如シト雖凡數百年ノ久キ屢官司ノ離合官員ノ廢設等アルヲ免レズ孝謙帝ノ時新ニ紫微中臺ヲ置キ藤原仲實ヲ以テ其令トス尋キテ紫微内相トス淳仁帝天平寶字二年仲實ヲ以テ大保トシ大ニ官號ヲ改メ玉ヘリ即チ左表ノ如シ

改稱官衙表

紫微中台	坤宮官	陰陽寮	大史局
太政官	乾政官	宮内省	智部省
太政大臣	太師	彈正臺	糺政官
左大臣	太傅	圖書寮	内史局
右大臣	太史大夫	圖書寮	内史局
大納言	太保	圖書寮	内史局

官制著明ノ變化
太政大臣ノ

中務省	信部省	中衛府	鎮國衛
式部省	文部省	大將	大驍騎將軍員外將
治部省	禮部省	少將	次將
民部省	仁部省	衛門府	司門府
兵部省	武部省	左衛士府	右衛士所
刑部省	義部省	右衛士府	左衛士所
大藏省	節部省	左兵衛府	右虎賁衛
大藏省	節部省	右兵衛府	左虎賁衛

是レ仲實ノ言ニ從ヒテ唐制ヲ採用シタルナリ然レ凡其後未タ久シカラズシテ仲實反ヲ謀リテ誅セラル、ニ及ビ其官號悉ク舊ニ復セリ然レ凡文德宇多ノ世ニ至リテ官制上ニ著明ノ變化起レリ太政大臣ノ常置及攝關ノ興起即チ是ナリ抑太政大臣ハ官等表ニ在ルガ如ク百寮ノ

上ニ位シ天子ヲ輔導シテ以テ天下ノ大政ヲ行フ官ニシテ最重最要ノ職ナレバ從來皇太子ヲ以テ此ニ任ジ或ハ親王ヲ以テ官事ヲ知ラシメ必シモ本官ヲ置カズ稱徳帝僧道鏡ヲ愛シ玉フニ及ビテ太政大臣ヲ授ケ玉フ是レ人臣本官ニ任セラル、ノ始トス然レ其後九十餘年ノ間人臣ノ此ニ任セラル、者ナシ文徳帝ニ至リテ右大臣藤原良房帝ノ外舅ニテ太政大臣ニ超進セシカバコレヨリ藤原氏世々此官ヲ襲ヘリ是レ朝權下ニ移ルノ始トス清和帝ノ時良房太政大臣ヲ以テ又政ヲ攝シ宇多帝即位ノ初良房ノ子基經左大臣ヲ以テ万機ヲ關白ス古ヨリ間攝政アリト雖レ唯臨時ニ置クノミニシテ且皇太后、皇子或ハ皇女ヲ以テ之ニ任シ玉ヒシ應神帝幼少ニマシマセシカバ神功皇后攝政シ玉ヒ推古帝女主ナリシカバ聖徳太子攝政シ玉ヒ齊明帝ノ時太子中大兄攝政シ玉ヒ元明帝ノ晚年皇女淨足姫尊(後チ元正帝)暫ク攝政シ玉フノ類ガ是ニ至リテ人臣ニテ攝政スル

「始マリ關白モ起リ二ツノモノ共ニ常職トナリテ藤原氏世々之ニ當リテ万機ノ政皆此ニ歸ス第四篇藤原氏ノ章ヲ參觀スベシ斯ク攝關ノ職藤原氏ノ世襲トナリシカバ他ノ諸司百官モ亦次第ニ世襲ノ姿トナリ門地ノ貴賤ニ依リテ職ノ尊卑ヲ別チ氏族ノ高下ヲ視テ位ノ内外ヲ分チ復タ才智藝業ノ如何ヲ問ハズ終ニ天慶ノ亂ヲ馴致セリ然レ其鎮定ニ歸スルノ後概シテ世上ノ有様泰平ニ屬セシカバ門閥ノ弊風一層甚シクシテ白河氏ノ神祇、小槻氏ノ左右史、加茂安倍二氏ノ陰陽、菅原大江二氏ノ大學、和氣丹波二氏ノ典藥等ノ若キハ皆其世職ニシテ他姓斷シテ與ルヲ得ズ地望高キモノ號シテ殿上人ト曰ヒ卑キモノヲ地下ノ人ト曰フ資格一定復タ移ス可ラズ適勳舊恩倖ヲ以テ特選ヲ蒙ルモノアレバ衆皆驚猜シ斥ケテ失典トス故ニ他氏ノ子弟藝

明位二階 明大一位明廣一位、明大二位明廣二位、
 淨位四階 淨大一位淨廣一位、淨大二位淨廣二位、淨大三位淨廣三位、淨大四位淨廣四位、
 右每階大廣アリ合シテ十二階是ヲ諸王已上ノ位トス

正位四階 正大一位正廣一位、正大二位正廣二位、正大三位正廣三位、正大四位正廣四位、
 直位四階 直大一位直廣一位、直大二位直廣二位、直大三位直廣三位、直大四位直廣四位、
 勤位四階 勤大一位勤廣一位、勤大二位勤廣二位、勤大三位勤廣三位、勤大四位勤廣四位、
 務位四階 務大一位務廣一位、務大二位務廣二位、務大三位務廣三位、務大四位務廣四位、
 追位四階 追大一位追廣一位、追大二位追廣二位、追大三位追廣三位、追大四位追廣四位、
 進位四階 進大一位進廣一位、進大二位進廣二位、進大三位進廣三位、進大四位進廣四位、
 右每階亦大廣アリ合シテ四十八階是ヲ諸臣ノ位トス然レモ文武帝ノ大寶元年又冠位ノ區別一層綴密ヲ加ヘ從來位階ニ隨ヒテ冠ヲ賜フノ

勅授、奏授、判授

判授

注

制ヲ廢シテ位記ヲ賜ヒ又服制ヲ定メラル尋キテ令ヲ修メラル、ニ及ビテ此制ニ倣ヒ親王ハ一品ヨリ四品マデ凡ソ四階、諸王諸臣正一位ヨリ少初位下マデ凡ベテ二十階トス 前ノ官等表ヲ見ルヘシ而シテ内外五位以上官職難義ニ云ク叙位入内トハ外階ヨリ内階ニ入ルヲ云フ也外階トハ五位ニ外從五位ト申シテ姓ノ賤キ者ハ直ニ從五位ニ叙セズシテ先外階ニ叙シ然ル後内階ナル從五位下ニ叙セラル、ハ勅授、内官八位外官七位以上ハ奏授、内外初位以上ハ皆判授トス 此勅奏判ノ義前ノ任官ノ例ト同シコレヨリ後歷朝此位階ヲ襲用シテ沿革スルナシ

當時ノ制凡ソ位貴ケレバ則チ職高ク位賤シケレバ則チ職下リ官位相當ルハ是レ常法ニシテ前ノ官等表ハ即チ是ナリ然レモ往々官位相當ラズシテ位卑ク官高キモノアリ又位高ク官卑キモノアリ是ニ於テ行守ノ號アリ 位高クシテ官卑クキヲ行ト云ヒ位卑クシテ官高キヲ守ト云フ例ヘバ正二位行大納言從三位守大納言ノ類

政治

既ニ官職位階ノ事ヲ記セバコレヨリ之ニ附着スル俸給ノ制ニ及バムトス凡ソ俸給ニ封戸、位田、職分田、功田、祿ノ五種アリ今左ニ順次之ヲ説カム

第一 封戸トハ宗室諸王及ビ勳功ノ大臣等ニ賜フ所ノ民戸ニシテ分チテ位封職封ノ二ツトス位封トハ位階アルニ由リテ給フ所ニシテ職封トハ職事アルニ由リテ給フ所ナリ其賜給法ハ當時民間ニ課戸不課戸ト云フコトアリテ男子中男トテ年十七以上ニナレバ課役ニ出ツベキニ因リ之ヲ課丁ト云フ其モノ一人以上アル家ヲ課戸ト云フ課戸ハ一戸毎ニ租庸調ノ三ツアリ封戸ハ即チ課戸ヲ以テ給スルノ制ナリ租稅ヲ二分シ其一半ヲ朝廷ニ納メ他ノ一半ヲ其人ニ輸ス故ニ封戸ノ主ハ各其租稅ノ半ト庸調トヲ受ルヲ以テ古來ノ定法トス今封戸ノ割合

ヲ舉グレバ左ノ如シ

封戸差等表

位階若クハ官名	戸數	位階若クハ官名	戸數	位階若クハ官名	戸數	位階若クハ官名	戸數
一品	八〇〇〇 <small>戸</small>	正一位	三〇〇〇 <small>戸</small>	從三位	一〇七五 <small>戸</small>	大納言	八〇〇〇 <small>戸</small>
二品	六〇〇〇 <small>戸</small>	從一位	二六〇〇 <small>戸</small>	以上位封		中納言	三〇〇〇 <small>戸</small>
三品	四〇〇〇 <small>戸</small>	正二位	一五〇〇 <small>戸</small>	太政大臣	三〇〇〇 <small>戸</small>	參議	六〇〇 <small>戸</small>
四品	三〇〇〇 <small>戸</small>	從二位	一七〇〇 <small>戸</small>	左右大臣	二〇〇〇 <small>戸</small>	以上職封	
無品	一五〇〇 <small>戸</small>	正三位	一三〇〇 <small>戸</small>	內大臣	八〇〇 <small>戸</small>		

戸數中右傍ノモノハ令ニ載スル所、左傍ノモノハ拾芥抄ニ記スル所ナリ互ニ異同アリ故ニ此ニ併記ス蓋シ沿革アリシト見ユタリ又●印ハ令外ノ官位ナリ

其後一國ニ封セラル、フアリ淳仁帝ノ天平寶字四年八月勅シテ贈正

一位太政大臣不比等ニ近江國十二郡ヲ追賜シテ淡海公ニ封シ玉ヘリ
是時ノ勅ニ曰ク勳績宇宙ヲ蓋ヒ朝賞未タ人望ニ允ハズ宜ク太公ノ故是
事ニ依リ追ヒテ近江國十二郡ヲ以テ封シテ淡海公ト爲スベシ云々ト
レ没後ノ贈號ト見エタリ此後封號九人アリ

美濃公良房 越前公基經 信濃公忠平 尾張公實賴 參河公伊尹

遠江公兼通 駿河公頼忠 相模公爲光 甲斐公公季

然レ凡是レ皆虛名ニシテ實封アルニ非ズト云フ

第二 位田トハ位階ニ因リテ給フ所ノ田ナリ親王凡ソ四段、諸臣ハ
一位ヨリ五位マデ之アリ五位以下ハ給セズ今之ヲ左ニ舉ク

位田

位田差等表

位階	町數	位階	町數	位階	町數
一品	八〇町	從一位	七四町	正四位	二四町

職分田

二品	六〇	正二位	六〇	從四位	二〇
三品	五〇	從二位	五四	正五位	一二
四品	四〇	正三位	四〇	從五位	八
正一位	八〇	從三位	三〇	外從五位	六

第三 職分田ヲ小別シテ職分田、諸司職分田、郡司職分田、ノ三種ト
ス

職分田

甲 職分田亦單ニ職田トモイフトハ納言以上官職アルモノニ給フ所ノ田ナリ

其地ハ畿内ニ於テ二分ヲ給シ畿外ニ於テ一分ヲ給ス畿内ニ於テ多ク
給スルハ其職重キガ故ナリ

諸司職分田

乙 諸司職分田ハ太宰帥、諸國守以下史生ニ至ルマデニ給スル所ノ
田ニシテ亦之ヲ在外諸司職分田ト云ヒ又公廩田トモ云ヘリ

以上俸祿ノ規程

八月ヨリ正月マデノ内上日番ヲ勤ルノ日ヲ謂フ百二十日以上ニ及ブモノナ今年ノ二月ニ給ス秋冬ノ祿モ之ニ准ス二月ヨリ七月マデノ祿ヲ同年八月ニ給スルナリ例ヘバ正從一位ハ纒三十疋、縣二十六屯、布百端、整百四十口大少初位マデ段々差アリ又絲一約ヲ以テ綿一屯ニ代ヘ、鎮二挺ヲ以テ整五口ニ代ヘ給スルコアリ

以上俸祿ノ中職封、職分田及ビ祿ハ後世ノ役料ノ如キモノニシテ其官職ヲ解ク時ニハ乃チ之ヲ取上グルナリ但々三大臣及ヒ大納言ハ理ヲ以テ解官シ及ビ致仕セルモノハ其半ヲ給セラル、又位封位田モ故ナク不上上番セザルコト二年以上ニ至ルモノニハ給スルヲ停メ又其人亡スレバ朝廷之ヲ收ムルノ制ナリ然レモ其後種々ノ變更アリテ五位以上薨卒ノ後六年マデ收メザルコトニナルコトアリ 聖武帝ノ神龜三年 或ハ減シテ一年ニ

唯段給チ賜ヒテ土地ヲ賜ハラズ

以上ハ公田

私田

莊園

縮メラル、コアリ 桓武帝ノ延曆十年 然リ而シテ以上ノ諸田ハ唯段給チ賜フノミニシテ土地ヲ賜フニ非ス故ニ諸皇子及ビ大臣諸卿婦女等ニ封祿等ヲ賜フト雖モ總ベテ皆戸數及ビ段町或ハ田代等ヲ以テ賜ハリ土地ハ國司郡司管轄シテ朝廷ノ有タリ

當時祿制ハ大畧右ノ如ク公田ヲ給スルノ制ナリト雖モ此他ニ賜田ト云フモノアリ天皇別勅ヲ以テ賜フ所ノ田ナリ此田ノ中ニハ荒廢田、空閑地等ヲ後宮、皇子或ハ臣下ニ賜ヒ開墾シテ其私田タラシメ玉ヘリ爾來此私田ハ益増加シ終ニ一變シテ後世ノ所謂莊園トナレリ

莊園ハ其何時頃ニ始マレリヤ詳ニスル能ハズト雖モ延曆弘仁ノ頃其弊兆ヲ現シテ爾後次第ニ盛ナルナリ 食貨志ニ曰ク班田ノ制壞レテ莊園漸ク盛ナリ桓武嵯峨ノ朝ニ始マリ親王及ビ王臣ノ莊園郡國ニ遍滿セリト佐藤信淵ノ農政本論ニハ莊園ヲ以テ陽成帝ノ時ニ始マルトスレモ信シ難シ 凡ソ莊園

政治

莊園ノ害

ノ地タル其所有主ノ私領ニ屬シ郡ニ非ズ郷ニ非ズ國法ノ度外ニ在ル
 ナ以テ國司此ニ入ルヲ得ズ且其部内ヨリ出ル所ノ產物ハ悉ク領主ニ
 納ムルヲニテ何レノ國モ莊園十ヶ所アレバ莊司後世ノ莊屋ノ如キモノ十人アリ
 二十ヶ所アレバ二十人ノ莊司アリテ郡領ノ如クニ莊内ノ百姓ヲ役使
 シ公事訴訟ヲ裁スルガ故ニ其地ノ百姓國司郡司ノ手ヲ離レテ課役ナ
 ク政令簡易ニシテ事便ナルガ若シ然レハ世ノ澆季ナルニ從ヒ莊司ノ
 廉直ナルモノ恒ニ少ク奸曲ノモノ多シ遂ニ年代ノ推移ト共ニ莊司ノ
 權柄漸々強クナリテ冤屈ヲ被ル者次第ニ多ク下情ハ上達スル能ハズ
 テ後ニ甚百姓ノ害トナレリ又豐饒ニシテ物産ニ富ム地及ビ都會輻
 湊ノ處ハ大半莊園トナレルヲ以テ皇家ノ租庸調漸ク減シテ府庫空シ
 ク國用足ラザルニ至レリ後朱雀帝英明ニシテ莊園ノ國家ヲ禍スルヲ

後朱雀帝莊園ヲ廢セム

トス

後三條帝莊園ヲ廢ス

甚大ナルヲ察シ寛徳元年ノ暮敕シテ莊園ヲ廢シ玉フ是ニ於テ皇族諸
 大臣ヨリ女官近臣ニ至ルマデ皆大ニ驚キ唯私領ヲ失ハムヲ憂フ然
 レハ未ダ幾クナラズシテ帝俄ニ崩シ其事遂ニ止ム其後二十餘年ヲ經
 テ後三條帝又深ク莊園ノ害ヲ察シ延久元年始メテ諸般ノ弊政ヲ革ム
 ルニ莊園停廢ヲ以テ第一ノ要務トシ玉ヒシカバ宿弊漸ク除ケリ然レ
 ハ白河鳥羽相繼ギ政ヲ院中ニ聽キ玉フニ及ビテ多ク莊園ヲ置キ自後
 莊園天下ニ錯布シテ國司治ムル所百分ノ一二過ギズ終ニ平清盛政權
 ナ握ルニ及ビテ其一族ノ繁昌所領ノ廣大ナル六十餘州中平家ノ知行
 スル處ハ三十餘州ニ及ビ其他莊園五百餘處田園ハ其數ヲ知ラズト云
 ヘリ莊園ノ害是ニ至リテ殆ド極マレリ

(第二)兵制

(兵制)孝德帝立ツニ及ビ地方豪族ノ兵權ヲ解キテ之ヲ朝廷ニ收メ兵

部省ヲ置キテ一切軍務ノ事ヲ統ベシメ天智帝ニ至リ百濟ノ歸化人答
煇春等兵法ニ明ナルヲ以テ之ヲ講セシメ又長門筑紫大和讃岐及對馬
ノ城ヲ築クコレヨリ先キ城アリ然レ_レ戰時ニ之ヲ築キ戰息ミテ復々
之ヲ撤ス蓋シ營所屯所ノ類ノミ此ニ至リ始メテ築城ノ事アリ其制蓋
シ粗後世ノ城郭ト相類スルナラムト云フ天武持統又兵事ニ於テ最意
ヲ留メ玉ヒ持統ハ諸國ノ正丁四分ノ一ヲ黜シテ兵トナシ以テ武事ヲ
習ハシメ玉フ尋キテ文武帝大寶ノ令ヲ制シ元正帝之ヲ修正シ玉フニ
及ビテ軍令大ニ備ハレリ

此令ニ依レハ全國ノ正丁二十一歳ヨリ
六十歳マデ三分ノ一ヲ黜シテ常備軍トナ

シ以テ京師諸國ニ配置スルノ制ナリ今先ツ京師近衛兵ヨリ畧述セム
衛門府 督一人 佐一人 大尉二人 少尉二人 大志二人 少志二人 醫師一人 門部二百人 物

養老年中ニ
至リテ兵制
大ニ備ハル
近衛兵

近衛兵徵募
法

部三十人 使部三十人 直丁四人 及ヒ衛士

左衛士府 督一人 佐一人 大尉二人 少尉二人 大志二人 少志二人 醫師二人 使部六十人 直

丁三人 及ヒ衛士

右衛士府 左衛士府ニ准ス

左兵衛府 督一人 佐一人 大尉一人 少尉一人 大志一人 少志一人 醫師一人 番長四人 兵衛

使部三十人 直丁二人

右兵衛府 左兵衛府ニ准ス

近衛兵ノ制以上ノ五府アリ而シテ左右兵衛府ノ兵ハ内官外官ノ別ナ
ク六位以下八位以上ノ子弟ノ身材強幹ニシテ弓馬ニ便ナルモノヲ簡
ビ用ヒ若シ足ラザルハ
通シテ庶子ヲ用フ全ク官吏ト同様ニシテ輪番交替アルヲナシ
尤文武ノ才能ニ從ヒテ他ノ官ニ轉スルヲ得、衛門府左右衛士府ノ兵

軍團

ハ一年交替ニテ地方軍團ノ中ヨリ上番セシムルノ制ナリ

軍團編製法

軍團ニ三等アリ

大毅、小毅、主帳

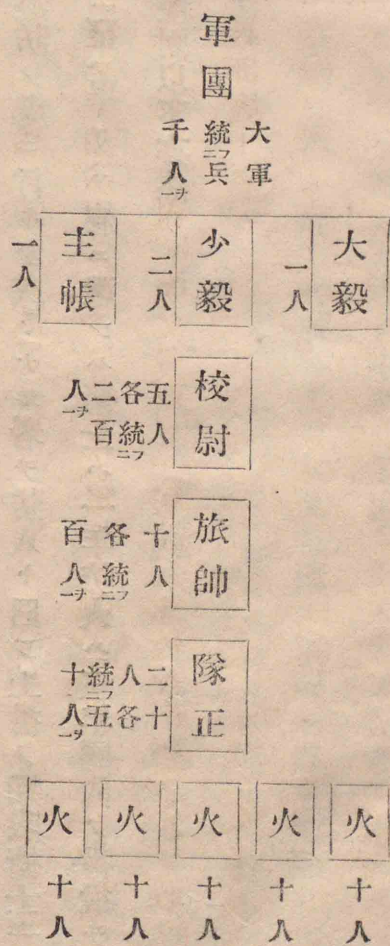
以上ハ京師ニ在ル近衛兵府ナリシガ又毎國ニ軍團ヲ置キテ地方ノ急變ニ備ヘリ軍團ハ今日ノ鎮臺ニ相類スト雖モ其兵士ハ果シテ今日ノ如ク營所ニ屯集シテ日々唯軍務ニ従事スルニ非ズ平生ハ定マシテ常式操練ノ外ニハ農業等ニ従事シタルベシ只兵籍ニ在ルヲ以テ何時徵發ノ命ヲ受クルモ即チ發スベキノ義務アルナリ但タ衛士防人ニ至リテハ隔日ニ出勤シ非番ノ日ト雖モ半日ハ操練ニ従事スベキヲ以テ今日ノ常備軍ノ狀アリ併シ是レトテモ始終營所ニ屯集スルニアラズシテ他所ヨリ通而シテ軍團ニ大中小ノ三等アリ其地樞要ノ大小ニ從ヒテ此差等アルナリ其大ナル者ハ千人、中ナル者ハ六百人以上、小ナル者ハ五百人以下トス凡ソ兵士五人ヲ伍トナシ十人ヲ火トナシ五十人ヲ隊トナス隊ニ隊正一人アリ二隊ニ一ノ旅帥アリ二旅ニ一ノ校尉アリテ各其衆ヲ統フ而シテ千人ニ滿ツル時ハ總ベテ之ヲ統フルニ大毅今ノ指令官ノ一人小毅ノ若キモノ二人ヲ以テス六百人以上ナレハ大毅今ノ指令副官ノ若キモノ

衛士及ヒ防人

小毅各一人、五百人以下ナル者ハ小毅一人ヲ置ク別ニ又主帳一人アリ而シテ大毅小毅ハ部内ノ散位勳位若クハ庶人ノ武藝稱スベキモノヲ取り校尉以下ハ庶人ノ弓馬ニ便ナルモノヲ取ル主帳ハ書算ニ工ナルモノヲ取リテ之ヲ爲ス一隊毎ニ騎兵アリ步兵アリ又強壯ノ者二人ヲ定メテ弩手トス軍團中ヨリ京ニ上リテ皇城ヲ宿衛スル者ヲ衛士ト曰ヒ邊防ノ處ニ行キテ戍トナル者ヲ防人ト曰フ上番ノ期限衛士一年、防人三年、畢リテ郷ニ還レハ衛士ハ一年防人ハ二年國內ノ番役ヲ免カル校尉以下亦然リ

戰時兵隊編
製法
將軍、副將

本朝軍團統轄圖



其外常備兵ニシテ而モ官吏ノ位置ヲ有シタル者内舍人、中宮舍人、東宮舍人、左右大舍人合セテ二千人、帳内トテ親王家ノ護衛兵若干、資人トテ五位以上ノ官人ノ護衛兵若干アリ
以上ハ平時ノ制ナリシガ戰時ニハ又其制アリ出兵一万人以上一萬二千人ニ至ルマデナ一軍トセハ將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四

軍、軍監軍
曹及ヒ錄事

人、錄事四人トス五千人以上九千人ニ至ルマデナ一軍トセハ副將軍軍監各一人錄事二人ヲ減ス三千人以上四千人ニ至ルマデナ一軍トセハ又軍曹二人ヲ減ス而シテ三軍ヲ總ブル毎ニ大將軍一人アリ大將軍出征シテ軍ニ臨ミ寇ニ對スルキ大毅以下軍令ニ從ハザルカ若クハ稽留等ノ事アレハ死罪以下其專決ヲ聽ルス、還ルノ日狀ヲ具ヘテ官ニ申セハ足レリ然レモ未タ寇賊ニ臨マザレハ斯ノ如クスル能ハズ大將軍ノ出征スル必節刀ヲ授ク然レモ軍畢リテ還ルヤ直ニ之ヲ官府ニ收メテ家ニ宿スルヲ得ズ而シテ斯ク一切諸兵ヲ校練徵發スルノ政ヲ掌ル所ヲ兵部省トス

本朝行軍將官圖



又兵士所持ノ武器食物ノ若干ハ其自辨ニ屬シ平生自費ヲ以テ之ヲ備ヘ置クベシ然レモ之ヲ自家ニ藏メ置クハ法ノ禁スル所ニシテ軍團ノ庫中ニ藏メ置クナリ而シテ行軍ノ時ニハ官ヨリ之ヲ給セリ其他ニ要スル所ノ武器ハ官亦之ヲ貸渡セリ而シテ事終リテ還レハ悉ク之ヲ返納スルコトス

若シ非理ニシテ損失スルアレハ賠償セシム但戰ヲ經テ損失スルモノハ其限ニ非ス

養老ノ兵制大畧斯ノ如シ其徵兵ノ方法、隊伍ノ組立ヨリ以テ兵士ノ配置、武器ノ儲藏ニ至ルマデ用意周密ナルト謂フベシ抑上古ハ分業ノ法モ未タ善ク行ハレズシテ唯宮闕ヲ守レル近衛兵若干アルノミニテ別ニ常備兵モアラザリシカモ是ニ於テ分業モ稍行ハレテ常備兵アルニ至レリ故ニ養老以來世上ノ有様ヲ顧レハ時ニ小變ナキニ非スト雖モ總シテ泰平無事ニシテ大亂ナカリシナリ

夫ノ小變スラ身軍職ヲ帶ビテ士卒ニ將タルモノ、爲ス所ニシテ他者ノ企テ起ス所ニ非ルナリ

然レモ泰平寢ヤ續キシガ爲メニ將校ノ志氣自ラ弛ミテ復タ銳意軍事ヲ務メズ士卒亦之ヲ幸トシテ孜孜武藝ニ習ハザレハ其後僅ニ五十餘年光仁帝ノ世ニ至リテ兵士尪弱殆ド用フ可ラザルニ至レリ是ニ於テ唯強壯ノ者ヲ取リテ兵トナシ羸弱ノモノヲ放チテ農トナシ兵農初メテ判ル、コトモ此時ニ始マレリ桓武帝繼ギ立

士卒漸ク柔惰ニ流ル

北邊ニ一大敵ヲ現ス

蝦夷人種

チ玉フニ及ビテ兵士庭弱依然而シテ又北邊ニ一大敵ヲ現出セリ、何
 ナカ一大敵ト曰フ蝦夷ノ反亂是ナリ
 今蝦夷ノ反亂ヲ記スルニ先チテ姑ク本旨ヲ離レテ其人種風俗ヲ畧述
 セザル可ラズ抑蝦夷人種ニ關シテハ古ヨリ諸說紛々トシテ未タ一定
 セザルナリ或ハ曰ク日本固有ノ土人ニシテ王化東漸スルニ從ヒ漸次
 逐ハレテ渡島國ニ移リ今ノ蝦夷人ハ其遺孽ナリト或ハ曰フ上代蝦夷
 島ノ土人我邦ノ北邊ニ渡リ住セルモノナリト新井白石本居宣長ハ此
 說ニ屬セリ 宣長翁ノ大意ニ曰ク蝦夷ハ皇國人トハ形モ心モ全シカラズ
 皇國トハ海ヲ隔テ、其域異ナリ然ルニ上代ヨリシテ其國人陸奥ノ北邊
 ノ地ニ渡リ來リテ住着タル者多クツギ々々ニ蕃息シテ陸奥ノ中央マデ
 モ弘ガリテ皇國人ト雜居シタリ然ルニ本ト別人ナレバ後ノ世ニ至リテ
 モ朝廷ニテ俘ニシタル蝦夷人ヲ陸奥出羽ノ内又諸國ニモ置カレ其子孫
 ニ至リテモ良民ト混ゼズ俘囚ト云ヒテ別ニ一種ニナレリ然ルニ二國ニ
 蝦夷ナクナリシノミナラズ近世ニ至リテハ其本國ノ内ナル松前ノ域マ

テ皇國人ノ郷トナリヌ抑如此陸奥出羽ニアリシ蝦夷ノ清ク絶ハテツル
 一ハ其種類ヲ悉ク殺シタルニモ非ズ又其本國ニ放逐還シタルニモ非ズ
 タゞ何時トナクオノヅカラ絶ヌルナリ、其ハ如何ト云フニマツ陸奥蝦夷
 越蝦夷ト云フ者ハ其初ハ皆彼本國ヨリ移リ來ツル者ナレト云フニマツ
 フニハ非ズ住着テ内地ニテ産タル子モ蝦夷ノ子ハ幾世經テモ蝦夷ナリ
 故二國ノ間ニイト多ク蕃息テヒロガレルナリカクテ其中ニ皇國ノ婦人
 ナ娶リテ産ミタル兒又其兒モ然シテ三四世モ經ルホドニハ漸クニ形モ
 變リテ終ニ皇國人ノ形ニ化タルベシ今世ニモ蝦夷ノ富ミタル者ナド、マ
 レニ松前ノ貧賤キ者ナドノ女ヲ娶ルコトアル、其ガ生ム兒ハ鬚ナドモヤ
 ヤ短ク少クテヒタブルノ蝦夷トハ形ナドヤ、異ナリト云ヘリ此ヲ以テ
 古ニテモ推シテ知ルベキ也、サレド古ハ形ハ皇國人ニテモ、蝦夷ノ種ナリ
 シモノハ、子孫ニ至リテモ尙蝦夷ト云ヒ俘囚ト云ヒシテ、ヤ、後ニハ其制
 モキハヤカナラズ、又上代ノゴトク本國ヨリ心ニ任セテ移リ來ルナド、
 ハ固ヨリカナハザレハ、オノヅカラ絶ユテ皆皇國人トハ成ヌルナリ、今世
 ニモ南部ト津輕トニハ蝦夷ト云フ者、イサ、カバカリアリト云ヘリ、是ハ
 又ハルカ後ニ所以アリテ移リ來ツル者ナドノ子孫ナルベシ此モ形ナド、
 皇國人トサシモ異ナ
 ルトハ無シト云々 今日ニ於テハ後說ハ前說ヨリ勢力アルガ若シ然
 レハ蝦夷人種ノ如何ニ關シテハ猶糺糊トシテ未タ一定セズ近頃西洋
 人ノ中ニ蝦夷人ノ容貌魁岸骨格雄偉ナルヲ見テ以テ白哲人種トスル

政治

之

蝦夷ノ風俗

モノアリ又一種ノ土人トスルモノアリ斯ク諸説未タ一定セザレハ稍明ニ蝦夷人種ヲ確メ得ルハ他日比較原語ヲ學行レテ其語詞ノ起原語勢ノ變遷ヲ詳尋シテ能ク他ノ人種ノ言語ト比較スルノ後ニ非ンハ得テ期ス可ラズ

コレヨリ又其風俗ヲ記サムニ其始メテ朝廷ニ明ナルハ武内宿禰ヨリ始マル景行帝三十五年宿禰命ヲ奉シテ東北諸國ノ地形民風ヲ觀察ス後チ二年還奏シテ曰ク東夷ノ中日高見國アリ男女椎結文身、風俗勇悍、號シテ蝦夷ト曰フ土地膏沃ニシテ曠漠ナリ擊チテ取ルベシト(此中日高見トアルハ今ノ北海道ノ日高見ト云フ説アリ又陸奥ノ日高見新井白石曰ク日高見ト云フハ何レノ國ヲ論セズ其都會ノ地ヲ云フ古語ナリ後世多賀城ナルベシト又本居宣長曰ク日高見トハ何國ニマン廣ク平カナル地ヲ云フ此ニ陸奥ニ然ル地ノアルヲ云ヘリト云フ説アリ後説是ナルガ如シ)是レ蝦夷

ニ通スルノ始メナリ尋キテ帝ノ詔ニ曰ク東夷ハ冬ハ穴居シテ夏ハ木處シ皮ヲ衣血ヲ茹フト是レ蓋シ宿禰目視スル所ヲ奏セシニ由リテ明ナリシモノナルベシ斯ク其性强暴ニシテ勇悍ナレバ上古ヨリ屢亂暴ヲ爲シ次第ニ猖獗ヲ極メ竟ニ殆ド制ス可ラザルニ至レリ今上古ヨリ光仁桓武ノ時ニ至ルマデ東夷ノ反亂ヲ統計セバ左ノ如シ

東夷叛亂畧圖

是レ其叛亂ノ大ナルモノヲ舉グルノミ

帝名	年	標夷	名	征討將名	兵	數
景行	四十年	東夷	日本武尊	兵數未詳	約ソ數ヶ月	約ソ半年未滿
	五十六年	東山道中ノ蝦夷	御諸別王	全		
仁德	五十五年	蝦夷	夷田	道全		田道敗死
	四年	全	阿部比羅夫		約ソ一ヶ月許リ	

舟師百四月ニ發シ八十艘テ其月歸ル

齊明	四年	肅	慎	阿部比羅夫	未詳 <small>其發途ハ未タ詳 月前ニ選レリ</small>	一ヶ月以上五ヶ月以内
	五年	蝦夷	全			
元正	六年	肅	慎	全	舟師二百艘	約ソ二ヶ月許リ
	和銅二年	奧越夷		巨勢麻呂 佐伯石湯	未詳然レモ大 軍ナリ	未詳然レモ五 六月以上
聖武	神龜元年	全		藤原宇合等	兵約ソ二萬	十ヶ月以上
	寶龜五年	全		大伴駿河磨	未詳然レモ大 兵ナリ	約ソ十ヶ月餘
光仁	全十一年	全		藤原繼繩等	未詳然レモ大 軍ナリ	約ソ十八ヶ月ニ シテ漸ク平ク
	延暦七年	全		紀古佐美	兵五万三千許	約ソ十五ヶ月ニ シテ功ナシ

前表ニ據レバ蝦夷ハ元明元正ノ頃ヨリ益猖獗シ光仁桓武ニ至リテ一層甚クナレリ蓋シ蝦夷人ハ一方ニ於テハ常ニ山野ニ獵シテ猛獸毒蛇

坂上田村營

始メテ陸奥
鎮守府ヲ建
ツ

ト雌雄ヲ争ヒ或ハ茅屋破窓ノ下ニ寒熱ヲ忍ビテ自ラ常トスル等ノ若キ平生ノ舉動ハ悉ク戦争ノ影子ナレハ毫モ歲月ト共ニ勇氣ノ減スルアラズ而シテ他ノ方ニ於テハ子孫蕃息シテ部落愈大ナルヲ致セバ其益勇強ニシテ猖獗ヲ極ムルヲ敢テ怪ムニ足ラズ然ルヲ況ンヤ國內兵士ノ懦弱ナルニ於テナヤ幸ニ桓武ノ時名將坂上田村營ト曰フ人アリ詔ヲ奉シテ蝦夷ヲ討スルニ及ビテ始メテ大功ヲ奏シ多ク陸奥ノ地ヲモ拓キシカバ遂ニ膽澤城ヲ築キ以テ鎮所トシ關東諸國ノ浮浪四千人ヲ發シ以テ之ニ配ス蝦夷コレヨリ漸ク衰フ然レモ其遺種餘孽猶未タ盡ク擒滅ニ就カザリシガ故ニ嵯峨帝ノ弘仁三年膽澤鎮所ヲ建チテ鎮守府トシ將軍一軍監一軍曹二醫師弩師各一又屯田一百町ヲ置キテ之ニ備ヘ府ト國ト相併セテ政ヲ爲セリ

コレヨリ先キ齊明帝ノ時阿部比羅夫蝦夷ヲ討平シテ政所ヲ後方

政治

始メテ檢非
違使ヲ置ク

羊蹄ニ建テテ郡領ヲ置ケリ蝦夷内屬シテ官府ヲ建設スルハ蓋シ是ヲ以テ始トス和銅年間ニ蝦夷屢叛スルヲ以テ征討ノ將ニ陸奥鎮東將軍征越後蝦夷將軍ノ號アリ已ニ蝦夷ヲ平ケ始メテ出羽國ヲ置キ諸國ノ民ヲ徙シテ出羽柵ニ配ス是ニ於テ陸羽出羽並ニ邊要ノ重地タリ事アレハ則チ將帥ニ命シテ之ヲ征ス陸奥ヲ征スルモノヲ征夷將軍ト云ヒ出羽ニ鎮スルモノヲ鎮狄將軍ト云フ最其撰ヲ重シテ神龜年間始メテ多賀柵ヲ築キ以テ夷境ヲ壓ス時ニ始メテ鎮守府將軍ノ號アリ是レヨリ將軍出征スル毎ニ多賀柵ニ鎮ス又常ニ戍兵ヲ置キ鎮守兵ト云フ而シテ此柵ヲ呼ビテ鎮所ト稱ス天平年間ニ出羽ノ柵ヲ秋田村ニ置キ秋田城ト云フコレヨリ蝦夷警懼シテ相踵キ降ヲ請フ尋キテ諸國ノ浮浪ヲ殺シテ所々ノ柵戸トス光仁帝ノ寶龜年間蝦夷勢頗ル張ル是ニ於テ朝議邊備ヲ急ニシ邊兵九百人ヲ置ケリ又相模武藏等四國ノ兵士ヲ發シテ之ニ赴カシム又多ク城ヲ要塞ノ地ニ築キ以テ備ヲナス是ニ至リ遂ニ鎮守府ヲ置ク

然レモ其後夷俘屢叛シテ凶燄甚熾ナリ且當時租稅漸ク苛ク群盜益起レモ朝廷ノ兵制ハ益頽レ兵士ハ愈羸弱トナレリ從來兵士ハ六衛軍團ノ別ナク奸盜殺賊ノモノヲ逮捕スルノ職ヲ兼テ恰モ兵務ト警察トヲ兼帶スレモ前條ノ次第ナルヲ以テ淳和帝ノ時ニ至リ初メテ別ニ檢非違使ト云フ者ヲ京師ニ置キ專ラ畿内警

所在兵士ノ
暴行

三善清行ノ
封事

察ノ事ヲ管セシム文德帝以後諸國ニ又往々檢非違使、押領使、追捕使ヲ置キ僅ニ不良ノ徒ヲ索捕セリ

朝廷ハ斯ク蝦夷ノ反亂盜賊ノ群起ノ若キ外部ノ刺激ヲ受ケテ困難スルニ際シ偶マ内部ヨリ破裂シテ遂ニ兵權下ニ移ルトハナリ又、ソハ當時所在ノ兵士獨羸弱ナルノミナラズ朝廷ノ制度行ハレズシテ彼等常人ニ對シテ橫行暴戾ヲ爲シ現ニ六衛ノ兵養老ノ初メ五衛府アリ其後數回ノ變更ヲ歴テ嵯峨帝ニ至リ左右衛門府、左右兵衛府、左右近衛府ノ六衛トス此レ竟ニ永制トナル凡ソ六衛ノ兵數時ニ増減アリト雖モ常領大率チ二千七百人以上ト雖モ亦常ニ闕下ニ在ラズ諸國ニ散在シテ橫ニ田疇ヲ占メテ正稅ヲ輸サズ或ハ黨類ヲ集メテ府官ヲ凌轢スルコト是ナリ

延喜年中三善清行封事

テ上ル中ニ六衛舍人、散落諸國或在千里啣驛之外、百日行程之地、豈得編名門籍、分番宿衛乎、夫選置衛卒、以備警急、今離京畿、在甸服、一旦緩急、將何所用、實是諸國之豺狼、非六軍是ニ於テ宇多之猛虎也、ト曰ハルハ此等ノ徒ヲ謂フモノナリ

帶刀瀧口ノ
二兵ヲ置ク

其由來
太宰府

帝別ニ帶刀瀧口ノ二兵ヲ置キ白河帝ハ又北面ノ武士ヲ置キテ皇居ヲ宿衛セシメ玉フ鳥羽帝ノ時ニ至リ盜賊益起リ檢非違使モ亦力之ヲ禁遏スル能ハザルコトナリ又然レモ藤原氏政ヲ擅ニシ其族ニ非ル者ハ高官ニ列スルヲ得ザルガ故ニ武士ノ權勢ヲ喜ブ者或ハ檢非違使タラムコトヲ求メ又帝政ヲ院中ニ聽キ玉フニ及ビ專ラ檢非違使ニ任用シ源平諸氏ヲ以テ之ヲ爲サシメ玉フヨリ檢非違使ノ權大ニ盛ナリ而シテ其究竟スル所ニ至リテハ兵權平氏及ビ源氏ニ歸シテ復々如何トモスベカラザルニ至レリ第四篇ノ末尾ヲ參觀スベシ
又眼ヲ轉シテ西邊ヲ顧レハ中古ノ間有名ナル一鎮臺アリテ陸奥鎮守府ト並ビ立テリ之ヲ太宰府ト曰フ筑前ニ笠郡ニ在リ其建置ノ年代詳ナラズ然レモ推古帝十七年ニ筑紫太宰ヨリ百濟ノ人肥後ニ漂到スル

任那日本府

ノ事ヲ奏スルアリ則チ此レヨリ前其設アルコト知ルベシ而シテ其源ハ三韓ノ内官家ニ昉マル初メ崇神帝ノ時任那新羅ノ爲メニ逼ラレ將帥ヲ請ヒテ以テ其地ヲ鎮ス西蕃ノ内屬是ヲ初メトス神功三韓ヲ平定スルニ及ビテ每國內官家ヲ定メ以テ海表ノ藩屏トス己巳ノ歲比自怵南加羅、暎、安羅、多羅、卓羅、加羅ノ七國ヲ定メ後チ斯ニ岐、卒麻、古瑳、子他、散半下、乞食、稔禮等ノ國ヲ併セ總稱シテ任那ト曰フ乃チ官家ヲ安羅ニ建ツ之ヲ任那日本府ト謂ヒ又安羅日本府ト云フ其官人任那ヲ鎮スルモノヲ行軍元帥ト曰ヒ百濟ヲ鎮スルモノヲ百濟宰ト曰ヒ新羅ヲ鎮スルモノヲ新羅宰ト曰フ皆天朝ノ威命ヲ奉シテ以テ屬國ヲ撫定ス雄畧繼體ヨリ後新羅稍反シテ屢任那ヲ侵ス欽明帝ノ時ニ至リテ新羅竟ニ任那ノ官家ヲ滅ス敏達帝ヨリ推古帝ニ及ブマデ屢之ヲ復サムコト

鎮西ニ太宰府ヲ置ク

其職制

ヲ試ミ玉ヒシカモ任那卒ニ再ヒ建ツル能ハズ筑紫ノ地ハ西極ニ在リ
 蕃國ノ朝貢スル所、遐邇ノ輻湊スル所、中外ノ關門トス宣化帝ノ時嘗
 テ官家ヲ筑紫那津口ニ置キ又重臣ヲ遣ハシ其國政ヲ執リテ以テ三韓
 ニ備ヘシム朝廷已ニ任那ヲ失フ故ニ府ヲ此ニ建チテ太宰ヲ置キ以テ
 專ラ外寇ニ備フ太宰或ハ帥ト曰ヒ又總領ト稱ス後チ太宰帥ト曰フ諸
 王大臣ヲ以テ之ニ任ス元正帝養老二年府制大ニ定リ主神、帥、大貳、少
 貳、大監、少監、大典、少典等ノ官ヲ置キ九國二島ヲ管シ其政令ヲ統ブ凡
 ソ外蕃ノ朝貢、使牒ノ往來、遠人ノ歸化、商舶ノ貿易等ノ類悉ク皆之ヲ
 掌ル其屬ニ防人正アリ防人ノ政ヲ掌ル、防人ハ皆諸國ノ兵士ヲ取ル
 交替二年ヲ以テ限トス其後朝廷漸ク政事ニ怠リ正帥率チ親王ヲ以テ
 之ト爲ス而シテ親王躬任ニ赴カズ權帥若クハ大貳ニ委テテ以テ府事

武器

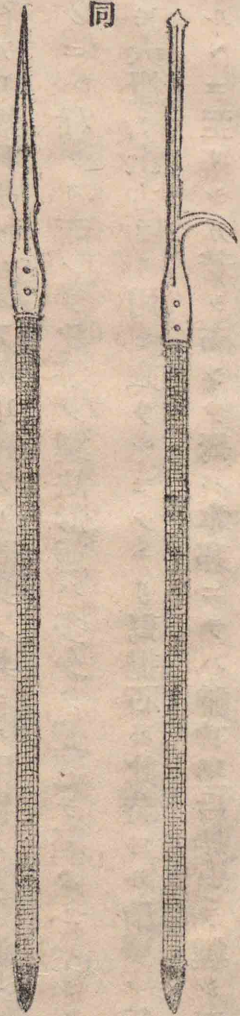
ヲ視セシム其屬官多ク闕クルモ而モ補ハズ防人司ノ如キハ延喜中已
 ニ廢セラレテ府制漸ク壞ル源賴朝兵權ヲ執ルニ及ビテ鎮西奉行ヲ置
 ク又鎮西守護ト改ム

今此章ヲ終フルニ臨ミ當時用ヒシ所ノ武器ニ關シ聊其大要ヲ述ブベ
 シ抑當期ノ初メニ於テ士卒ノ進退ヲ節スルモノニハ鼓鉦、大角、小角
 鼓ハ皮ヲ以テ製セル大鼓、鉦ハ金ヲ以テ製セル大
 鼓ナリ大角ハ、ハラノフエ小角ハ、クダノフエナリ
 抛石アリ短兵長仗ニハ刀、劔、牟稍アリ護身ノ具ニハ甲冑アリ飛道具ヲ
 防クニハ楯アリ而シテ此等ノ製法形態ハ多少ノ變遷ヲ歷タルベシト
 雖モ大概チ上古ヨリ用ヒ來リシモノナリ弩抛石ハ此時ヨリ稍廣ク行
 ハル、ニ至リシガ若シ而シテ弩ハ本邦ニテハ神功皇后始メテ製シ玉
 ヒシガ其制今定カナラズ漢土ニハ材官蹶張トテ勇士ガ足ニテ踏ミ又

弩

政治

同



手ニテ張ルモノモ有リ之ヲ擘張ト云フ戰國策ニ蘇秦鉄ヲ以テ矢トナ
ス長サ八寸一弩二十矢ヲ發ストアリ諸葛亮ガ弩モ矢ノ長サ八寸一弩
二十矢ヲ發ストアリ本朝ノ制ハ之ト相類スルヤ否ハ知ル可ラズト雖
モ蓋シ全ク相異ナルモノニハ非ルベシ又拋石ハ我邦ニテ石弩ト稱ス
又イシハシキ槍ト云フ機械ニテ石ヲ擲ケテ敵ヲ擊ツモノナリ支那ニ亦此器アリ
今本邦其由リテ起ル所ハ定カナラズ唯尾張風土記ニカムヤマト神日本磐余彦天

拋石

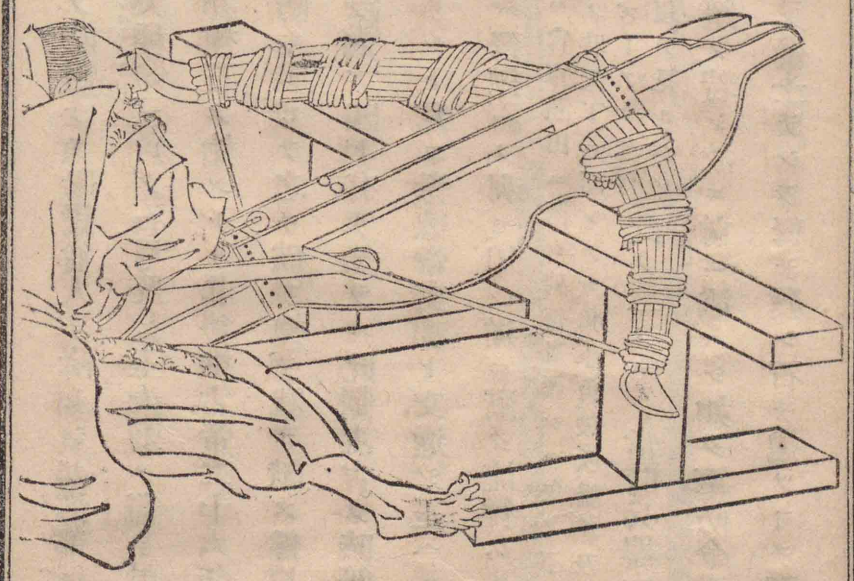
皇神武帝 東征ノ時討チテ陽貴曾人ヲ降セシガワキミ海部佩室屋ト云フ者天皇

ヲ射シカバアマテリミコト天種命三角ノ石弓及ヒ玉大羽ノ箭ヲ射テ佩室屋ヲ殺ス
アリ是レ我邦拋石ノ始メナリ其後推古帝二十六年隋ノ煬帝高麗ヲ伐
チシニ高麗防キ戰ヒテ之ヲ破リ捷ヲ我ニ獻ス俘虜二人鼓吹、弩、拋石
及ヒ土物、駱駝一匹ト有リ然ラバ此制上古ノ時既ニアリシモ未タ廣
ク行ハレザリシト見ユ孝德帝支那ト交通シ玉ヘルニ及ビテ百事唐風
ヲ學ビ玉ヘバ弩拋石ノ利モ知レ遂ニ漸ク流行スルニ至レルガ若シ文弘
帝壬申ノ難ニ官軍瀬田ニ陣シ列弩亂發シテ矢ノ下ルコト雨ノ如シトア
リ又天武帝ノ時天下ニ詔シテ大角、小角、鼓吹、幡旗及ヒ弩拋石ノ類ハ私家
ニ藏ム可ラズトアリ其行ハレタルヲ以テ見ルベシ 此ノ二ノモノ當時兵器中最利ノモノニシテ
猶今日ノ砲銃ノ若シ故ニ前ニ述ベシ如ク軍防令ニ軍團一隊毎ニ弩手
二人ヲ置キ又衛士ヲシテ弩ヲ發シ石ヲ拋ツヲ習ハシム爾後時ニ張

弩ハ當時ノ
最利器ナリ

島木史真弩ヲ
試ミ射ル圖
(前賢故實ニ
見ユ)

此圖何ニ據
リテ作レル
ヲ知ラズ今
姑ク掲ゲテ
讀者ノ參考
ニ供ス



弛ナキニ非スト雖
正嵯峨帝ヨリ後益
行ハル特ニ仁明帝
ノ世島木史真出テ
、弩製更ニ進歩セ
史真新弩ヲ製ス
四面射ル可ク回
轉發シ易シ舊製ニ
依リテ巧ヲ加フル
者ナリ試ミニ之ヲ
射ルニ唯發聲ヲ聞
キテ矢ノ影迹ヲ見
ズ而シテ矢ノ達ス
ル所的知ス 貞觀寬
平ノ間始下每國弩

弩衰ヘテ弓
箭盛ナリ

烽燧

師ヲ置カザルナキニ至レリ然レ正一躰其器ハ守ルニ便ニシテ攻ムル
ニ便ナラザレバ 三善清行ノ所謂弩之爲用、短ニシテ 當時ニ在リテ外侮ニ
於追撃、長於守禦ト是ナリ 備フルニハ則要器タルモ之ヲ攻城野戰ニ用ヒムトスレバ大ニ運搬ニ
勞シ竟ニ弓箭ノ輕便ニ如カズ故ヲ以テ他日源平ノ戰ニ至リテハ此器
既ニ頗衰ヘテ弓箭ノ利方ニ盛ナリ然レ正此時石弩ノ用未タ全ク廢レ
ザルガ若シ牟稍モ光仁帝漢ノ偃月刀ニ倣ヒ薙刀ヲ作り玉ヒテ次第ニ
行ハル、ニツレ竟ニ衰ヘタリ又源平戰爭ノ頃既ニ陣處ニ大鼓法螺
貝ヲ用フレハ鉦角モ廢レタリ 清和帝ノ世對馬守小野春風母衣ノ發
明アリテ以來矢ヲ防クニ楯ト共ニ行
ハレ來
レリ
又當時電信ナドノ發明ハ固ヨリ夢ニダモ見ル能ハザレバ一朝變起リ
テ之ヲ急報スルニ如何セシヤト云フニ初ノ頃ハ烽燧ヲ以テ之ヲ報ズ

政治

ルトトセリ烽燧ハヌロセノナリ樞要ノ地ニハ相去ル四十里古ノ里法ナリ
 中間ニ山岡アリテ兩處ノ隔絶スル若キアラバ必シモ四十里ヲ限ルニ非ス 毎三之ヲ設ケ掛官ヲ置キ事アレ
 バ晝ハ烟、夜ハ火ヲ放チテ之ヲ次ノ烽處ニ報ズ其掛官之ヲ見テ亦前
 ト同一ノ手續ヲ以テ其次ノ烽處ニ報ズ斯ク順次ニ相報スルヲナリ然
 レト斯ク烟火ヲ放ツモ前烽處ノ掛官ノ見遣モアラム又天陰リテ見ヘ
 難キヲモアリ今日ヨリ見バ不便極マルト雖ト當時ニ在リテ急報ノ具
 ハ此ニ若クモノナカリシ也而シテ此具ハ外變ノ患アル對馬壹岐及ヒ
 筑紫ノ諸國并ニ京師ニ接近スル地方ニ多シト然レト此レモ何時ノ
 頃ヨリカ廢絶シテ行ハレザリニケリ

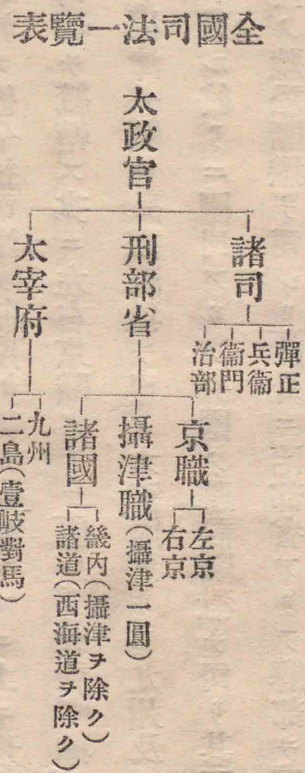
(第三)法制

(法制) 孝徳帝從來ノ封建制度ヲ廢シテ郡縣制度トナシ地方ニ國司郡
 司ヲ置キ玉フニ及ヒテ郡國ノ豪族始メテ勢力ヲ失ヒ所謂族長アルモ

司法ノ組織

唯族ノ長者ト謂フノミニシテ執政統御ノ權ハ總ベテ朝廷ノ占ムル所
 トナレリコレヨリ間獨個人ノ事跡ノ史ニ顯ハル、ヲ見レバ上古ノ族
 長裁判熄ミタルヤ蓋シ疑フ可ラズ然レト司法ノ制度未タ備ハルニ至
 ラズ而シテ其稍見ルベキニ至ルハ大寶養老ノ令出デシ後ニ在リ
 是ニ於テ修令後司法ノ制度如何ヲ觀察スルニ上ニ刑部省アリテ全國
 ノ司法ヲ統轄ス次ニ左右京職アリテ兩京ノ聽訟斷獄ヲ司リ攝津職ア
 リテ攝津一圓ノ聽訟斷獄ヲ司リ太宰府アリテ九州及ビ二島ノ聽訟斷
 獄ヲ司ル終リニ國司アリテ一國ノ聽訟斷獄ヲ司リ其下ニ郡領アリテ
 郡内ノ聽訟斷獄ヲ司リ此外ニ治部省アリテ解部ヲ置キ譜第ノ爭訟
 チ司ル然レト是固ト刑部省ヨリ派出セシムルモノニシテ治部省附屬
 ノ官吏ナラザルハ其別司ト云フヲ以テ明ナリ又彈正臺アリテ内外官

吏ノ非違ヲ彈奏糾察シ衛門府兵衛府アリテ所部ノ非法ヲ案檢ス左ニ
全國司法一覽表ヲ示ス

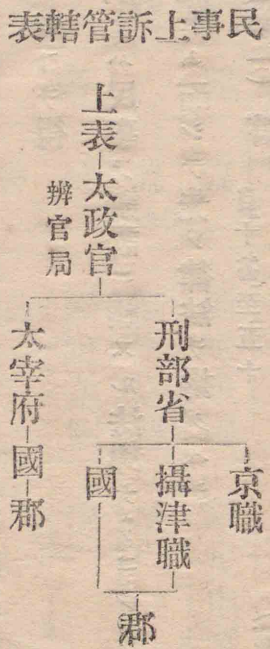


右諸職管理スル所ノ權限ヲ説カムニ民刑各稍其管轄ヲ異ニス
民事ノ訴訟ハ京師ニアレバ之ヲ京職ニ訟ヘ浪花津ナレバ之ヲ津職ニ
訴フ而シテ其餘ノ地方ハ先ツ之ヲ郡司ニ訴フ公式令ノ定ニ依リテ其
判決ニ不服ヲ申立テ上訴セムト欲スルモノハ其官司ヨリ不理狀上訴ノ免

民事

控訴手續

許狀ニシテ後世幕府時代ノ所謂添書ナリヲ受ケ次序ヲ踐ミテ上陳スルコトヲ許ス其次序ト
ハ當初京職若クハ津職ニ訴ヘタル者ハ刑部省ニ上訴シ刑部ノ判決ニ
不服ナルハ太政官ニ上陳ス若クハ當初郡司ニ訴ヘタル者ハ次ニ國司
(若クハ津職)ニ上訴シ國司ノ裁決ニ不服ナルハ九州並ニ二島ニア
リテハ太宰府ニ上訴シ其他ノ諸國ニアリテハ彈ベテ刑部省ニ上訴ス
其管轄表左ノ如シ



然リ而シテ上訴ニ臨ミ不理狀ヲ乞フニ當リ官司ニ於テ三日ヲ經テ尙
之ヲ給セザルハ其旨ヲ記シ直ニ上訴スルコトヲ許ス如此序ヲ踐ミ太

政官ニ至リテ尙之ヲ理セザルキハ直ニ天皇ニ上表ヲ奉ルコトヲ許セリ
加之官司故サラニ判決ヲ下スニ延引躊躇スルキハ次序ヲ越エテ上訴
スルコトヲ得

以上ハ民事ノ訴訟ニ關スル法規ナリコレヨリ又刑事ニ關スルモノヲ
記セム而シテ先ツ律法ヲ掲グベシ

(第一) 答

自十答至五十
答ノ五等アリ

(第二) 杖

自六十杖至百
杖ノ五等アリ

(第三) 徒

自一年半年宛ヲ遞加シテ
三年ニ至ルノ五等アリ

(第四) 流

近中遠ノ
三等アリ

(第五) 死

絞斬ノ二
等アリ

(第六) 除免官當

(第七) 應贖

當時ノ律法此ノ如シ而シテ郡ハ唯答罪以下ヲ決スルコトヲ得杖罪以上
ハ皆之ヲ國ニ送付ス國ハ之ヲ覆審シ訖リテ徒杖ノ罪及ビ流應決杖若
クハ應贖ノ罪ニ當ルキハ即之ヲ決配徵贖ス刑部省ニ於テ流以上ヲ斷

刑事管轄一覽表

罪名		郡		國		官司	
死	斷定送國	斷定送國	斷定申官	斷定申官	斷定申官	斷定送省	在京諸司
流	斷定送國	斷定申官	斷定申官	斷定申官	斷定送省	斷定送省	在京諸司
流	斷定送國	斷定申官	斷定申官	斷定申官	斷定送省	斷定送省	在京諸司
杖	斷定送國	決	決	決	決	決	在京諸司
答	決	決	決	決	決	決	在京諸司
除免官當	斷定送國	斷定申官	斷定申官	斷定申官	斷定送省	斷定送省	在京諸司
應贖	斷定送國	徵	徵	徵	斷定送省	斷定送省	在京諸司

スルモ亦此ニ准ス京職(及ビ攝津職ハ浪花津ニ限り)ハ郡國ノ權限ヲ
兼行スレバ其刑事管轄ノ如キモ郡國ヲ併セタル權限ヲ有セリ左ニ刑
事管轄一覽表ヲ示ス

覆審ノ法

刑部省及ビ諸國(京職攝津職モ入ル)ニ於テ流以上若クハ除免官當ノ刑ヲ斷スルハ其斷案ヲ連寫シテ太政官ニ上申セザルベカラズ太政官ニ於テ按覆ノ上其理ヲ盡セル斷案ト認ムルハ其旨ヲ上奏シ若シ然ラズト思料スルハ左京ナレバ更ニ刑部省ニ就キテ覆審セシメ地方ナルハ別ニ官吏ヲ派遣シテ之ヲ覆審セシム

左京ノ諸司(京職ヲ除ク)ニ於テ事發スルハ其人徒以上ヲ犯セハ皆刑部省ニ送り杖罪以下ハ當司之ヲ決ス獨リ衛府ニ至リテハ罪人ヲ糺捉スルハ京ニ貫屬スル者ハ皆京職ニ送り京ニ貫屬セザル者ハ皆刑部省ニ送ル

其外地方國主ノ廳ナドニテ疑ハシキ獄アリ決シ難キハ刑部省ニ送り若シ刑部省ニ於テ仍疑ハシキハ太政官ニ上申シ其決ヲ請フベキ

藤氏權ヲ專
ニスルニ及
ビテ司法ノ
制竟ニ衰フ

ナリ

以上ハ大寶養老ノ令ヲ以テ定メラレタル司法制度ニシテ爾來時ニ多
少ノ變更アルモ概シテ其制度行ハレ來レリ其後藤原氏世々政ヲ專ニ
スルニ迫ビテ外戚ノ權ヲ弄シ賞罰當ヲ失スル少ナカラズ當時司法ノ
弛緩實ニ言フニ忍ヒザル者アリ後三條帝位ニ即クニ及ビテ英明ノ資
ヲ以テ夙ニ相門ノ權ヲ收メ記錄所ヲ起シテ訴訟ヲ聽斷シ以テ賞罰ヲ
明ニシ玉フ之ニ依リテ數世傾頽セル紀綱大ニ振フ然レモ未ダ幾クナ
ラズシテ崩シ玉ヘハ其後法律弛廢シ或ハ緩ニ過ギ或ハ苛ニ涉リ制令
一定セズ加フルニ僧徒跋扈シ武人叛亂盜賊蜂起シテ紀綱大ニ廢ル

(農制) 孝德帝從來ノ稅法ヲ廢シ唐制ニ倣ヒテ新ニ租庸調ノ三者ヲ行
ヒ爾後數次ノ修正ヲ歷七十餘年元正帝ノ養老中ニ至リテ初メテ成レ

(第四)農制

全國ノ戸籍
初メテ行ハ
ル

初メ孝徳帝未タ此新税法ヲ施行シ玉ハザルヤ先ツ戸籍編製ニ着手シ
玉ヘリ蓋シ帝ノ已前ハ唯國內一部ノ戸籍アリシナラムモ未タ全國ヲ
包括セル戸籍アラザルナリ帝今新税法ヲ設ケムトシ玉ヘルニ臨ミテ
戸籍ハ之ト密着ノ關係ヲ有シ先ツ之ヲ造リテ全國民ノ姓名、住所、員
數等ヲ調査スルヲ最急務ナレバ首ニ之ニ從事シ大化元年其成ルニ及
ビテ明年新税法ヲ發布シ玉フ今之ヲ記スルニ當リ先ツ田制ヲ掲ゲ然
後此ニ及ハムトス

田制

所謂田制トハ田地ノ區劃、種類及ビ收授等ニ關スル事ニシテ凡ソ田
長サ三十步廣サ十二步即チ二百六十步ヲ一段トシ十段ヲ一町トシ男
女六歳ニ至レバ口分田トテ二段ノ田ヲ以テ男子一人ニ給シ其三分ノ

班田收授ノ
法

墾田

二ヲ以テ女子一人ニ給シ六年毎ニ戸籍ヲ改メ造リテ戸口ノ増進ヲ調
査シ死亡スル者ハ其田ヲ納メ六歳以上ニ至ルモノニハ新ニ田ヲ給ス
之ヲ名ケテ班田收授ノ法ト曰フ其旨トスル所ハ兼併ノ者ナク不足ノ
者ナク貧富ヲ平均スルニ在リ故ニ一家ニ戸主以下家族老幼幼ハ六歳以上
ベテ十人アレバ一戸十口ト立テ一口毎ニ田ヲ班ツテ概テ周ノ井田ノ
如シ其中地味薄瘠ニシテ每歲耕種スルニ堪エザルモノアレバ易田ト
テ倍增ノ田ヲ給シ隔年ニ耕種セシム而シテ此口分田ハ當ニ良民ニ給
スルノミナラズ奴婢ニモ亦之ヲ給セリ其額ハ良民ノ三分ノ一ニシテ
奴ハ良民ノ男ヲ標準トシ婢ハ良民ノ女ヲ標準トシテ之ヲ授ク唯官戸
奴婢ノ口分田ハ其額良民ニ同クシテ且租稻ヲ官ニ納ムルニ及バズ
口分田ハ熟田ヲ民ニ給スルノ制ナレ民別ニ荒蕪ノ地ヲ開墾セムト

政治

欲セバ官ニ請ヒテ爲スヲ得之ヲ墾田ト名ク養老七年墾田ノ法ヲ定
 ヲ舊溝ニ沿ヒテ開墾セル者ハ終身其田ヲ私有シ新ニ溝池ヲ穿チテ開
 墾セル者ハ三世其田ヲ私有スルノ制トナサレシモ土地還納ノ期ニ至
 レバ民往々望ヲ失ヒ耕種ヲ力メズ墾田再ビ荒蕪ニ屬スルヲ數ナリシ
 カバ天平十五年ニ墾田ハ世々之ヲ私有スルヲ許サレタリ
 其他田地ノ種類ニ功田、國造田、郡司職分田、無主位田、闕國造田、闕郡
 司職分田、闕采女田、射田、公乘田、神田、寺田、戒本田、放生田、職分田、太政大臣
左右大臣大納言ノ職分田ヲ謂フ 國司公麻田、畿内官田、天子ノ御食等アリ而シテ功田ヨ
 リ郡司職分田ニ至ルマデノ諸田ハ前ノ口分田及墾田ト同シク皆租稅
 ナ政府ニ納ムルヲ以テ總稱シテ輸租田ト曰フ無主位田ヨリ公乘田ニ
 至ルマデノ諸田ハ皆官田若クハ位田職田ノ當分主ナキモノ人民ニ貸

輸租田

輸地子田

不輸租田

陸田、宅地、園地

渡シテ地子ヲ徵收スルガ故ニ總稱シテ輸地子田ト曰フ 是レ後世俗ニ所謂下作ノ類
 ナ神田ヨリ畿内官田ニ至ルマデノ諸田ハ租稻ヲ政府ニ納メザルヲ以
 テ總稱シテ不輸租田ト曰フ
 已上水田ノ外ニ陸田、宅地、園地ト稱スル者アリ陸田ハ人ニヨリテ數
 町以上ヲ賜ハリ粟黍等ヲ種ユ宅地ハ空閑ノ地ニ於テ便宜之ヲ占有セ
 シメ園地ハ郷土ノ廣狹ニ應シ各人ニ均分シテ之ヲ給シ戸ノ上中下ニ
 從ヒテ桑漆ヲ植エシムルノ制ニテ桑漆ノ數ハ上戸桑二百本漆一百本
 以上、中戸桑二百本漆七十本以上、下戸桑一百本漆四十本以上ト定ム
 レル土地ノ廣狹ニ依リテ此ニ限レルニ非ズ且水田ハ貸貸スルヲ許
 サレタルノミニテ墾田ノ若キ私田ヲ除クノ外決シテ賣買ヲ許サレザ
 リシモ宅地園地ハ自由ニ之ヲ賣買スルヲ許サレタリ

田地ノ制ハ大概子以上ニ述ベシガ如シ故ニユレヨリ當時ノ稅法ニ移
ラム

第一 租トハ年貢米ヲ謂フナリ初メ孝德帝田一段ノ租稻二束二把ト
定メ玉ヒタリ一段ノ收穫凡ソ五十束ニシテ一束ノ稻ヲ舂キテ白米五
升ヲ得レハ二石五斗ノ中ヨリ一斗一升ヲ年貢トスルノ割ニテ殆ド收
穫ノ二十五分ノ一ニ當レリ白雉三年又減シテ一束半トナル然レモ文
武帝ノ大寶中之レヨリ重クシ玉ヘバ慶雲三年減ジテ白雉ノ制ニ復サ
レタリ養老中ニ又大化ノ稅率ニ復シ段ニ二束二把町ニ二十二束トナ
リタリ又官田ヲ私借シテ納ムル所ノ地子ハ收穫ノ十分ノ二ノ定メニ
シテ陸田ハ段毎ニ租粟二升ノ割ナリ

第二 調トハ小物成及ビ種々ノ運上等ヲ謂フナリ孝德帝ノ時絹^{カサ}ナリ

絶^{フトキズ}ナリ絲ナリ又綿布ナリ其郷土ニ生スル所ヲ以テ適宜ニ納ムルナリ
其規定ハ絹ナラバ男子一人ニテ廣サ二尺五寸ノモノ一尺、絶ナラバ
絹ト同幅ノモノ四尺、布ナラバ絹絶ト同幅ノモノ八尺ヲ納ムベシ是
レ直段ニ高下アルニ由リテ斯ク丈尺長短ヲ異ニスルナリ元明帝ノ和
銅七年増シテ絹絶ハ三尺、布ハ八尺四寸ヲ納ムベキトナリ元正帝
ニ至リテ絹絶ハ正丁トテ二十一歳ヨリ六十歳マデフモノ一人ニ付キ
八尺五寸、美濃絶ハ六尺五寸、絲ハ八兩、綿ハ一斤、布ハ二丈六尺ヲ出シ
若シ雜物ヲ輸サハ銀十斤、次丁トテ六十一歳ヨリ六十五歳マデノモノ
銀三口、鹽三斗等ノ定ナリ 或ハ殘疾ノモノハ其三分ノ一ヲ中男トテ十七歳ヨリ二十歳マデノモ
ノハ其四分ノ一ヲ出スコトナリテ一層重クナレリ
第三 庸トハ夫役人足ニ出ヅベキ代リニ仕拂ヘル稅ニシテ免役料ナ

租庸調ノ行
ハル、所以

リ百姓正丁タル間四十年毎歳十日夫役ニ使用サル、ノ定ナリシガ其
 入出ヅル能ハザルルニハ布一日二尺六寸ノ割ヲ以テ十日分二丈六尺
 ナ納ムベシ之ヲ庸ト謂フ文武帝ノ時一丈三尺ニ減シ元明帝ノ和銅七
 年増シテ二丈八尺トナリ元正帝ノ時大化ノ制ニ復シテ二丈六尺トナ
 レリ尤納ムベキモノハ唯布ニ限ルニ非ズ他物ヲ以テスルモ妨ゲナシ
 又正役十日ヲ勤メ其外ニ猶加役三十日ヲ務ムル時ニハ租調共ニ免セ
 ラル但シ加役三十日ニ滿タザル時ハ租調ヲ三十分シ其一分ヲ一日
 シ加役ノ日數ヲ算シテ之ヲ免スルノ制ナリ次丁ハ年ニ五日服役シ若
 シ然カセザレバ其割ニテ庸ヲ納ムベシ但シ中男ハ服役ニ出デザルモ
 庸ヲ收ムルニ及バズト見エタリ
 抑當時此稅法アル所以ヲ考フルニ米穀絹緇布帛等ヨリ以テ鹽鐵魚菜

租庸調合計
ニ關スル推
測

雜物ニ至ルマデ日常必用ノ品ハ此三稅法ヲ以テ一切徵收シ以テ日常
 ノ用度ヲ辨スルノ精神ニ出ヅルモノニシテ今日ノ若クニ交通便利便賣
 買自由ナラザルノ時ニ在リテハ勢固ヨリ然ラザルヲ得ズ 上古ノ租稅
ハ蓋シ固ヨ
 リコノ制ナラム但々其名稱及規定 ハ中古ノ如ク井然備ハラザルノミ 故ニ唯本稅即チ租ヲ見レバ其割合
 輕キモ調庸ヲ合スレバ若干ノ増加ヲナスコト言ハズシテ明ナリ然レモ
 其割合今得テ詳ニスル能ハズ唯船橋懸信ノ古今田制通考ニ此三者ヲ
 合セバ稻七束ノ割ニ當ルト云ヘリ 本書ニ曰ク調庸ノ法ハ本稅ヲ輕ク
シ賦ノ方ヲ重クスルノ法ナリ其調
 ハ品ニテ取リ庸モ布ニテ取ル譯ナレ 此品物ヲ多ク取リテモ不用ナレバ
 其名目ニテ米ニ折免シテ取ルルハ矢張租ヲ輕クシテ何ノ詮モナク本稅
 ノ方多クシテ取ルモ同シ譯ナレバ甚煩シ中畧一段ノ收獲五十束ヨリ二
 束ニ把トリテハ三十分ノ一ニアタリ古ノ輕稅ナルコト想フベシト世ノ碩
 儒和學者諸書ニ記シ置ケ共中畧調庸ヲ水田ノ租ト合シテ米トスレバ稻
 七束ニナル割合ト言ハズ中畧令義解ノ本文ニ庸調ハ布ニテト割ニ出
 タレモ是ハ名目ナリ其實ハ米ナリ則チ交易ノ法當時ノ古文書ニ有之租
 庸徵交易法租二束五把米一斗二升五合調二束五把米一斗二升五合庸二

東(米一斗合米三斗五升右ノ如ク本文ノ本稅ヲ二束二把トシテモ調庸ヲ合シテ見レバ七束ニナル况ヤ二束二把ハ位田職田口分田ヨリ輸ス所右三田ニテ割渡シタル外ハ公田トシテ農ノ力餘リアルモノニ授ケ耕作セシムル分ハ五分ノ一若クハ四分ノ一ニ當ル(所謂十ニシテ二ノ法ナリ)云々ト此庸調米穀ニテ納メシト云ヘル
 其果シテ然ルヤ否ハ未タ遽ニ斷ハ間々此事アレモ常ニ然ルニ非ルナリ
 言スル能ハズト雖モ免ニ角若干ノ増加ヲナシタルヲハ得テ疑フ可ラズ

義倉

既ニ前ニ述ベシ若ク班田收授ノ法ヲ設ケ男女生レテ六歳以上ニ至レバ一人トシテ田地ヲ給セラレザルナシト雖モ年ニ豐凶アリ身ニ疾病アリテ或ハ飢寒ニ苦ミ或ハ納租ニ窮スル等ヲ免レズ是ニ於テ朝廷義倉及ヒ出舉ノ法ヲ設ケ以テ此患ヲ免レシムムヲ計レリ
 義倉ハ今日ノ所謂備荒儲蓄ノ類ニシテ平常年々一位以下百姓雜人等ヨリ戸毎ニ若干ノ粟ヲ徵集シ置キ水旱飢饉ノ年ニハ之ヲ以テ貧民ヲ

出舉

戶籍

賑給スルニ備フルモノナリ而シテ其徵收ノ規定ハ八戸ヲ九等ニ分チ上々戸ハ粟二石上中戸ハ一石六斗上下戸ハ一石二斗中上戸ハ一石中々戸ハ八斗中下戸ハ六斗下上戸ハ四斗下中戸ハ二斗下々戸ハ一斗ヲ出スナリ尤稻麥豆ヲ以テ代用スルモ妨ゲナシ
其後孝謙帝ノ頃米穀ヲ貯ヘテ非常ニ備ヘ且飢民ヲ賑救スル爲メニ不動倉ノ設ケアリ光仁帝ノ世米價ノ高下ヲ平均シテ貧民ヲ救ハムトテ常平倉ノ設ケナドアリタリ
 又出舉トハ財物或ハ稻粟ヲ出シ貸シテ利子ヲ取り舉グルヲ三シテ公私ノ二種アリ其利子ノ割合屢變更スレモ元正帝ノ養老中ニ定メ玉ヒシモノ左ノ如シ財物ヲ貸スニハ公私共ニ多年ヲ經ルモ其利一倍ニ過グルヲ得ズ而シテ稻粟ヲ貸スニ於テハ私民ノ貸出シタルモノ其利一倍ニ止マリ官ヨリ貸出シタルモノハ半倍ニ過グルヲ得ズ
 次ニ戶籍ハ前ニ述ベシ如ク六年毎ニ之ヲ改造シ其時ニ班田ノ收授モ

△ 郡村ノ制

行ハレバ税法ト密着ノ關係アルガ故ニコレヨリ戸籍ニ就キテ聊述ブル所アラム

凡ソ戸ハ五十戸ヲ一組トシ之ヲ一里ト名ケ一里毎ニ長一人ヲ置キ戸口ノ檢校、農桑ノ課植等ヲ掌ラシメ其里二十以下十六以上ヲ大郡トシ十二以上ヲ上郡トシ八以上ヲ中郡トシ四以上ヲ下郡トシ二以上ヲ小郡トス又京師ニハ坊毎ニ長一人ヲ置キ四坊ニ令一人ヲ置ク其職掌里長ニ同シ

△ 年齢ノ制

凡ソ男女二歳以下ヲ黄トナシ十六歳以下ヲ少トナシ廿歳以下ヲ中トナシ廿一ヲ丁トナシ六十一ヲ老トナシ六十六ヲ耄トナシ男年十五女十三以上ニシテ婚嫁スルヲ得又天下ノ戸ヲ大別シテ課戸不課戸ノ二種トス課戸トハ戸内ニ課役ニ出ヅベキ年齢ノ民ノ存スルモノニシテ

△ 租庸調漸ク重シ

不課戸トハ其義務ナキ民ノ存スル戸ナリ例ヘバ皇親及八位以上、十六歳未滿ノ男子、六十六歳餘ノ老人、癯疾、婦女、奴婢等ノ家ハ皆不課戸ニ屬セリ 以上義倉出舉ヨリ此ニ至ルマテ大寶養老ニ定マル制度トス

中古初代ノ農制ニ關スルモノ大畧斯ノ如シ然レモ孝謙桓武ノ兩朝ハ租漸ク重クシテ十分ノ一二當リ 庸調モ之ニ准ス 嵯峨醍醐ノ兩朝又増シテ五分ノ一トナレリ之ニ庸調ノ高ヲ合セバ四公六民ヨリ強シト云フ其上ニ軍器モ田地ヨリ出タシ軍役モ勤メザル可ラズ之ニ加フルニ夫ノ貸借出舉ノ若キモ利子制限法アリト雖モ凡ソ利子ノ高下ハ借者ノ需要ト貸者ノ供給ノ關係ヨリ發スルモノナレバ此法從來有名無實ニ過ギズシテ實際ニ於テ頗高利ヲ拂ヘリ 貸者ノ供給多クシテ借者ノ需要少ナケレバ利子低下ス之ニ反セバ利子高昇ス當時需要ノ割合供給ヨリ甚大ナリ 政府屢之ヲ制シ又私民ノ貸出ヲ禁スルニ至ル

出舉義倉等ノ制著功ナシ

班田收授ノ法行ハレズ

ト雖此著効ナシ而シテ利子ノ高昇此ニ至リテ益甚シトス幸ニ官貸ハ利子常ニ半倍ヲ出デズ間ニ割ニ下ルコアリシカモ善ク其裏面ヲ見レバ有司種々ノ姦策ヲ用ヒ百姓亦半倍以上ノ利子ヲ拂フヲ免レズ其上從來屢年飢エ物價沸騰セバ義倉常平倉等アリト雖モ其僅々タル穀物ヲ以テ到底物價ヲ平準スル能ハズ是ニ於テ四海困窮ノ始メトナレリ其後承平天慶ノ頃干戈頻ニ動キテ國家多事ナレバ國費ヲ要スルコトモ大ナルベシ又亂平グルニ及ビテ風俗益奢侈ニ流レ詩歌管絃ノ事盛ニシテ莊園ナド云フ私領次第ニ出デ來リ遂ニ位職田ノ制モ自ラ有名無實ノ姿トナレリ斯ク朝臣ノ私領盛ナルニ及ビテ朝廷ノ歲入モ隨ヒテ減スルガ上ニ佛法盛ニ行ハレテ其財ヲ佛事ニ投スルコト甚シケレバ其結果皆人民ノ頭上ニ墜落シテ益重稅ヲ拂フニ至レリ當時班田ノ制モ

(第五)幣制

天武帝ノ世白銀始メテ出ツ

固ヨリ弛ミテ恰モ田畑ハ百姓ノ私有ノ如クナリテ豪農ハ夥多ノ田地ヲ併有スルモノモアレモ斯ク重稅ヲ課セラレ、ニ於テハ間逃避シテ田地荒蕪ニ歸スルコト往々之レアリト云フ延喜以來所々ニ群盜起リテ止マザリシハ皆此ニ根由スルナリ終ニ白河帝ニ至リテ篤ク佛ヲ信シ玉ヒ費用莫大横斂頻ニ起リ民心稍離レテ遂ニ政權武門ニ歸スルノ助ヲ成セリ

(幣制) 本朝ニ於テ上古未タ鑄錢ノ舉アラザルコトハ既ニ上卷ニ述ベシガ如シ故ニ推古舒明帝ノ時ヨリ屢使ヲ隋又唐ニ遣ハシ遂ニ隋ノ五銖錢唐ノ開元錢等漸々多ク傳ハリ來リテ通用スルガ故ニ齊明天智ノ頃ニハ唐ノ銅錢世ニ流通ス其後天武ノ二年對馬國白銀ヲ出セシ之ヲ本邦銀ヲ出スノ始ヨリ始メテ銀錢銅錢ヲ鑄テ通用セシコト見エタリ伊呂波字メトス

帝ノ世既ニ
鑄錢司アリ

元明帝ノ世
銅始メテ出
ヅ

類鈔ニ云ク帝ノ五年始メテ鑄錢司ヲ置キ中納言中臣意美麻呂ヲ以テ
長官トスト然ラバ帝ノ時已ニ鑄錢司アルナリ十二年詔シテ唯銅錢ヲ
用ヒテ銀錢ヲ廢ス尋キテ復タ之ヲ行フ持統帝八年大宅麻呂等ヲ以テ
鑄錢司ノ官ニ拜ス文武帝三年十二月鑄錢司ヲ置ク蓋シコレヨリ先キ
此司一タビ廢セラレタルナ此ニ至リテ復スルモノ乎然ラザレバ其規
模ヲ變シタルモノナラム然レハ此時代ニ鑄錢スル所ノ銅ハ未タ日本
ニ出ザル時ナレバ定メテ唐銅ヲ用ヒタルベシ且其錢ノ文字モ審カナ
ラズ其後元明帝ノ時武藏國ヨリ始メテ銅ヲ出セシヲ以テ年號ヲ和同
ト改メ鑄錢司ヲ置キ和同開珍錢ヲ鑄玉フ是レ皇國ノ銅ヲ以テ錢ヲ鑄
ルノ始メトス 元明帝和同四年錢穀ノ相場ヲ見ルニ穀六升ハ錢一文ニ
當レリ當時銅初メテ出ツルヲ以テ其貴キト斯ノ如シ其
後稱德帝天平神護元年左右京粉二千斛ヲ東西ニ糶セシトアリ其相場一
斗ニ付百錢ナリ是レ米價ノ踴貴ニ由ルト雖モ銅錢ノ貴キト復タ往時ノ

帝已前ノ旅
行ノ有様

帝務メテ錢
貨ノ便ヲ知
ラシム

錢貨次第ニ
行ハル
黃金始メテ
出ツ

數所ニ於テ
錢貨ヲ鑄造
ス

若クニ非^レコレヨリ先キ前ニ述ベシガ若ク本邦錢貨アリト雖モ其數未
ルベシ 十分多カラザルト人民又未ダ其便ニ慣レザルトノ故ニ米穀布帛ノ
類ハ重ニ貿易ノ媒介トナリテ錢貨未タ盛ニ行ハレザレバ旅人ハ躬種
々ノ食物種々ノ調度ヲ携帯スベキヲ以テ途中ニテ食物絶エテ餓死ス
ル者モアリシト云フ是ニ至リテ帝詔シテ旅人ヲシテ錢ヲ齎ラサシム
又國郡ノ豪富者ニ勸メテ米ヲ路側ニ置キテ旅人等ニ賣ラシム其他種
々ノ手段ヲ以テ務メテ錢貨ノ便利ヲ世ニ示シ玉フコレヨリ後世人漸
ク錢貨ノ効用ヲ知リテ次第ニ行ハレ聖武帝ノ世始メテ黃金出ツレハ
終ニ一時金錢ヲモ鑄造スルニ至レリ
斯ク錢貨次第ニ行ハル、ニ及ビテハ唯之ヲ一處ニ鑄造シテハ國內ノ
流通ニ應シ難キニヤ便宜ノ地數處ニテ鑄來タレリ元明帝ノ和同錢ス

ラ近江ニテ鑄タルモノアリ又太宰府播磨等ニテ鑄タルモノアリ其後
 嵯峨帝弘仁中「長門國司ヲ改メテ鑄錢使トス」ト云フヲモ見エ淳和帝
 ノ天長中「周防ノ鑄錢司ニ命シ秩期一ニ諸國ニ準ス」ト云フヲモ見エ
 又清和帝ノ貞觀中山城國葛野郡ノ鑄錢所等ノ新鑄錢ヲ伊勢太神宮ニ
 奉ズト云フヲモ見エタリ尤鑄錢司ヲ廢セラレタルヲモ數回アリシカ
 凡其都度久シカラズシテ復タ設置セラレタリ而シテ斯ク鑄錢所ノ處
 々ニ在リシヲハ延喜式ニ於テ最明ナリ
 該式錢貨ニ關スル民部省ノ條ニ曰ク凡ソ備中長門豐前等ノ國ノ鑄
 錢司ニ送ル銅鉛ノ返抄ハ稅帳ニ副ヘ之ヲ進ムト
 又同主稅寮ノ條ニ曰ク備後國ノ正稅二十四万束鑄錢司ノ俸料二万
 八千束周防國ノ正稅二十一万束鑄錢司ノ俸料二万八千束ト

私鑄盛ナリ

然レ凡ソ一利アレバ一害ノ之ニ伴フハ事物ノ得テ免レ難キ數ナレ
 バ今斯ク錢貨行ハル、ニ及ビテ人民ノ私鑄盛ニシテ偽錢多ク世ニ出
 デタリ且之ニ加フルニ眞錢ニテモ歲月ヲ歷ルニ從ヒ次第ニ文字磨滅
 シ輪郭缺乏スル等ノ事アレバ殆ド世々改鑄ノ舉アラザルナシ
 斯ノ如ク屢改鑄ノ舉アレバヨリ錢貨ノ品質ニ就キテ將ニ一言セ
 ムトス

錢貨ノ品質

余之ヲ古錢鑑定家ニ聞ク古錢ノ今ニ存スルモノヲ觀ルニ其質純雅精
 巧ナルハ和同開珎ヲ以テ第一トス信ニ唐ノ高祖ノ時ニ鑄造セル開元
 通寶ト伯仲スベシト然レ凡聖武帝ニ至リテ深ク佛法ヲ尊ビ大銅佛ヲ
 鑄テ朝野群載ニ此大佛ノ記アリ此書ニ據レバ大佛ノ像ニ用ヒタルハ熟
 鑄テ銅七十三万九千五百六十斤白鑄一万二千六百八十八斤鍊金一万四百
 三十六兩ナリ其餘ニ塔ニ基アリ之ニ用ヒタルハ熟銅五万五千五百二斤
 五兩白鑄四百九斤十兩鍊金一千五百兩又鐘一口高サ一丈三尺六寸口徑

佛法ノ錢貨
ニ及ボス影
響

九尺一寸三步厚サ八寸ニシテ熟銅五万二千六百八十斤白銅二千三百斤ヲ用ヒタリ三貨圖彙ハ右熟銅ノ總入用ヲ改算シテ此銅十三万八千八百八十貫目ナラム東大寺ニ安置シ玉ヒシヨリ貴賤上下之ニ倣ヒ銅佛ヲ鑄ルノ日ニ盛ニ行ハレタレバ之ニ費ス所ノ銅ハ頗夥シ幸ニ處々ノ銅山ヨリ銅ヲ出スノ多キヲ以テ政府鑄造ノ銅貨未タ品質ヲ卑クスルニ至ラザレ仁明帝ヨリ後ハ鑄佛ノ風益盛ニシテ銅ノ出ツル之ニ準ジテ増サレバ遂ニ鑄錢司ノ用銅缺乏シテ改鑄アル毎ニ漸ク下品トナリ愈後ニ出ツルモノハ愈惡シ寬平通寶以下延喜通寶乾元大寶等ノ如キハ其性薄惡ニシテ皆衰世ノ風アリ鉛錢ハ殊ニ惡シ然レモ宇多醍醐二帝共ニ英明ニシテ能ク心ヲ政事ニ用ヒ玉フ而ルニ鑄錢ノ極メテ惡シキ所以ハ銅ヲ佛像ノ鑄造ニ費スル甚多キガ故ナリ左ノ一表ニ於テ此事明ナラム

宇多醍醐帝
鑄錢ノ極メテ惡シ
キ所以ハ銅ヲ佛像ノ鑄造ニ費スル甚多キガ故ナリ

中古鑄造貨幣表

發行年號	貨幣名稱	品質	直徑		價格	廢止年號
			重	量		
元明帝	和同開珍	銀錢	八分	一分	一	和銅二年
和同元年	和同開珍	銅錢	八分	一分	一	未詳
<p>銀錢ハ斯ク和同二年ニ廢セラレト雖モ養老五年ニ銀錢一ヲ以テ銅錢二十五ニ當テ銀一兩ヲ以テ壹百錢ニ當テ之ヲ行用セシムトアリ又六年ニ錢二百ヲ以テ銀一兩ニ當ツト云フコトアリ然ラハ此時銀錢復タ行ハレタルカ</p>						
淳仁帝	開基勝寶	金錢	八分	一分	一	未詳
天平寶字四年	太平元寶	銀錢	未詳		一〇〇	未詳 然レモ久シカラズシテ金錢ト共ニ廢セラレ
稱徳帝	万年通寶	銅錢	八分	一分	一〇〇	稱徳帝神功開寶ヲ鑄玉フ時ニ尙並行ス
天平神護元年	神功開寶	銅錢	八分	一分	一〇〇	万年通寶ト共ニ延暦十八年ニ廢セラレタルガ如シ

政治

此錢舊錢万年通寶ト差額アリテ物情擾亂セバ詔シテ新舊ノ錢皆價ヲ同クシテ行ハシメ玉フ

桓武 延曆十五年	隆平永寶	銅	錢	八分強	舊錢ト	弘仁八年
				九分九厘	ニ當ル	二十二年

此錢次キノ四年間舊錢万年通寶及神功開寶ト並行ス

其每年鑄造高自弘仁九年五千六百七十貫文 自弘仁十二年三千貫文 至承和元年千八百三拾貫文 然レ此ノ諸鑄錢所ノ合計ナルカ將タ唯一鑄錢所ノ高カ未タ詳カナラズ

嵯峨 弘仁九年	富壽神寶	銅	錢	七分五厘	隆平永寶ト ノ差明ナラズ	仁明帝承和昌寶ヲ鑄 玉フ時ニ尙並行ス
承和二年	承和昌寶	銅	錢	七分	富壽神寶十 ニ當ル	承和十四年
嘉祥元年	長年大寶	同		八分	承和昌寶十 ニ當ル	天安二年
貞觀元年	饒益神寶	同		七分	長年大寶十 ニ當ル	貞觀十一年
清和帝 同十二年	貞觀永寶	同		七分	饒益神寶十 ニ當ル	寬平元年
				六分五厘強	富壽神寶十 ニ當ル	承和十四年
				七分	承和昌寶十 ニ當ル	天安二年
				八分	長年大寶十 ニ當ル	貞觀十一年
				七分	饒益神寶十 ニ當ル	寬平元年
				六分		同十二年

此ノ時
カナラズ

宇多 寬平元年	寬平大寶	同		六分	貞觀永寶ト ノ差明ナラズ	醍醐帝延喜通寶ヲ鑄 玉フ時尙並行ス
醍醐 延喜七年	延喜通寶	同		六分	寬平大寶十 ニ當ル	天徳元年
				七分		五十二年

此時鉛錢モ鑄ラレ其錢尙今ニ在リト云フ

コレヨリ以來天正年中ニ至ルマデ凡ソ六百年間新錢鑄造ノ有無定カナラズ

錢貨圖

和同開珍ハ
銀錢銅錢共
形態文字相
同シ

他ノ諸錢ノ
裏面ハ和同
錢ノ裏面ニ
同シ

面
背

斯ノ如ク銅
貨益粗惡ニ
流レタレバ
人民之ヲ嫌
厭シテ融通
頗惡シ是ニ

唯嘆ママノ事
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ
ハ口ヲシテモ

外交盛ナリ

於テ唐土ノ錢多ク渡來シテ都鄙ノ融通ヲ助ク其後白河帝佛教ヲ信シ
玉フフ特ニ篤ク國家ノ財用ヲ佛事ニ靡耗シ銅佛ヲ鑄造スルコト大小三
千以上ニ及ベリ故ニ銅山ヲ掘鑿スルコト極メテ多ク鑛脈ヲ涸渴セシム
ルニ至レリ是ニ由リテ本邦鑄造ノ銅錢鉛錢愈薄惡トナリ世上皆唐錢
ヲ貴ビ遂ニ本朝ノ錢ハ賤キコト甚シ
又上表ニ舉ゲタル若ク金銀貨モ一時行ハレタリ此二ノモノハ價貴ク
携帶ニ便ニ大取引ノ仕拂ニ適シタルニ久シカラズシテ皆廢セラレテ
獨銅貨ノミ世ニ行ハル、ニ至ルハ蓋シ金銀貨ノ偽造銅貨ニ比スレバ
猶一層盛ナルニ由リシガ若シ然レハ當時内國ノ賣買ニテモ隨分巨額
ノモノモアルベシ又朝鮮支那トノ貿易モ益盛ニナリ
養老令ニテ外國
ノ商船筑紫ニ來
タレバ朝廷唐物ノ使ト云フヲ遣ハサレテ其物品ヲ改メサセ官府ノ交易
ヲ畢レバ人民ノ交易ヲ許サル、ノ制ナレハ此法次第ニ破レテ未タ官吏

沙金ハ高價
ナル貿易ノ
媒介トナル

ノ至ラザルニ貴紳豪富ノ輩私ニ之ヲ買取ル等ノ事アレバ醍醐帝ノ延喜
三年之ヲ禁止シ玉フ然レハ此制久シカラズシテ復タ弛ミシガ若シ是レ
外國船ノ我國ニ來リシ時ノ事ナレハ又筑紫等
ノ商人ハ貨物ヲ積ミテ彼國へ渡ルモアリキ 且遣唐使、留學生、學問僧
ナドアリテ外國行モ盛ナレバ唯銅貨ノミニテハ不便少ナカラザルガ
故ニ是非之ヨリ輕便ニシテ高價ノモノナカル可カラズ而シテ金銀地
金モ往々此事ニ用ヒラレシナラムガ先ヅ沙金ハ重ニ之レニ用ヒラレ
シト見エ高價ノモノ或ハ外國費ヲ拂フニ之ヲ以テスルコト屢此時代ノ
書ニ見エタリ右沙金ハ其量目ヲ衡リテ之ヲ用フルガ故ニ何程ノ代價

沙金筒

二貨圖彙ニ曰ク昔シ沙金ヲ賣買シ又ハ諸物ト交換セシト農商ノ徒或ハ沙金筒ヲ造リ
腰ニ挾ミ往來シタリ與州南部ノ人古代ノ沙金筒ヲ藏ス其長サ八寸四五步ニテ左ノゴ
トク竹ヲ以テ製セシモノナリト其當時ニ用ヒラレシヤ否ヲ知ル可ラザレハ沙金携帶
法ノ概畧ヲ窺フニ便ナレバ姑ク之ヲ掲グ



ナ仕拂フニモ地金ノ如ク截斷ノ面倒モナクシテ至極便利ノモノナリ
 而シテ當時沙金ハ隨分本邦ニ産出シタルト思ハル、ナリ又外國ヨリ
 來レルモノモアルベシ然レ^レ後冷泉帝ニ至リテ泰山府君ヲ祭り銀錢
 二百四十貫文ヲ供スル^コアリ又高倉帝ノ時重盛金錢九十九文ヲ皇子
 ニ獻スル^コアリ先輩或ハ以テ先帝ノ時既ニ銀錢アリ後帝ノ時金錢ア
 ルトス然レ^レ亦通貨ニアラズシテ擬錢ナリト曰フモノアリ若シ擬錢
 ナレバ當時沙金猶通貨ノ用ナセシナラム若シ眞錢ナレバ内地商業
 ニ用ヒラレシナラムモ外國貿易ニハ猶沙金ヲ用ヒタルベシ何トナレ
 バ内地ノ金銀貨ハ外國ニ出ツレハ通貨ノ効用ヲ失ヒテ地金ト見做サ
 ルレバナリ

風俗

坐スルハ我
 國上古ヨリ
 ノ風ナリ
 跪禮ヲ廢シ
 テ立禮ヲ用
 フ

中古ニ至リテハ風俗ノ上ニモ多少ノ變更アリテ天智帝ノ九年朝廷ノ
 禮儀ト行路相避クルノ禮トヲ宣ブト云フ^コ見エタリ然レ^レ今其作法
 ナ知ルニ由ナシ但シ坐スルハ我國上古ヨリノ風ナレバ菅疊、皮疊、絹
 疊ナドノ敷物^{カモノ}今日ノ如キ疊ニ非ス^{カモノ}甚舊キ時ヨリアリシガ天武帝
 ノ十一年ニ跪禮^{カモノ}匍匐ノ禮ヲ停メ更ニ難波朝廷ノ立禮ヲ用フト云フ^{カモノ}
 アレバ孝德帝ノ時唐風ニ倣ヒ朝會ニハ立禮^{カモノ}立禮ハ今日ノ西洋風ニ同
 必榻ニ據ル皇極帝ノ頃大極殿ニ整砌ヲ敷キシ^{カモノ}見エタレバ立禮^{カモノ}ヲ用ヒ
 ハ蓋シ此頃ヨリ既ニ行ハレタラムト思ハルレ^レ史ニ明文ナシ^{カモノ}
 ラレシト見エタリソレヲ天智帝ノ時ニ跪禮^{カモノ}匍匐ノ舊禮ニ復サレ^{カモノ}
 ナ以テ敬トス坐セバ必地ニ躡ス^{カモノ}タルガ天武帝ニ至リテ復タ立禮ニ改
 是レ本邦ノ坐禮ニ復シタルナリ^{カモノ}メラレシガ若シ其後此詔モ漸々行ハレザリシカ文武帝ノ慶雲元年ニ
 朝會ニ榻ヲ用ヒ百官跪伏ノ禮ヲ罷ムル^{カモノ}見ユ然レ^レ民間ハ依然舊來

風俗

跪禮ニ復ス

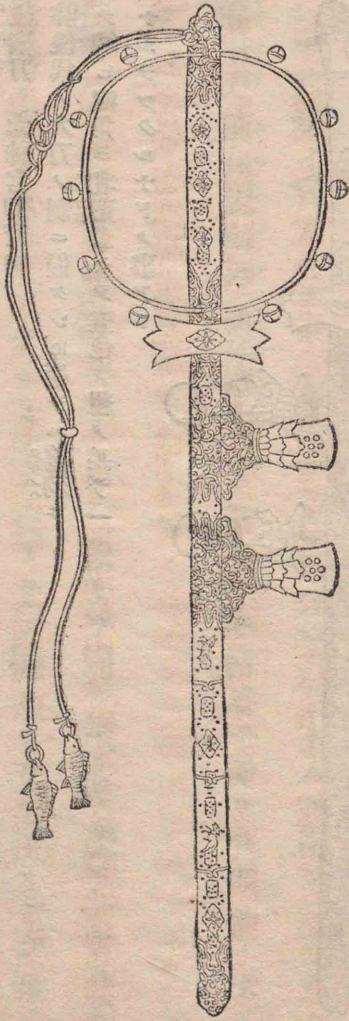
良民賤民

ノ跪禮ヲ用ヒ疊ノ上ニ坐セシナルベシ其後朝廷ノ立禮モイツトナク
 弛ミテ跪禮ニ復シ疊ナドモ今世ノ所謂疊出テ來リテ暈網端疊、錦端
 疊、兩面端疊、布端疊、綠端疊、等種々アルニ至レリ
 又昔シヨリ良民賤民ノ二族アリシガ此期ノ初ニ至リテ其關係モ定カ
 ナレリ良民トハ奴婢ヲ使フ家柄ノ人ニシテ賤民トハ奴婢トナリテ使
 ハル、家柄ノ人ナリ此二族ハ固ヨリ人種ノ區別ヨリ起リシ事ニモ非
 ズ良キ姓ノ家ハ職モ高ク家モ豊カナルニ賤キ姓ノ家ハ職モ卑キク家
 モ貧シカリシヨリ良家ニ雇ハレテ奴婢トモ爲リシガ本ニテ遂ニ良賤
 主從ノ名モ出テ來リテ其交際自ラ一様ニナラズ牛馬同様賣買セラル
 ヲモアリニキサレバ良家ト賤家トハ互ニ婚姻スルヲナク若シ私
 通シテ生兒ナドアルハ其兒ニ關シ往々爭論ナドモ起リシコアリ故

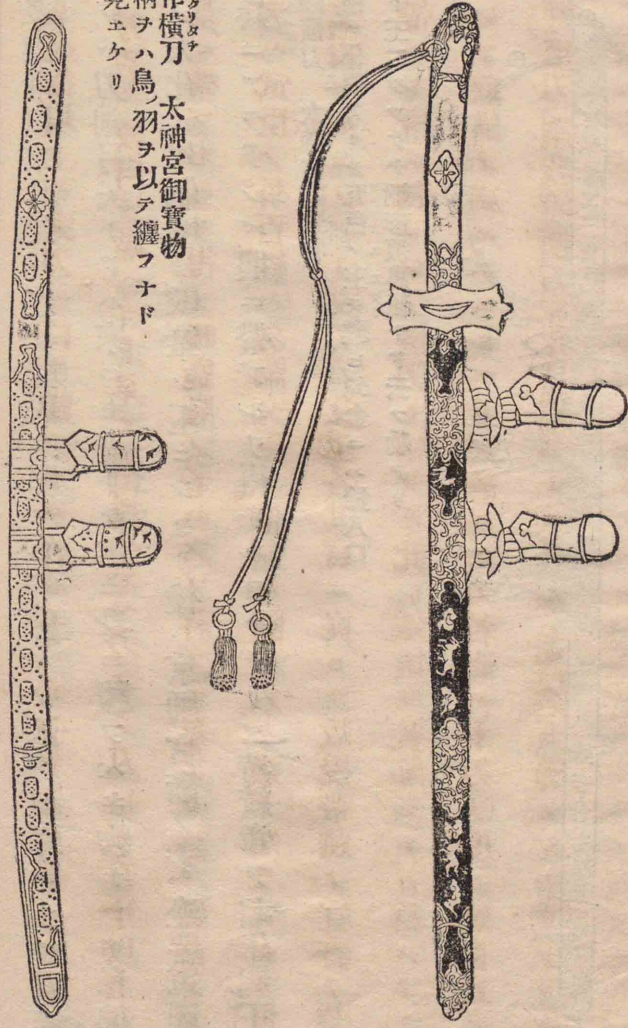
刀劍弓矢等

庶民ノ帶刀
ヲ禁ス

ニ孝德帝以來其兒ハ之ヲ賤民ニ屬スル等種々ノ法規ヲ定メ玉ヘリ
 昔シハ刀劍弓矢ナドハ家ニモアリテ常ニ身ニ隨フベキ物ナレトモ孝德
 帝ノ大化元年制度ヲ改革シ玉ヒシヨリ後ハ京師官衛ノ士、邊要軍團
 ノ兵ニアラザレバ猥ニ帶ブルヲ得ザルコトナリ又持統帝ノ七年親王
 玉纏横刀タマキリノコ 太神宮御寶物
 柄ニ小環アリテ五色ノ玉ヲ纏ヒ勾金ニハ鈴八口
 ト玉ニツツクテ鮒形須惠紐ナド云フ物アリ



須我流横刀 太神宮御寶物
 大躰後代ノ大刀ノ制ニ似タレハ柄ヲハ鶴羽ヲ
 モテ纏ヒ四角ニ乳形着キテ五色ノ組ノ長サ一
 丈ナルヲツクルナドノ事アリ



新作横刀 太神宮御寶物
 柄ヲハ鳥羽ヲ以テ纏フナド
 見エケリ

ヨリ進位以上ハ大刀一口ヲ備フルヲ許シ玉ヘリ令ニモ兵士ハ大刀一
 口、刀子一枚自ラ備ヘヨト見エ延喜式ニハ刀子ノ長サ五寸以上ハ
 容易ニ帶ブルヲ得ズ唯衛府ノ者ハ之ヲ許ス凡見エタレバ延喜ノ頃
 マデハ武臣ノ外百姓ハ勿論文臣ノ帶劍モ隨分六ヶ敷ト知ラレタリ但
 シ文刀ナルモノアリ文刀ハ文臣各其官ニ從ヒテ敕授帶劍ノ宣許ヲ蒙
 リ帶スル所ノ劍ニシテ儀刀ト稱セリ此レ威儀ヲ裝飾セムガ爲メノミ
 ニシテ武備ノ爲メニスルニ非ズ故ニ鉛刀若クハ木刀ヲ用フ延喜式ニ
 王纏横刀須我流横刀新作横刀、ナドアルハ皆之ニ屬セシモノナラム

又衣服ハ孝德帝以後唐風ヲ學ビシニ依リテ同シ寛大ノ服ニテモ昔シ
 ト裁縫ノ變レル所モアラム又禪モ衣ノ上ノ装トナリシナリ天武帝三

衣服

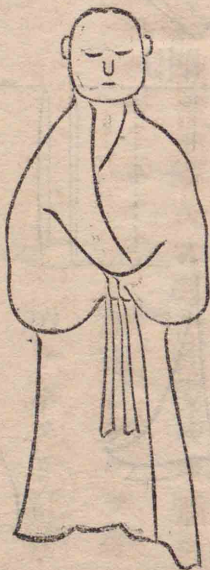
風俗

年ノ詔ニ曰ク男女並衣服者有襪無襪及結紐長紐任意服之其會集之日ノ會著襪衣而著長紐唯男子者有圭冠冠而著括緒禪ト此詔ニ據リテ見レバ當時ノ服ニハ襪アルモノアリ又結紐長紐トハ古制ノ服ニ紐アリテ中心ニ當リ其短キモノヲ結紐ト謂ヒ其長クシテ結束ノ餘下ニ垂レテ以テ飾トスルモノヲ長紐ト謂フナリ圭冠トハ即チ後代ノ立烏帽子ナリ 先是帝ノ十一年六月男子始結髮仍著漆紗冠ト云フ事アリ其後十二年ニモ十三年ニモ冠制ヲ改メラレシト見エズシテ直ニ圭冠トアレバ漆紗冠ハ即チ圭冠ノ事ナルベシ漆紗トハ其制ヲ以テ云ヘルナリ紗ニ漆ヲヌルヲ云フ圭トハ其形ヲ以テ云ヘルナリ圭ハ上圓ニシテ下方ナル物ニテ烏帽子ナリ圭冠ハ紗ニ漆ヌリテ薄ク柔カナル物ト見ユ 括緒禪トハ下ニ括緒ノアル禪ニシテ後世ノ奴袴ナリ冠ト禪ハ女子用ヒズシテ男子ニ區別セリ尋キテ持統帝ノ世朝服ノ制アリテ上下綺帶白袴ヲ通用スルトトシ玉ヒ文武帝ノ慶雲二年天下ニ令シテ脛裳ヲ脱シテ一ニ白袴ヲ着セシムルトモ

差衣
一物服

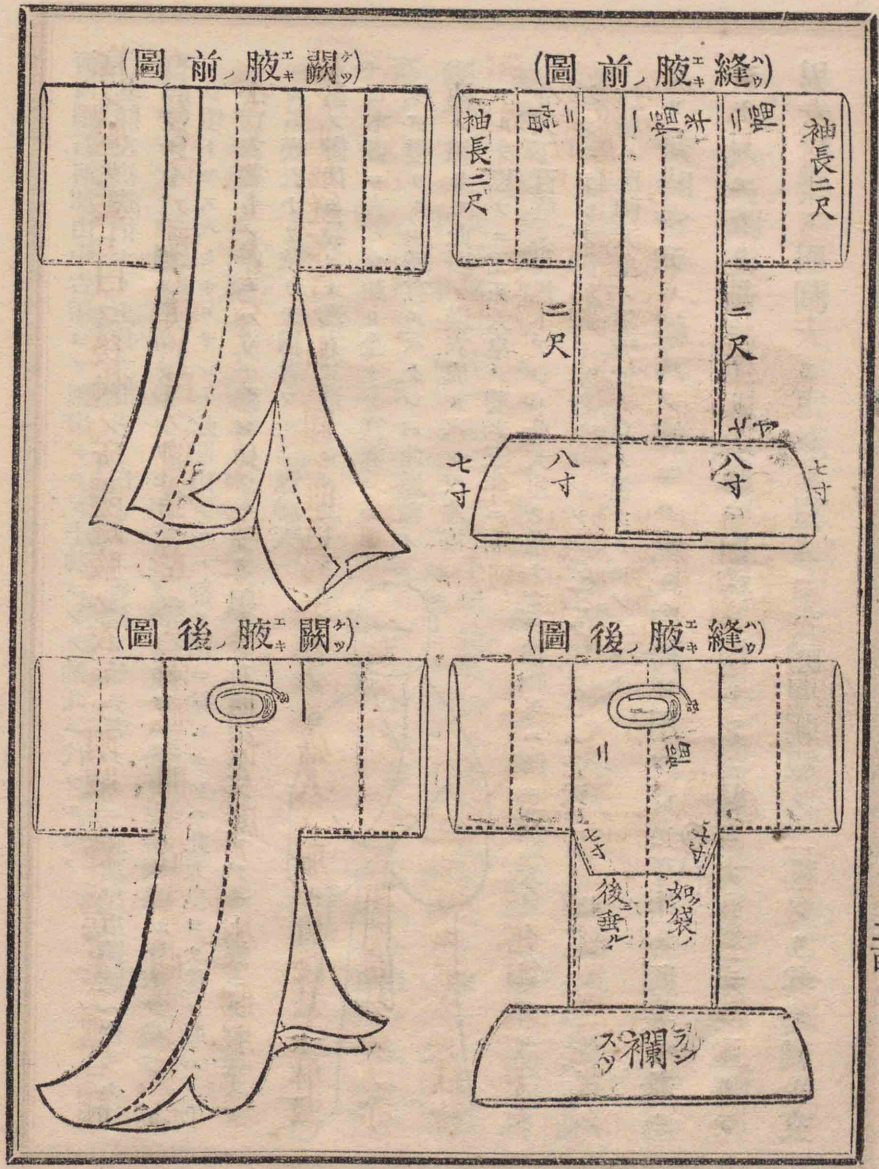
河内國石河郡山中古塚ヨリ掘出シタル土物ニシテ殉死ニ代フルモノ

其軀左袵狭袖ナリ上代衣服考ニ曰クサテ唐様ノ始ヲ考フルニ神功皇后御國へ歸ラセ玉ヒテヤガテ我國ノ風俗ヲ改メサセ玉フベクモアラテハ先ツ應神天皇ノ漢衣ヲ造ラシメシ頃トモスベキナリサレハ此掘出タルハ髮ヲ頂ニ結ヒタレハ此天皇ヨリ後ノ物ニテ我上代衣服考ノ證ニハ立チ難シ然レモ袖ノ細キハ我國振也又裾マデ一ト連ニテ打違ヘタルハ漢衣ナリ依リテ猶考フルニ應神天皇ノ御代ニ始メテ漢衣ヲ造ラシメタリ 臣本書ニ言ヒシ如ク全クノ漢衣ニハアラテ變リタル所有ルベケレバ此直輪ノ袖ノ細キモ此頃ノ漢衣成ルベシ又左袵ナルヲ思フニ元正天皇ノ養老三年ニ初令天下百姓 右襟トアレハ此天皇ノ前ナガラ袖細キハ既ニ天武天皇ノ大キナル御袖ヲ振ラセラレテ御狩野ヲ歩行セラレシヲ愛玉シ歌アレハ此天皇ヨリ前ナレバ成ルベシ此直輪ハ應神天皇ノ後天武天皇ノ前ナルモノナリト



アリ是時マデハ禮式ノ節ニハ庶民白袴ヲ用フレ臣平生ハ脛裳ヲ着ケシト見エタリ是ニ至リテ常ニ白袴ヲ用ヒシム終ニ大寶養老ニ至リテ男女貴賤ノ服制大ニ定レリ貴人ニハ禮服朝服ノ二種アリ其ニ就キ文

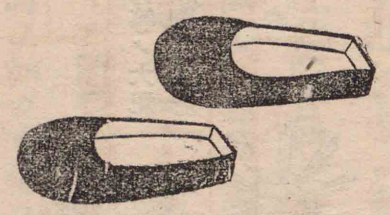
左ノ圖ニ掲ケル服ノ長短ハ人ノ長短ニ隨フト雖モ假ニ中人ノ服ヲ以テ寸尺ヲ記ス也
二百



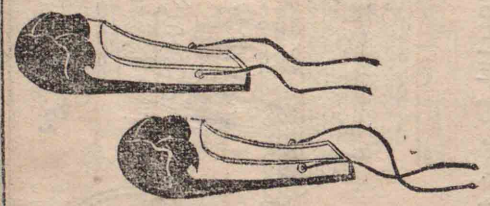
縫腋ノ衣
闕腋ノ衣

官ノ服ヲ衣ト曰フ後代ノ所謂縫腋ノ衣ニテ兩腋ヲ縫ヒ塞ギテ裾ニ襪アリ武官ノ服ヲ襖ト曰フ闕腋ノ衣ニテ兩腋ヲ開キ置キテ襪ナシ各色ニ依リテ上下ヲ分ツノミ共ニ袴ヲ穿テリ無位及庶人ノ服ハ制服ノ一種アリ裁縫文官ノ服ニ同シ唯色異ナルノミ婦人ノ服ハ貴賤共ニ鉢裁

淺履
公卿以下尋常是ヲ用フ



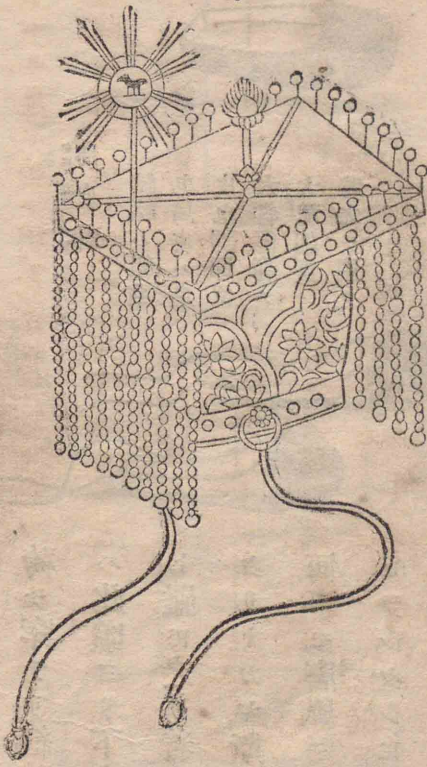
烏皮
結緒ハ組糸也烏皮ハ皂皮也御即位大嘗會等ノ大祀朝賀ノ時之ヲ用フ



粗相同クシテ亦袴ヲ穿テリ紅袴ハ此頃ヨリ下女ト雖モ之ヲ着シタリトカヤ斯ク何事モ唐風ニ擬セラレタレモ猶

玉冠

即位大嘗會等ノ大祀
ニ天子禮服御着ノ時
戴セ玉フ



左衽ノ事ノミ改ラザリシト見エテ養老三年初メテ天下ニ令シテ襟ヲ
右ニセシムトアレバ此頃ヨリ漸ク右衽ニナリシナラム當時ノ服ハ裾
短クシテ袴ノ襪露ハル、モノナリシガ漸次丈長クナリテ其裾地ニ曳
クトナレリ是ニ於テ嵯峨帝唐法ニ倣ヒ短クシテ立居ニ便ナラシメ
ムト思シ召シ弘仁中勅シテ從來衣服ノ裾ヲ短カ、ラシメ玉フ然レモ

左衽變シテ
右衽トナル

嵯峨帝服制
ヲ改ム

髮風

男女結髮ノ
令

帝ノ後其制行ハレズシテ漸次ニ長大ニ流レタリ

又髮風ハ既ニ上卷ニ記セシ如ク昔シハ男ハ美豆良ヲナシ女ハ垂髮ナ

リシガ推古帝ノ世冠位ノ制モ起リタレバ男子年長スルニ及ビテ美豆

良ニテ冠ヲ被ルニ不便ナレバ結髮シタルベシ集古十種ニ百濟阿左太
子ノ書ケル聖德太子ノ

像ヲ載ス髮ハ結髮ナリ然レモ女子ハ依然垂髮ナリシガ天武帝唐風ニ倣ヒテ男女

結髮ノ令ヲ出シ玉ヘリ是ニ於テ男女始メテ打揃ヒテ結髮シテ漆紗冠

ヲ着ケタリ此時貴賤一統ニ髮ヲ結ベルヲナリシナルベシ然レモ數百

年因襲ノ風俗ハ容易ニ改メ難キモノナレバ此法令出デシ後モ其事行

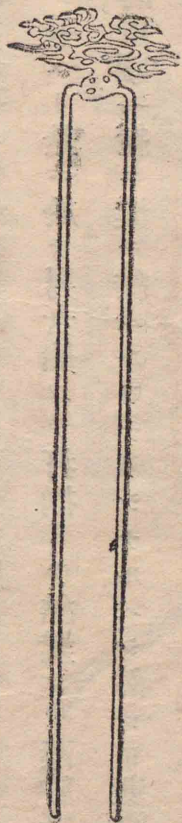
ハレザリシト見エ十二年又詔シテ女子四十歳以上ノ者ハ髮ヲ結フト

結ハザルトハ隨意タルベキノ旨ヲ達シ尋キテ翌朱鳥元年更ニ詔シテ

婦女ハ舊時ノ如ク垂髮スルフトナシ玉ヘリ本居翁ノ玉勝間ニ此事ヲ
舉ゲテ云クカクアルハ天

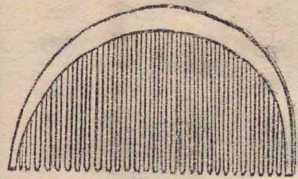
孝謙帝御簪 南都法隆寺藏

銀製ナリ摸樣ハ平ナルニ毛彫シタルニテ雲中ニ鳳凰ノ舞ヲ形ト見エタリ當時垂髮ナレハ簪櫛ナドハ無用ナルハツナルニ斯ク簪アルハ不思議ノ事ニ思ハルレハ文武帝ノ慶雲以來女子モ結髮スベキハツナレハ其制十分ニ行ハレザルモ此頃隨分結髮スルモノモアリシト見エ東大寺鴨屏風ハ繪ノ傍ニ天平勝實三年十月ト記シタルバコ、ニテ造リタル物ナリトイヘルガ其繪ノ女結髮ノ樣唐人ノ如シト云フ然ラハ帝モ亦結髮ナラムモ知ル可ラズ



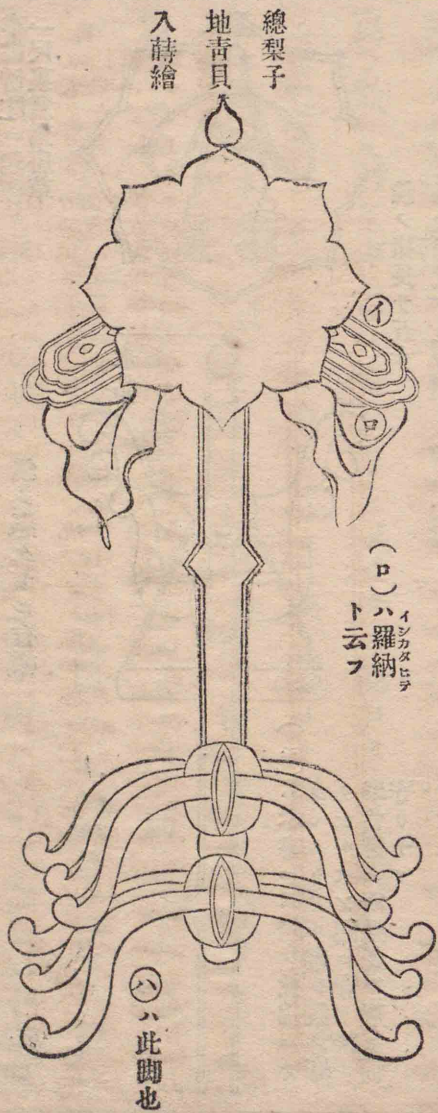
象牙櫛

此櫛ト下ノ鏡臺トハ崇徳帝ノ時ノモノニテ此期ノ末季ニ屬スレハ讀者ノ便ヲ計リテ此ニ併記ス類聚雜要卷四ニ此圖アリ大治五年二月廿一日藤原聖子中宮ヨリ皇后ニ立チ玉フ時ノ御調度ノ一ナリ傍註ニ櫛ノ大サ幅一寸八分豎ノ寸法見エズ髮上ゲノ時用フトアリ

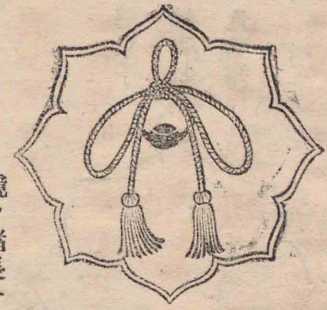


鏡臺

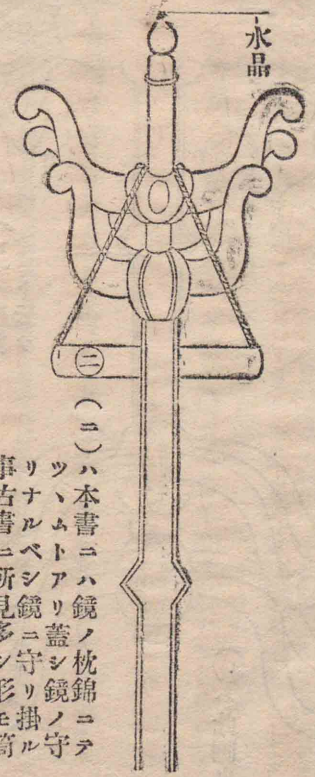
類聚雜要ニ此圖アリ大治五年二月廿一日藤原聖子中宮ヨリ皇后ニ立チ玉フ時ノ御調度ノ一ナリ



本書傍註ニ鏡徑一尺裏爲鶯唐草



鏡ノ緒長サ五寸五分總三寸五分



鏡ヲ懸ケザル有樣

(ニ)ハ本書ニハ鏡ノ枕錦ニテツハムトアリ蓋シ鏡ノ守リナルベシ鏡ニ守リ掛ル事古書ニ所見多シ形モ筒守リナリ

女子垂髮

皇御病アリテ御祈事ナドアリシ時ノ事ニテ神代ヨリノ風ヲ改メラレシヲ畏ミ玉ヒテニヤアリケムト然レモ此說甚信シ難シ蓋シ結髮ノ風實際ニ行ハレザルヲ以テ此令アリシナラム 文武帝ノ慶雲二年又天下ノ婦女ニ令シテ神部、齋宮、官人及ビ老嫗ヲ除クノ外一切結髮セシメ玉ヘリ然レモ此制亦十分後世ニ實行サレザリシト見エ中昔ニモ貴賤渾ベテ垂髮ナリ但シ

勞働繁キ女ハ結髮ス

勞働繁キモノハ往々結髮スルノ風アリ故ニ宮女中天子ノ膳部ヲ掌ルモノハ元結ニテ垂髮ヲ結ヒアゲテ額ヘ櫛ヲ刺スナリ斯クスルハ垂髮ニテハ髮ノ毛御膳具ヘ觸レテ穢ル、等ノ事アレバナリ 此他ニ櫛ヲ刺モ用フルコトナシ是レ當時ノ髮風ニ不適當ナレハナリ

兒童ノ髮風

兒童ハ此期ノ初メ美豆良ノ風猶行ハレシ所アリシニヤ孝謙帝ハ美豆良ノ歌ヲ詠シ玉ヒシコトモアリシガイツノ時ヨリカ此風廢レタリト見エ其髮風モ一變セリソハ男女共ニ三歳ノ頃ヨリ初メテ髮ヲ生シ 此時男女共ニ缺子(剪刀)ヲ以テ髮ヲ剪ミ落トセリ 童子ハ髮ヲ結ヒテ後ヘ長ク垂レ置キ髮ノ先ヲハ肩ノ下邊ニ切ルナリ是ヲ喝食姿ト曰フ又髮ノ先ヲ切ラズ下ゲ髮ニシタルモ有リ是ヲ兒姿ト曰フ女兒モ大抵此風ニテ三歳ヨリ前ヲバ眉ノ少シ上ニ截リ揃ヘテカキタラシ其餘ノ髮ヲ肩アタリニ垂ラシ十歳過

喝食姿 兒姿

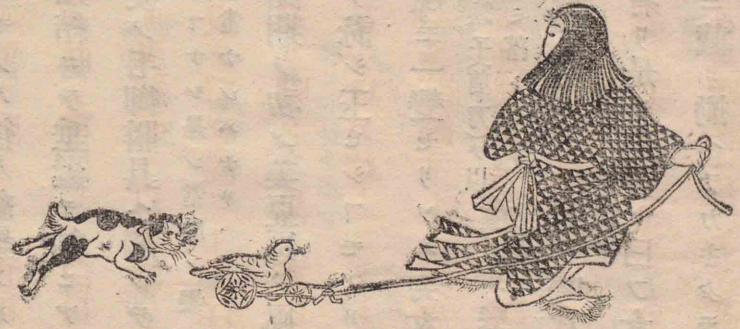
ウナ井

「ウナ井」

「ワラハ」

髪上ケ

此圖古キ
繪卷ニ見
エタリ髪
ハ「ウナ井」
ニテヤア
ラ山



マテ此風ナリ之ヲ「ウナ井」ト曰フ十三
四以上ニ至レバ髪稍長クシテ帶ニ至レ
リ之ヲ「ワラハ」ト曰フ 斯ル振分髪ノ間ハ
成長ニツレテ髪モ
伸ヒ易ケレバ一年ノ中ニ 而シテ男ヲ定
二度許モ剪揃ユルヨシ
ムレバ髪上ゲシテ此振分髪ナ一ツニ結
ヒ集メ擧ゲテ其末ハ背後ヘ垂ラシ置ク
ナリ 此時髪曾岐鬘曾岐トイフ事ヲナス曾
岐トハ切ル事ナリ聳殿來リテソグナ
リ此時女子ハ基盤ノ上ニ立チテ居ルヲ聳
殿其後ヘ廻リ櫛ヲ取リテカキナデツ、髪
ヲ先ト鬘ノ髪 又未タ男定メズ凡ソノ年
頃ニナリヌハ髪上ゲスル事モアリシ
ト見エタリ

化

家屋

信長
徳川

當時婦人ハ髪ヲ潤スニハ油綿トテ綿ニ香油 此時今日ノチ漬シ置キテ
如キ油ナシ
之ヲ塗抹ス面ヲ粧フニハ白粉燕脂ナドアリテ白粉ハ顔ニ塗り燕脂ハ
頬ニ着ケリ又鏡漿ヲ以テ齒ヲ染ムルヲモ既ニ行ハレ鑷子ニテ眉毛ヲ
抜キ墨ヲ以テ眉ヲ畫クヲモ行ハレタリシト見エタリ
コレヨリ筆ヲ轉シテ更ニ家屋ノ制ヲ述ベムニ文武帝ノ大寶元年官舎
ノ屋ハ皆瓦ヲ以テ葺クヲトナレリ然レ凡士民ノ家ハ京師ト雖凡猶板
屋草舎ニシテ藻飾モナケレバ聖武帝士民ノ資アルモノニ瓦屋ノ家ヲ
作り飾ルニ丹堊ヲ以テスルヲ許シ玉ヒシカハ市中始メテ瓦屋ノ家
多キニ至リキ 然レ凡地方ノ人家ハ大抵木柴垣ヲ結ビ
廻ラシタル中ニ在リテ小サキ草屋ナリ 桓武帝延曆中都
ヲ平安ニ遷シ玉フニ及ビテ華美ヲ好ミ玉ヒ大極殿ヲ營ムニ一ニ唐風
ニ擬シ葺クニ碧瓦ヲ以テス其他青龍樓、白虎樓、栖鳳樓、翔鸞樓、東朝集

風俗

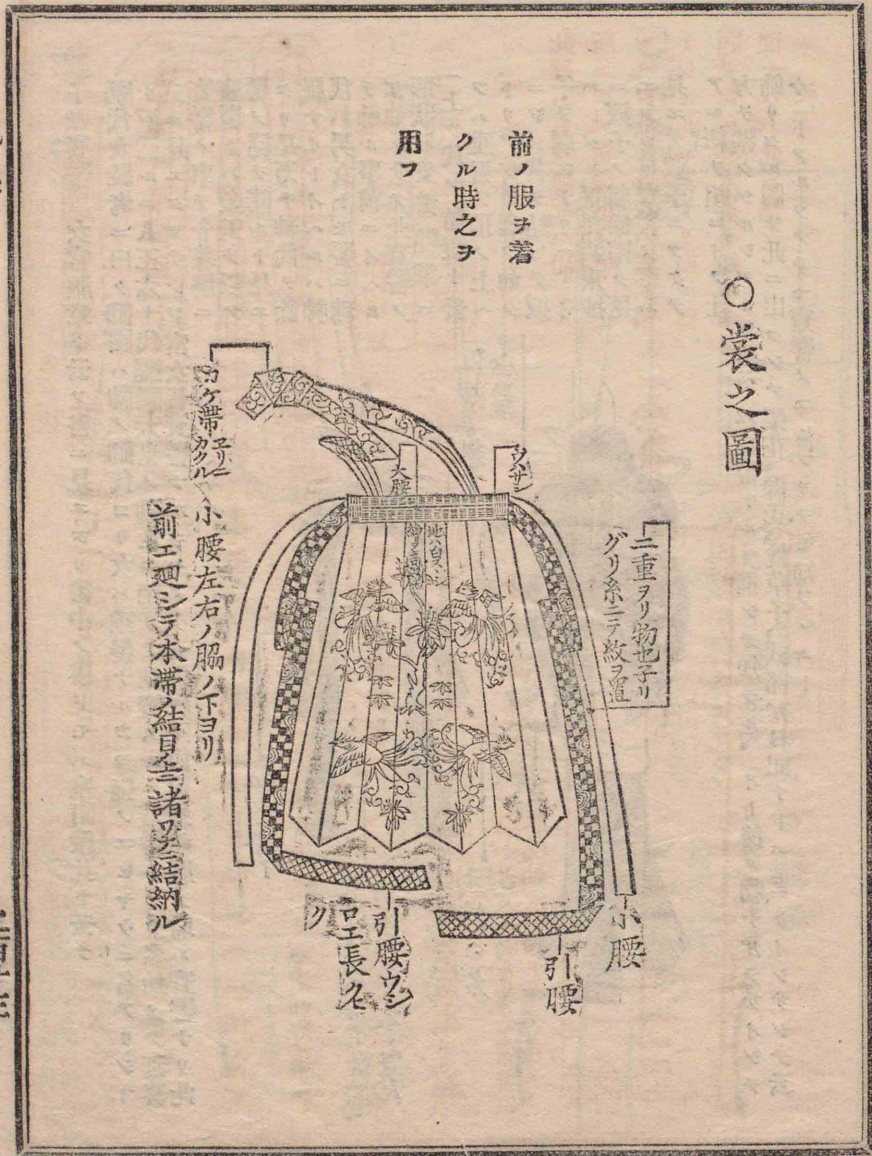
第宅次第ニ
宏麗トナル
其規模

寛平延喜以
後ノ有様
風俗奢侈

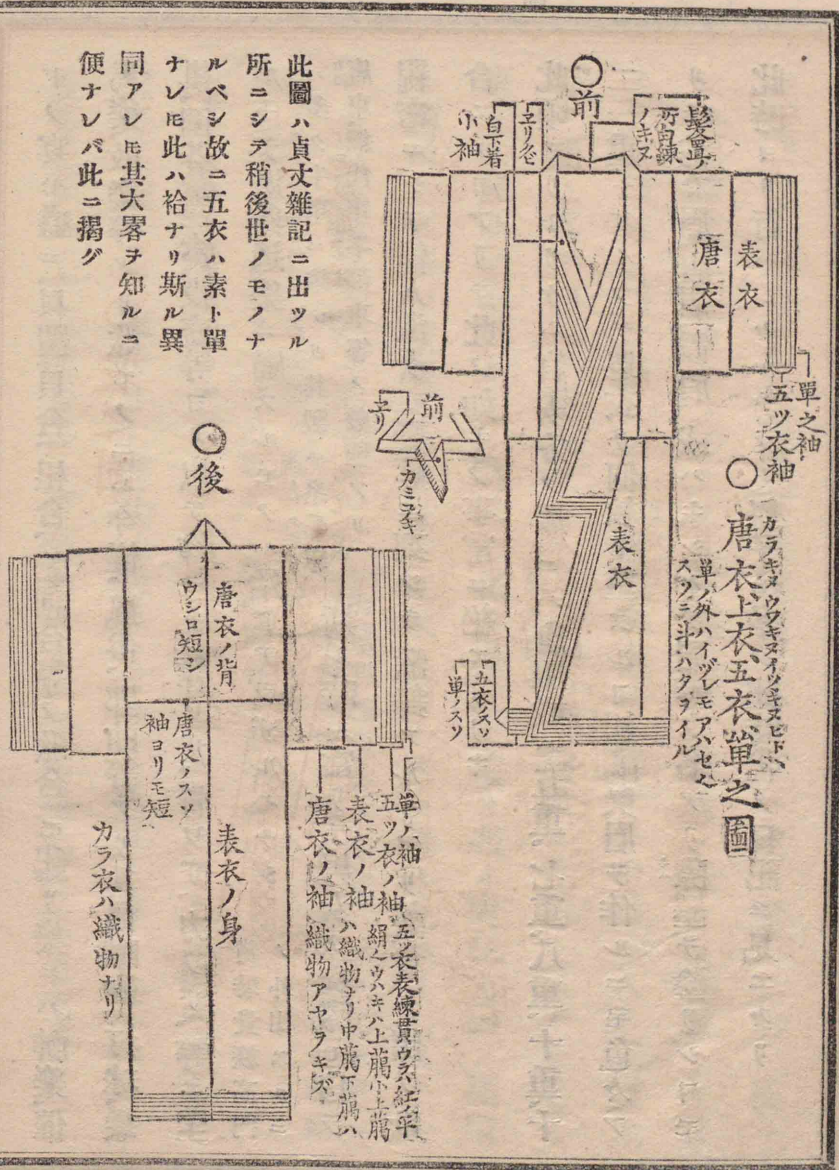
堂、西朝集堂等アリテ規模壯麗、建築ノ盛ナルヲ此ニ至リテ殆ド極マ
レリ爾後此風臣下ニモ移リテ其第宅次第ニ宏麗ヲ極メ其躰裁ハ大概
子先ツ門アリ門ヲ過グレバ車宿クルマヤドアリ車ヨリ降りテ中門ニ入り南庭ヲ
經テ更ニ北ニ向ヒテ寢殿ニ昇ル寢殿或ハ母屋ト曰フ寢殿ノ左右ニ屋アリ是ヲ
東ノ對屋西ノ對屋トイフ寢殿ノ北ニ屋アリ是ヲ北ノ對屋ト曰フ寢殿
ト對屋トノ間ハ皆廓アリテ以テ往來ニ便ニス其他ニ尙數町ノ地ヲ占
メテ大厦高樓ヲ營メルモノ多シ延曆以後縉紳ノ第宅ハ復タ瓦ヲ用ヒ
ズ檜皮ヲ以テ葺クモノ多シ但シ朝廷
之ヲ令セシニ非ス建築ノ風一變スルナリコレヨリ後
瓦ヲ以テ屋ヲ葺クモノハ朝廷ノ外唯佛寺ニ止マレリ
以上ハ寛平延喜頃マデノ事ヲ記セシモノナリコレヨリ其後ニ發スル
沿革ヲ記セムニ此時ヨリ後世ノ泰平ニツレテ九重ノ内ヨリ月卿雲客
ノ家ニ至ルマデ風流奢侈ノ事漸ク行ハレ梅花、蓮葉、萩花、菊花、曲水ナ

衣服及粧飾
ノ有様

下ノ宴モ盛ニ、貝覆、貝合、根合、艶詞合等ノ歌合モ起リ樂ニハ神樂、催
馬樂、散樂等アリ歌モノニハ今様、風俗、鄧曲等アリ其他蹴鞠、打球、象
棋、圍碁、雙六、投壺等ヨリ以テ物マテ、聲ワザ、骨ワザ、力ワザ、等ニ至
ルマデ遊興逸樂ニ屬スルモノハ殆ドアラザルハナシ當時貴族高門
ハ多ク牛車ニ乘レリ其製ニ糸毛車
ノ外出スルコ
唐車、網代車、半蒔車等ノ數種アリ斯ル時ニ當リテ男女ノ交際モ自ラ
親密ニシテ佳人淑女ハ饗筵ニ列シテ歌舞スルヲアリ歌會ニ出テ歌
合スルヲアリテ此ノ如キノ事常ニ絶エザリキ
此頃ヨリナリケム官女方ノ服ニハ唐服或ハ五重、七重、八重、十重、十
二一重ナドイフテ單衣ヲ何枚モ重ヌルヲ起リ又眉ヲ作ルニモ色々ア
リテ茫々眉、唐眉、霞眉、或ハキシタテ眉等ノ名アリ際墨ヲ塗りシキモ
此時ヨリ行ハレタルナラム釵子モ多ク此時代ノ日記ニ見エタリ



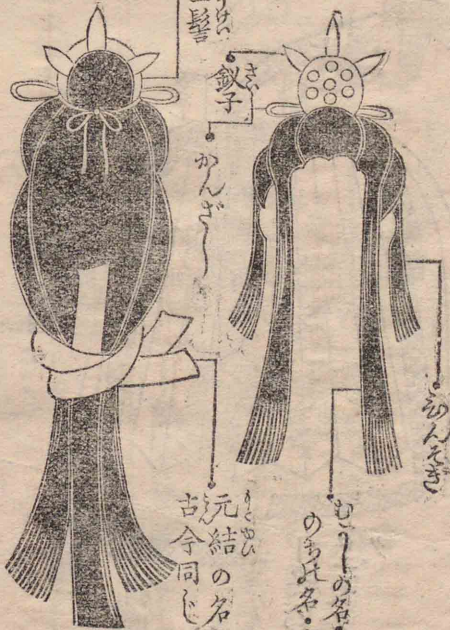
此圖ハ貞丈雜記ニ出ツル
所ニシテ稍後世ノモノナ
ルベシ故ニ五衣ハ素ト單
ナレト此ハ拾ナリ斯ル異
同アレト其大畧ヲ知ルニ
便ナレバ此ニ掲グ



釵子及寶髻

女官服章ト云フ書ニ見エタリ書中ノ事トモハ室町殿比ト云フ

歴代女裝考ニ曰ク御國ハ神ノ御代ヨリ女ハ垂髮ナルカラ髮ノユヒヤウニ名アリシコ
 ナシ然ルニ人王六十代醍醐天皇ノ御世ニ至リテ結髮スルニ寶髻トイフ名始メテ延喜
 式ニ見エタリサレド宮女皆寶髻ナルニハアラズ内親王内命婦禮服ノ時ハ寶髻ナリ此
 寶髻トハ金玉ヲ以テ
 髻ノ緒ヲ飾ルト見エ
 タリ是乃チ神代ノ餘
 風ナリトイヘルハ神
 代ハ男女トモ髻ニ珠
 ナ飾ル事前ニイヘル
 ガ如シサテ此寶髻ノ
 形狀ハ安齋隨筆ニ
 「上ツ代ノ結髮ト云
 フハ垂髮ヲ頂ノ上ヘ
 トリアゲテ瘰ノ如ク
 ニシテ其ヲ結ヒテ釵
 子ヲ刺スナリトイ
 ハレタリ雅亮裝束抄
 ニ釵子ノ刺樣精ク見
 エタレヒ寶髻ノ事ハ
 見エズ釵子ニツケテ
 アル紐ヲ頭ニイフ仕
 方ヲ精クシルシアル
 飾リタル圖ヲ此ニ出
 タシテ榮花源氏枕草
 子式部ガ日記ナドニ
 モ「サイシサシテ云
 々」トアルソノサマ寶
 髻ノユヒヅリヲモ知
 ラシムト



この名は宝髻の
のち此名大いん

元結の名
古今同じ

○狩衣前

狩衣ヲ着スル時用フル袴ナリ亦狩
袴又ハ奴袴ト曰フ腰板ナシ

○指貫前

サシヌギノマエ

○盤領

古ハフサのキクドデヲ有
タルモアリ盛衰記ニ
渡辺競カ狩衣ニキク
トヂ大キラカニシタル事
ミヘタリ

○水前

○キクトヂ

半幅
一幅

袖ノキクトヂ
○キクトヂカハ入徑ノ
カチサシテテ可共カ
バカリ也

着ス時ハ袴ノ
内ハ入レテ着ル也

狩衣ノスツラハ袴外出シテ
着ル也犬追物ナド時ハ袴
ノ内ハ入ルナリ

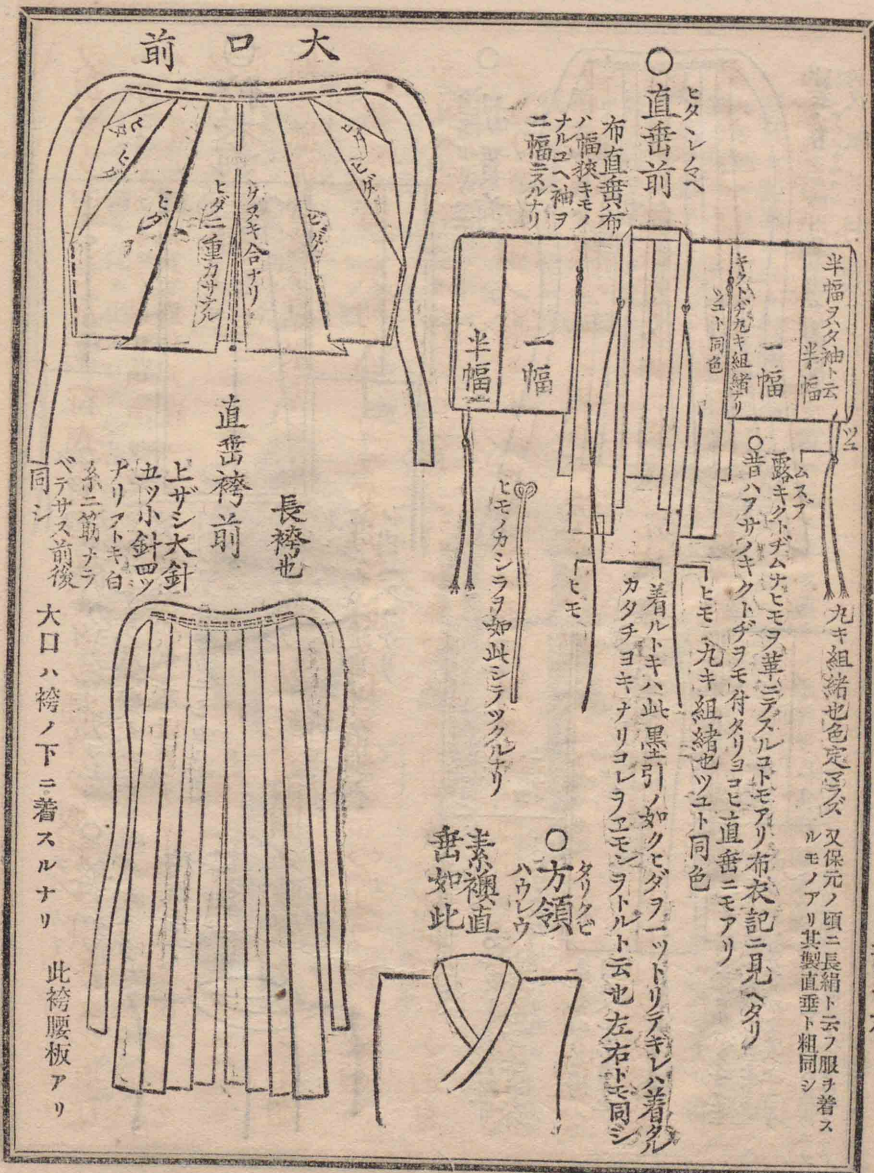
○水前

○キクトヂ

半幅
一幅

○ヤサタノ時ハ袖ノ右ノ手ノミ
テクハリコセテ結ニテニヒコ也
左ノヤサハカタヌク也其上ニミテ
ヲサスナリ

水干ノ袴ハ長袴ニシ
直垂ノ袴ト異ナルナシ



貴女外出ノ
有様

男女交際ノ
有様
婚姻

遊女

又男子ノ服ニモ水干、狩衣、直衣ナドイフ種々ノ服起レリ
ハ少ナカリシガ其中頃ヨリ之レアリテ其狀ハ垂レタル髪ヲ小袖ニ着コ
メテ兩ノ襷ヲツボオリ前ニ挿ミテカツキヲ被ルアリ市女笠ヲ被ルアリ
或ハカツキノ上ニ市女笠ヲ被ルアリ

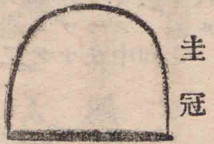
斯ル風流奢侈ノ結果トシテ風俗モ痛ク亂レテ閨闈ノ政修マラズ婚姻
スルニモ昔シハ媒人ヲ立テ父母ノ許ヲ得テ爲スモノナリシガ此頃ハ
多クハ媒妁ニモ藉ラズ父母ノ許ヲモ待タズ唯互ニ詩歌ノ類ニテ消息
スルナリ此頃ノ歌集ドモニ戀歌ノ多キモ主トシテ此ニ由リシト云ヘ
リ且此頃ノ風トシテ男子ハ大方家ニ娶ラズシテ女子ノ家ニ通ヒ往ク
コナリキ此時遊女ナドモ多ク出テ來リテ河内國江口、攝津國神崎蟹
島ナドノ河邊ニ門戸ヲ比ベテ居リ旅行ノ人ヲ見ルトキニハ紅粉ヲ粧
ヒ綺羅ヲ飾リ扁舟ニ乘リテ旅船ニ來リ歌舞ナドシテ客ノ心ヲ喜ハシ

強裝束額
帽子

ム之ヲ愛シテハ妻妾トスルモノモアルニ至レリ斯ル次第ナレバイツ
トナク百姓帶刀ノ禁モ弛ミ惡徒刀ヲ帶シテ郷里ニ横行スルモノアリ
又南都北嶺ノ僧徒等モ兵仗ヲ帶スルコトナリ又其後世ノ亂ル、ニ
從ヒ勇士浪徒ハ一身ニシテ二四刀ヲ帶ブルモアリテ其長キハ四尺餘
ニ至レリト云フ然レモ平安城裏ノ奢侈風流改マラズシテ鳥羽院ノ時
ニ強裝束、額帽子シヤカナド始マリタリ此時ノ前ニハ斯ル事未ダアラズシ
テ裝束ハ稜シヤカナク柔ニ、冠モ強ク塗ルコトナク額シヤカナド云フモノモナカ
リシガ院ノ時代ニ花園左大臣有仁公アツヒト後三條帝ノ皇孫ニシ
テ父ハ輔仁親王ナリ 特ノ外花奢
風流ヲ好ミ院ト計リテ麻布ノ大帷子オホカサビニ糊強ク付ケテ裝束ノ下ニ重子
テ肩ノ邊、左右ノ臂ノ邊、其外裝束ノ折レタル所ハ内ヨリ突張タル如
クニ稜シヤカヲ付ケラレ袖モ長ク丈モ長クナリ鳥帽モ強ク塗リテ額シヤカナド云

冠ノ圖

貞丈雜記ニ曰ク古ノ鳥帽子ハ今ノ世ノ鳥帽子ノ如ク強ク塗り固ムル事無之古ノ鳥帽子
ハ薄ク柔ニテ如何様ニモ折ラル、也(鳥羽院ノ以前)云々ト
又曰ク衣服令ニ禮服ノ條ニハ冠トアリ朝服ノ條ニハ頭巾トアリ此頭巾ニ羅ト縵トノ品
アリ羅ハ貴ク縵ハ賤シ此頭巾ハ後代ノ「エボウシ」ナルベシト
斯ク上代ノ冠ハ立鳥帽子即チ圭冠ナル故ニ之ヲ手ヲ以テ額ヨリ頭ヘ撫テヤリ髻ノ前ニ
テ絞リ寄セテ小紐ニテ括レハ髻ノ入りタル所今ノ巾子ノ如クナルナリ燕尾ハ(縵ノ下
也)其小紐ニテ付ケテアルベシ後代ノ纒ノ垂樣ノ如クナル勢ハナク只直ニ垂ル、ナリ
左ノ圖ヲ參觀スベシ



圭冠



圭冠髻ノ所ニテ絞
リ寄セタル体也

今ノ巾子



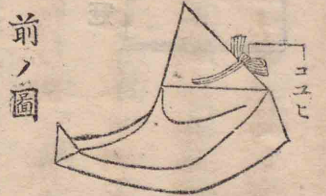
燕尾

カケ緒

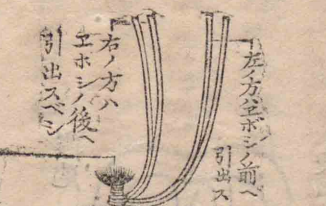
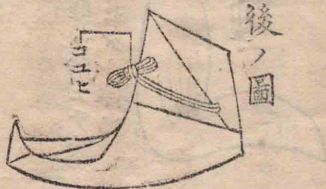
此小紐ニテ絞リ寄タル所ヲ結

古代ノ小結ノ圖

コユヒハ緒ニ筋ヲ結ビテマナキリノ中ノ如ク入ル



マキニケテ穴ヲ通スナリ



貞丈雜記ニ曰ク上古ノ折烏帽子ハ薄ク柔ニテ立烏帽子ヲ折リテ折烏帽子ニシタル也
サレバ「マ子キ」(三角ナル所ヲ云フ)モ二重ニナリテ袋ノ如シ其中ヘ髪ノ髻ヲ入レテカ
ブリシナリ
又曰ク折烏帽子前ニイフ如ク立烏帽子ヲ折リテカブル故ニ風口(額ノ上ノ穴也)ナドモ
ナキ也今ハ固ク塗リテ「マ子キ」ヲ切離シテトリオキニシ額ノ上ニ風口トテ穴ヲアケ
又テウツカケテ付クル爲メニ針金ヲ曲ゲテ烏帽子ニ打チ置ク也此等ノ事昔ニ替ナリ云
々ト

女子ノ風男子ニ移ル

家制又一變

民間ノ有様

フ事モ出デニキ又此時男子ニ女風移リテ眉ノ毛ヲ抜キ髭ヲハサミ鐵
漿ヲ以テ齒ヲ黒メ白粉ヲ塗り紅脂ヲ付クル等女ノマ子ヲスルコトモ
始マリ 亦有仁公ノ始メラシガ遂ニ武士ニモ其風移リテ保元平治以來
ノ合戦ニ公家ヨリ向ハル、大將ハ大概子皆薄化粧ニ眉ヲ作り鐵漿ヲ
付クル事ニテ有リシ唯東國ノ武士ハ未タ此風ニ染マザリシト見エタ
リ
斯ル風流ノ世ニ在リテハ家屋ノ風モ一變セリ元來臣下ノ第宅ハ規模
高カラザリシガ寛仁二年藤原道長京極ノ第ヲ造ルニ之ヲ高クセシカ
バ以來搢紳ノ第宅皆之ニ倣ヒコレヨリ後ニ舊來ノ低矮ナル建築風ヲ
稱シテ古代造又昔造ト云フ
以上ハ多ク大宮人ニ關スル事ナリシガ今民間ノ有様ヲ記サムニ商賈

結髪

賤男ノ服

食物

獸肉

ノ家ハ重ニ棚ヲ構ヘ脇ニ入口アリテ長キ暖簾ヲ掛ケ軒ニ塵ヨケアリ
 板或ハ席ニテ作レリ又市中物賣リアルクモノアリ重ニ婦人ニシテ多
 ク頭ニ物ヲ戴ケリ之ヲ販婦ト曰フ此等ノ若キ仕事勝ナル賤女ハ垂髮
 ニテハ不便利ナレバ髮ヲ上ゲ笄ヲ刺シテ髻ヲ固メ「ツノグル」トイフ
 髮風ニセリ 髮ヲクルクルト卷キテ笄ヲ刺ス故ニ笄ハ角ノ
 如シツノグルト云フ笄モ昔ノモノハ甚短シ 然レハ勞動
 繁カラザルモノハ矢張多ク垂髮ニシ又賤男ハ皆烏帽子ニ直衣ヲ着セ
 リ
 コレヨリ貴賤ノ用ヒシ食物器具ノ有様ヲ尋ヌルニ食物ハ上古ヨリ貴
 賤一般重ニ肉食ナリシカレ天武帝佛法ヲ好ミ牛馬犬猿雞ノ肉ヲ禁シ
 玉ヒシヨリ此等ノ肉ハ食ハザルトナレリ然レハ他ノ肉類ヲ食フコ
 隨意ナレバ猪肉ナドハ尙食ヒ來リシナラム上ツ代ハ猪肉ハ甚珍物ニ

酒飯、タレ
 味噌、菓子

饗宴ノ器具

蠟燭

燭具

シテ皇子御齒固ノ時ナド之ヲ供スルコトナリ然レハ此レ亦イツノ頃ヨ
 リカ穢レトシテ食ハザルコトナレリ
 酒モ今ノ如ク清酒ニアラズシテ濁酒ナリ米飯ハ上古ノ如ク強飯ヲ用
 フ、味ツクル品ハ醬油未タアラズシテタレ味噌ナリト云フ菓子ハ砂
 糖ニ乏シケレバウルノ粉麥粉ニ甘葛煎アマモヲ和シ種々ノ形ニ造リ多クハ
 油アゲニシタルモノナリ
 宮中及ビ貴紳ノ饗宴ニハ高キ臺ニ盤ヲ置キ食物ヲ器物ニ盛リテ之ニ
 列置セリ器物ハ品々アリテ其種類ニ磁器、陶器、漆器等アリ
 蠟燭ハ其製法未タ起ラズシテ舶來品ニ限リシガ如クナレバ養老令ニ
 蠟燭ノ事見エシモ實際之ヲ用フルコト甚稀レニシテ重ニ燈油ヲ用ヒタ
 リ而シテ燭具ハ結燈臺、切燈臺、燈籠ノ類トス

日本史綱中卷畢



明治二十年十二月三日版權免許

明治二十一年五月三十一日印刷

明治二十一年六月二日出版

明治二十一年十一月廿二日訂正再版印刷

明治二十一年十一月廿四日出版

明治二十二年二月第三版出版

文部省檢定濟

中學教師範學校
歷史科教科用書

版 權
 嵯 峨 小 林
 二 名 ノ 檢
 印 ナ キ モ
 ノ ハ 偽 版
 ナ リ
 所 有

編 者 兼 發 行 者
 富 山 縣 平 民
 嵯 峨 正 作

東 京 牛 込 區 津 久 土 前 町
 三 十 一 番 地

發 行 者
 東 京 府 平 民
 小 林 新 兵 衛

東 京 日 本 橋 區 通 貳 丁 目
 十 三 番 地

印 刷 者
 下 村 初 太 郎

東 京 日 本 橋 區 川 瀨 石 町
 三 番 地

特 約 賣 捌 人
 西 原 國 太 郎

東 京 日 本 橋 區 下 植 町
 九 番 地



広島大学図書

2500003753



2500003753